

# 奈良市埋蔵文化財調査年報

令和3(2021)年度



奈良市教育委員会

2024

# 奈良市埋蔵文化財調査年報

---

令和3(2021)年度

奈良市教育委員会

2024



## 例 言

1. 本書は、令和3（2021）年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と、研究成果を取録したものである。

ただし、令和3年度に実施した調査のうち平城京跡第752・760・761・763・764次調査については、次年度以降に報告の予定であるため本書には収録していない。

また、富雄丸山古墳第5次調査は平成29(2017)～令和2年度に実施した同第1（測量調査）～4次調査と併せて『富雄丸山古墳 発掘調査報告書1 ー第1～5次調査ー』（2022）に報告したため本書には収録していない。

同様に、史跡大安寺旧境内第154次調査については、令和6年度発行予定の『史跡大安寺旧境内Ⅱ』で報告するため本書には収録していない。

2. 令和3（2021）年度～令和5（2023）年度の埋蔵文化財に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育部

文化財課

課 長 松浦五輪美

課長補佐 宮崎正裕（令和5年度） 松石明久（令和3・4年度）

記念物係

係 長 池田裕英

主 任 小林広育

主 務 原田香織 永野智子

再任用職員 篠原豊一（令和3・4年度）

埋蔵文化財調査センター

所 長 鐘方正樹

所長補佐 中島和彦 松石明久（令和5年度 管理係長事務取扱）

管理係

係 長 森田孝一（令和3・4年度）

主 務 山前智敬

再任用職員 松村健次（令和3年度は主任）

調査係

係 長 久保邦江

主 任 安井宣也

主 務 吉田朋史 菊井佳弥（令和4年度から）

主 事 鈴木（高岡）桃子

技 術 員 三澤朋未（令和3年度）

再任用職員 秋山成人（令和3年度は主任）

活用係

係 長 原田憲二郎

主 務 村瀬 陸（令和3年度は主事）

技 術 員 山口等悟（令和4年度から） 柴原聡一郎（令和5年度から）

再任用職員 森下浩行

3. 発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

HJ 平城京跡	DA 史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡（以下、附石橋瓦窯跡を省略）
AD 赤田横穴墓群	TOM 富雄丸山古墳

5. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

SA（柱列・塼）	SB（掘立柱建物）	SD（溝・濠・溝状遺構・暗渠）	SE（井戸）
SF（道路）	SK（土坑）	SX（その他）	

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

6. 本文中で示した過去の調査については、調査次数等の前に下記の略記号を使用して調査機関を表記した。

奈良市教育委員会	一遺跡略記号 次数
独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所含む）	一 国 次数
奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所	一 番号または調査年

7. 本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代 軒瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996
土器：『平城宮発掘調査報告書VII』奈良国立文化財研究所 1976
『平城宮発掘調査報告書XI』奈良国立文化財研究所 1982
古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
弥生時代 土器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所 2003

8. 発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」（1/2,500）を、また調査地位位置図については、国土地理院発行の1/25,000の地形図を利用した。

9. 本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位（m）を省略した。

10. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

11. 執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員等が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。

12. 本書の執筆および編集は令和5年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 鐘方正樹、所長補佐 中島和彦の助言を得て、久保邦江と鈴木桃子が編集を担当した。

表紙写真：「AD第6次調査 17号墓出土陶棺」

## 目次

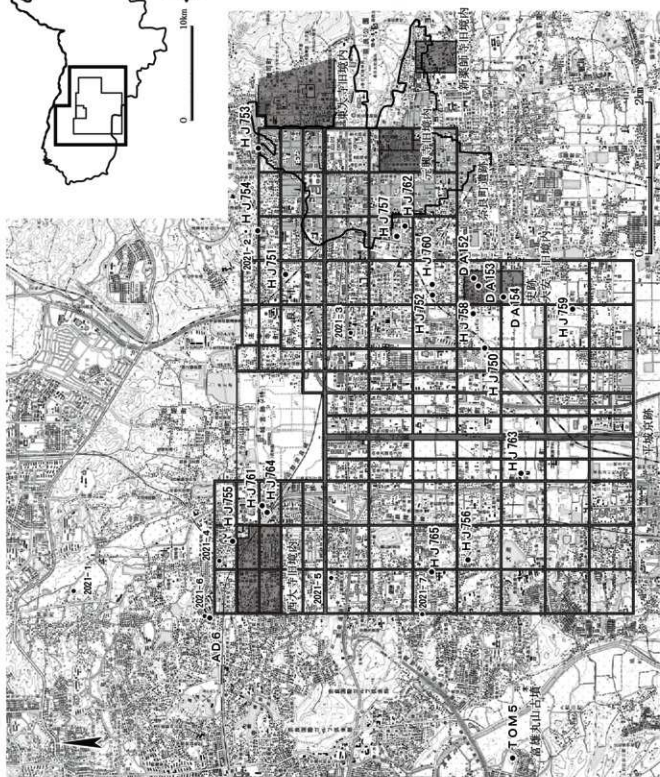
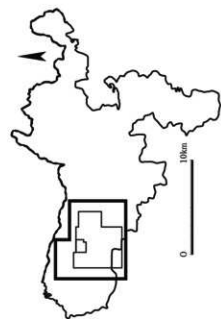
### 第1章 令和3(2021)年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告

1. 平城京跡(左京六条三坊三坪)の調査	HJ第750次	3
2. 平城京跡(左京二条四坊九坪)の調査	HJ第751次	36
3. 平城京跡(左京一条七坊五坪)・奈良町遺跡・多聞城跡隣接地の調査	HJ第753次	38
4. 平城京跡(一条条間路(東五坊))の調査	HJ第754次	42
5. 平城京跡(右京北辺三坊三坪)の調査	HJ第755次	44
6. 平城京跡(右京六条三坊十六坪)の調査	HJ第756次	46
7. 平城京跡(左京四条五坊十一坪)の調査	HJ第757次	47
8. 平城京跡(左京六条三坊十五坪・六条条間北小路)の調査	HJ第758次	49
9. 平城京跡(左京八条三坊十四坪・東三坊大路)の調査	HJ第759次	52
10. 平城京跡(左京四条五坊十三坪)の調査	HJ第762次	54
11. 平城京跡(右京五条四坊二坪)の調査	HJ第765次	57
12. 赤田横穴墓群の調査	AD第6次	59
13. 史跡大安寺旧境内の調査		92
(1)池井岳または賤院の調査	DA第152次	93
(2)池井岳または賤院の調査	DA第153次	95
14. 令和3年度実施 遺跡有無確認踏査一覧		96
15. 令和3年度実施 工事立会一覧		96

### 第2章 令和3(2021)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

### 第3章 研究報告

平城京出土軒瓦の新種・参考資料について	115
---------------------	-----



令和3(2021)年度 発掘調査位置図

令和3(2021)年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積 ㎡	調査 担当者	調査原因・事業内容/ 届出者・申請者等	事業 区分	届出等 受理番号	
1	HJ 750	平城京跡 (左-6-3-3)	八条四丁目 684-1他	2021.5.10～ 2022.2.24	3,100	安井・三 澤・久保	JR 新駅西口駅前広場跡 整備事業/奈良市長	公共	R.2.3126
2	HJ 751	平城京跡 (左-2-4-9)	法蓮町 410-7、-10	2021.5.10～ 5.25	89	久保	有料老人ホーム新築/ 株式会社八重板	原因者	R.3.3006
3	HJ 752	平城京跡 (左-5-4-2・7)	大安寺七丁目 681-1他	2021.5.20～ 11.16	2,041	鈴木	JR 奈良駅南特定土地 区画整理事業/奈良市長	公共	H12.3145
4	HJ 753	平城京跡 (左-1-7-5)・奈良町遺跡・ 多聞城跡隣接地	川上町 563 番3他	2021.5.28～ 6.7	186.25	中島・ 久保	宅地造成/株式会社 Dear	原因者	R.3.3395
5	HJ 754	平城京跡 (一条条間路(東五坊))	法蓮町 775 番、786 番他	2021.7.26～ 7.30	106	久保	個人住宅新築/東都(香 港) 實業有限公司	原因者	R.3.3105
6	HJ 755	平城京跡 (右-北辺-3-3)	西大寺本町 264-9	2021.9.6～ 9.14	102	中島	保育園新築/株式会社 nexu	原因者	R.3.3218
7	HJ 756	平城京跡 (右-6-3-16)	六条一丁目 801-1、803	2021.9.13	80	中島	宅地造成/個人	原因者	R.3.3289
8	HJ 757	平城京跡 (左-4-5-11)	杉ヶ町 40 番1	2021.10.18～ 11.11	156	秋山	共同住宅新築/個人	原因者	R.3.3327
9	HJ 758	平城京跡 (左-6-3-15・六条条間北 小路)	大安寺三丁目 85 番 2、85 番 5、 86 番	2021.11.8～ 11.11	62	中島	宅地造成/大和ハウス工 業株式会社	原因者	R.3.3254
10	HJ 759	平城京跡 (左-8-3-14・東三坊大路)	東九条町 498 番 1、499 番、502	2021.12.1～ 12.17	176	秋山	宅地造成/株式会社 ハ ウスプロジェクト	原因者	R.3.3660
11	HJ 760	平城京跡 (左-5-4-7)	大安寺七丁目 676-5他	2021.11.24～ 12.24	324	鈴木	JR 奈良駅南特定土地 区画整理事業/奈良市長	公共	H12.3145
12	HJ 761	平城京跡 (右-1-2-11)・一条条間路)	西大寺堂町 2321-4、2321-7	2021.11.24～ 12.7	84	中島	大和西大寺駅北口駅前広 場整備事業/奈良市長	公共	H12.3512
13	HJ 762	平城京跡 (左-4-5-13)	杉ヶ町 8 番 1	2022.2.28～ 3.25	200.75	秋山	共同住宅新築/楡尾建設 株式会社	原因者	R.4.3487
14	HJ 763	平城京跡 (右-7-1-10)・七条々 間路・西一坊坊間西小路)	六条町 86 番他	2022.3.1～ 5.9	434	鈴木	介護医療院増設/医療法 人 康仁会	原因者	R.4.3478
15	HJ 764	平城京跡 (右-1-2-11・14)	西大寺堂町 2330-1他	2022.3.7～ 6.28	832	吉田	大和西大寺駅北口駅前広 場整備事業/奈良市長	公共	H29.3512
16	HJ 765	平城京跡 (右-5-4-2)	平松四丁目 360 番 1他	2022.3.7～ 3.15	120	久保	宅地造成/株式会社 八 州エージェンツ	原因者	R.4.3504
17	AD6	赤田横穴墓群	西大寺赤田町一丁目 536-35 他	2022.3.8～ 8.31	757	吉田・三 澤・鈴木	大和中央道街路整備事業 /奈良市長	公共	H24.3045
18	DA 152	史跡大安寺旧境内附石構瓦 基跡	大安寺四丁目 1105 番 1、1105 番 2の各一部	2021.4.12～ 4.22	51	秋山	個人住宅建築/個人	緊急	R.3.1133
19	DA 153	史跡大安寺旧境内附石構瓦 基跡	大安寺四丁目 1112 番	2021.7.9	3	秋山	個人住宅建築/個人	緊急	R.3.1015
20	DA 154	史跡大安寺旧境内附石構瓦 基跡	東九条町 1291-2、1292-1、 1292-3	2021.10.4～ 10.27	180	原田	範囲確認調査/奈良市教 育委員会 教育長	緊急	R.3.1009
21	TOM5	富雄丸山古墳	丸山一丁目 1079-239	2021.12.20～ 2022.2.18	278	村瀬	範囲確認調査/奈良市教 育委員会 教育長	緊急	R.3.文保 1121



令和3（2021）年度 奈良市教育委員会実施 小規模・試掘調査一覧

次数	道路名	調査地	調査期間	調査面積 (㎡)	事業者	事業内容	事業区分	届出受理 番号
2021-1	奈良山第44号渠	中山町1534-1・2、 1535、1537-1・2・3、 1536	2021.4.14～ 16	297	積水ハウス不動産 西(株)	宅地造成	原因者	R3.3393
	調査結果：遺構は確認されず。西側隣接地にて遺構を確認したため、施工時立会。							
2021-2	平城京跡（左京一条間路）	法蓮町775番、786番、 2044番	2021.6.28～ 30	66	東郷（香港）實業有 限公司	個人住宅新築	原因者	R3.3105
	調査結果：遺構面・遺構とも確認。本調査を実施（HJ第754次調査）。							
2021-3	平城京跡（左-3-3-6）	大宮町西丁目297-2	2021.8.2～5	90	株式会社南都銀行	事務所新築	原因者	R3.3081
	調査結果：遺構面・遺構とも確認。本調査を実施（HJ第768次調査）。							
2021-4	平城京跡（右-北辺-3-5）	西大寺北町三丁目308 番、397番1、399番1	2021.9.10～ 11	45	株式会社喜仙荘	共同住宅新築	原因者	R3.3271
	調査結果：遺構面・遺構とも確認。計画変更し、工事着手。							
2021-5	平城京跡（右-3-4-1、西四坊間 東小路）、菅原寺跡	菅原町403-1、404他	2021.9.13～ 29	580.5	株式会社明日香不動 産販売	宅地造成	原因者	R3.3006
	調査結果：西側の丘段部で室町時代の土灰・溝、東側の平地部で奈良時代の井戸、室町時代の土坑を検出。試掘調査内で遺構の掘削をおこない、これ以上の調査は不要と判断、工事着手。							
2021-6	奈良県道跡地5-A35・36 古墳隣接地	西大寺幸田町一丁目 546-97他	2021.11.22～ 2022.1.24	160	奈良市長	大和中央道街路 整備事業	公共	H24.3045
	調査結果：東西方向の谷を検出、埴輪・瓦が出土。工事着手。							
2021-7	平城京跡（西四坊大路（五条））	五条堀一丁目597番1・2、 610番9、610番10	2022.2.9・10	118	個人	宅地造成	原因者	R4.3497
	調査結果：遺構は確認されず。施工時立会。							

※平城京跡に付している（○-○-○-○）は、○京○条○坊○坪の略である。

『奈良市埋蔵文化財調査年報』令和2（2022）年度 正誤表

頁	行・箇所	誤	正
1	31 行目	主査 村瀬陸	主務 村瀬陸
39	右 29 行目	〔伊勢湾岸所在古墳の測量調査〕	〔伊勢湾岸所在古墳の測量調査〕
39	右 30 行目	_倉正祥	城倉正祥
39	右 34 行目	行頭1文字下び	左に寄せる

---

## 第 1 章 令和 3(2021) 年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告

---



## 1. 平城京跡(左京六条三坊三坪)の調査 HJ第750次

事業名 JR新駅西口駅前広場街路整備交付金事業  
届出者名 奈良市長  
調査地 八条四丁目684-1他

調査期間 令和3年5月10日～令和4年2月24日  
調査面積 3,100㎡  
調査担当者 安井宣也・久保邦江・三澤朋未

### 1 はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京六条三坊三坪の北西部にあたり、地形的には佐保川が形成した氾濫平野に位置する。現状は水田で、東二坊大路の東側溝が推定される西辺部は北側延長部が佐保川の現河道と重複する旧河道を反映した地割となっている。

三坪内の調査は今回が初めてである。周辺では、左京六条二坊十三・十四坪にあたる西隣接地において昭和63年度に奈良県立橿原考古学研究所(以下、橿考研)が病院建設に伴う事前調査を行っている(橿考研1992)ほか、すぐ南方の左京六条二坊十三坪・同三坊三・四坪及び七条二坊三・七・九・十・十六坪にあたる京奈和自動車道奈良IC計画地内では、橿考研が平成30年度・令和元年度に試掘調査を行い、令和2年度から本格的に発掘調査を進めている。これらの調査は平城京内の宅地利用の様相確認を主な目的としているが、後者では、自然科学分析を活用して奈良時代の遺構面がある基盤層や中世の沖積層・旧河川の様相・性格の把握にも及んでいる(橿考研2020・2021・2022・2023)。

今回の調査は、奈良時代の三坪北西部の宅地利用の様相確認を主な目的とし、橿考研の奈良IC計画地の調査と同様に奈良時代の遺構面がある基盤層や中世の沖積層・旧河川の様相・性格の把握にも留意して、3,100㎡の発掘区を1～4の四つに分けて実施した。

なお、調査と関連して下記の自然科学分析(委託分・協力分あり)を行った。成果については一部の概略を本稿で紹介するが、正式には稿を改めて報告予定である。

1. (一社)文化財科学研究センター：委託  
基盤層の微化石分析(花粉・珪藻)・火山灰分析・放射性炭素年代測定
  2. 金原正明氏(奈良教育大学)・金原正子氏・金原美奈子氏((一社)文化財科学研究センター)：協力  
遺構埋土・旧河川堆積物及び基盤層の微化石分析(花粉・珪藻)・室町時代杭列の樹種同定
  3. 村田泰輔氏((独法)奈良文化財研究所)：協力  
旧河川堆積物の堆積構造・室町時代杭列の年代測定・支持地盤の断面構造
- また、室町時代杭列細部のSfm写真測量、奈良時代の



墨書土器の文字の判読及び線刻土器の類例調査については、(独法)奈良文化財研究所の協力を得た。

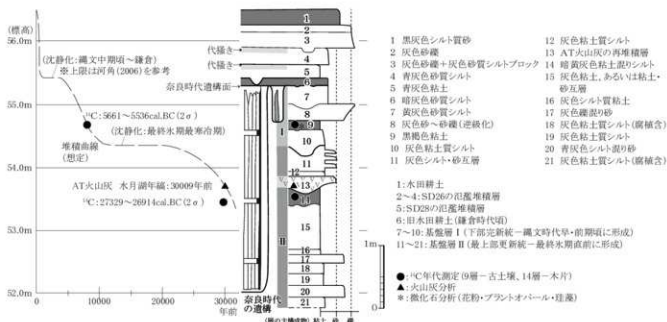
### II 基本層序

現水田の耕土・床土層(厚さ0.2m)の下に後述する鎌倉～江戸時代初期の埋没河川S D 26・28の氾濫堆積層(厚さ0.9m)、鎌倉時代頃の旧耕土層(厚さ0.1m)があり、その下で氾濫平野の基盤層となる。

埋没河川S D 26の氾濫堆積層は灰色のシルト層や砂礫層で、砂礫層は後述する堤防S X 04を越えて堆積し、シルト層の上面に耕作に伴う代掻きの形跡がみられる。同S D 28の氾濫堆積層は鎌倉時代の旧耕土上に堆積する青灰色のシルト・粘土層で、瓦質土器片を含む。上面は堤防S X 04の基底面と対応し、耕作に伴う代掻きの形跡がみられる。鎌倉時代の旧耕土層は13世紀頃の瓦器片を含む暗灰色砂質シルト層で、乾裂痕がみられる。

基盤層最上層の黄灰色砂質シルト層上面(標高55.3m)が古墳～奈良時代の遺構面で、上面が低くくぼむ場所には8世紀の土器・瓦片を含む砂質シルトからなる奈良時代の整地土層(厚さ0.2m前後)がみられる。

基盤層は最上層上面から3.6m下(標高51.7m)まで確認した。概して灰色のシルト・粘土層が主体で厚さ0.1～0.2mの砂礫層や有機物を含む暗灰色や黒褐色のシルト・粘土層を挟む。最上層上面から1.0～1.2m下まで(標高54.1～54.3m、柱状図7～10層)までは乾裂痕が顕著で、黒褐色粘土層(同9層)は放射性炭素年代測定で約7,500～7,700年前(縄文時代早期後葉～末)の年代値(暦年較正)が得られ、植物微遺体分析では花粉・珪藻が極めて少なくササ類やスキの植物珪



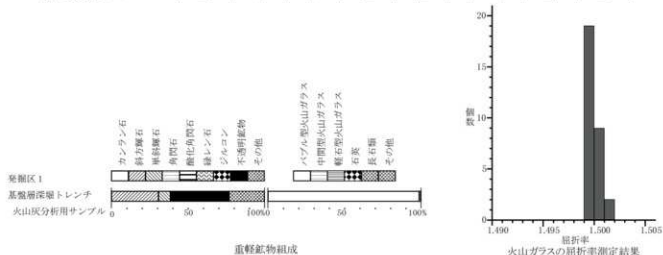
HJ第750次調査 基本層序柱状図(縦:1/60、発掘区北寄りの深掘部と井戸SE04の基盤層の観察結果を総合して構成)

酸体が多いことがわかった。その下(同11層以下)は湿潤な沼沢地の様相で、標高54.0m付近に厚さ0.1~0.2mのAT火山灰(噴出年代:約30,000年前)の再堆積層(同13層)を挟む。直下の暗黄灰色粘土混りシ

ルト層に含まれる木の放射性炭素年代測定で得られた年代値は約28,000~29,000年前(暦年較正)で、AT火山灰の噴出年代と新旧が逆転する。周辺の調査成果も踏まえると、最上層上面の1.0~1.2m下までが縄文時

重軽鉱物分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑閃石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石類	その他	合計
発掘区1 基盤層 深掘トレンチ 火山灰分析用サンプル	0	4	1	0	0	0	0	5	3	13	247	0	2	0	0	1	250



HJ第750次調査 基盤層深掘トレンチ採取試料の自然科学分析結果 ①柱状図13層のAT火山灰

## 花粉分析結果

Taxa (分類群)	柱状図0層	
	上層	下層
Scientific name (学名)	Japanese name (和名)	
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Artemisia	ヨモギ属	
Nonarboreal pollen	2	0
Total pollen	2	0
Pollen frequencies of 1cm <sup>2</sup>	試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	
Unknown pollen	0.2	-
	×10 <sup>2</sup>	
	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolete type spore	3	3
Total Fern spore	3	3
Parasite eggs	寄生虫卵	
Stone cell	石細胞	
Digestion remains	明らかでない消化残渣	
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	
微細植物遺体(Charcoal・woods fragment)	( $\times 10^3$ )	
未分解遺体片		0.4
分解質遺体片	5.0	9.6
炭化遺体片(微粒炭)	1.3	0.4

## 植物珪酸体分析結果

Taxa (分類群)		柱状図0層	
Japanese name (和名)	Scientific name (学名)	上層	下層
イネ科	Gramineae		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	15	44
キビ族型	Panicum type	10	10
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	5	10
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae A</i> type	40	44
タケ亜科	Bambusoideae		
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	86	88
ネギザ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nerusa</i>	408	334
チマキザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	10	10
ミヤコザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodi</i>	5	5
未分類等	Others	96	49
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin	5	5
棒状珪酸体	Rodshaped	91	69
茎部起源	Stem origin	5	5
未分類等	Others	146	118
植物珪酸体総数	Total	925	791

おなじ分類群の推定生産量(単位: kg・nl・cm<sup>2</sup>): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

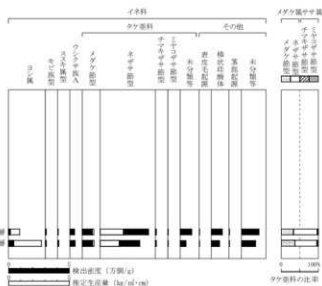
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.95	2.79
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.06	0.12
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.99	1.03
ネギザ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nerusa</i>	1.96	1.60
チマキザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.08	0.07
ミヤコザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodi</i>	0.02	0.01

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	33	38
ネギザ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nerusa</i>	64	59
チマキザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	2	3
ミヤコザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodi</i>	0	1
メダケ率	Medaeratio	97	97

## 珪酸分析結果

分類群	柱状図0層	
	上層	下層
炭化性種(炭水生種)		
<i>Hammochia amphioxys</i>	1	
<i>Navicula mutica</i>	1	
合計	0	2
未固定	0	0
酸片	24	4
試料1cm <sup>2</sup> 中の酸片密度	0.4	
	×10 <sup>1</sup>	
定形珪酸体率(%)	-	



植物珪酸体ダイアグラム

HJ 第750次調査 基礎層(深部)レンヂ採取試料の自然科学分析結果 ②柱状図0層の炭化土(花粉・植物珪酸体・珪藻)

放射性炭素年代測定結果①（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正値）

測定番号	採取場所	試料 形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (‰)
IAMA-210979	基盤層深掘トレンチ 層位：柱状図9層	土塊	HCl	-23.61 ± 0.19	6,680 ± 30	43.52 ± 0.17
IAMA-210980	基盤層深掘トレンチ 層位：柱状図14層	植物片	AsA	-28.66 ± 0.26	24,930 ± 90	4.49 ± 0.05

[IAA登録番号：#A916]

放射性炭素年代測定結果②（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (‰)			
IAAA-210979	6,666 ± 30	43.65 ± 0.17	6,682 ± 31	5633calBC - 5612calBC (26.2%) 5591calBC - 5562calBC (42.0%)	5661calBC - 5336calBC (95.4%)
IAAA-210980	24,990 ± 90	4.46 ± 0.05	24,925 ± 93	27276calBC - 27116calBC (68.3%)	27329calBC - 26914calBC (95.4%)

[参考値]

1) 第 750 次調査 基盤層深掘トレンチ採取試料の自然科学分析結果 ③柱状図9・14層採取試料の放射性炭素年代測定

代早・前期頃に堆積した下部完新統の地層、その下が河床の低下が進む最終氷期細寒冷期までに堆積した最上部更新統の地層で、古墳～奈良時代の遺構面は前者の堆積休止面と捉えることができる。

### III 検出遺構

遺構検出作業は基盤層最上層の上面で行い、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良～平安時代初頭、鎌倉～江戸時代初頭の遺構を検出した。概要は以下のとおり。

#### 1. 古墳時代後期～飛鳥時代の遺構

発掘区北西部で検出した掘立柱建物1棟（SB45）・溝1条（SD01）がある。

SB45 桁行3間（4.2m）、梁行2間（3.6m）の南北棟建物で、棟方向が方位北に対し東に振れる。先後関係から後述する奈良時代の溝SD03より古い。

SD01 北東から南西に続く溝で、幅1.3～3.0m、深さ0.4～0.7m。埋土は地山ブロック土からなる上層と暗灰色のシルト・粘土からなる下層に大別でき、上層からは8世紀の土器小片、下層からは6～7世紀頃の土師器甕と壺の破片が出土した。

#### 2. 奈良～平安時代初頭の遺構

掘立柱建物44棟（SB01～44）・掘立柱列37条（SA01～37）・溝24条（SD02～25）・井戸6基（SE01～06）・土坑10基（SK01～10）・小規模な池状遺構2基（SX01・02）・性格不明の土坑群（SX03）がある。主な遺構の形状・規模は一覧表の通り。

掘立柱建物・柱列は柱筋、溝は主軸・延長方向の方位に対する振れにより、以下の3つに分類できる。

**A類** 方位東西・南北とほぼ合うもの。

**B類** 方位北に対し西、または同東に対し北にやや振れるもの。

**C類** 方位北に対し東、または同東に対し南にやや振れるもの。

また、遺構の性格に基づくと以下のようにまとめることができる。

#### (1) 区画割に関わるもの

三坪の四周を画する条坊道路で近隣の調査例があるのは、奈良IC計画地内の樞考研の調査地で確認された西辺を画する東二坊大路と南辺を画する六条条間南小路である。

東二坊大路は側溝心々間距離が14.4mで、同調査地で確認された六条大路（側溝心々間距離：15m、側溝を含めた幅員：17.8m）とほぼ同規模である。六条条間南小路は側溝を含めた幅員が8.8mで、同調査地で確認された東二坊坊間東小路・七条条間北小路もほぼ同規模であることから、三坪の東辺を画する東三坊坊間東小路の幅員も同規模の可能性が高い。北辺を画する六条条間路の調査例はないが、側溝を含めた幅員は13m程度と想定できる。したがって、三坪の範囲は東西120m×南北122m程度で、南辺の位置はX=-147,662.0付近、東辺の位置はY=-17,643.4付近に推定できる。

上記の点も踏まえて区画割に伴うと考えられる遺構は、下記の通りである。

**A類** 溝2条（SD02・03）と柱列2条（SA08・32）がある。

SD02・03ともに南北方向の溝で、これらの溝をまたぐA類の建物がないことから区画割の溝とみる。三坪

東辺の推定位置からの溝心までの距離はS D 02が63mで坪内の東西1/2分割線付近、S D 03が90mで同西1/4分割線付近にあたる。ともにX=-147.572付近で溝幅が変わるが、この位置は三坪南辺の推定位置の90m北で同1/4分割線付近にあたる。両者の埋土から8世紀後半の土器が出土した。

S A 08・32ともに発掘区の北東辺で検出した。S A 08は三坪南辺の推定位置の108m北に位置する東西方向の柱列で、A類の建物S B 41・42の間を画することから区画の塼とみる。S A 32は区画溝の溝S D 02の東肩の3m東に位置する南北方向の柱列で、S D 02との間の空地にA類の建物がなく、坪内通路の東縁に沿う区画溝の塼とみる。

**B類** 柱列3条(S A 06・07・15)がある。

S A 06・07ともに発掘区の北東辺で検出した。S A 06は区画溝の溝S D 02の東肩の2～2.4m東に位置する南北方向の柱列。S A 07は西端がS A 06の南から2間目の柱穴に接続する東西方向の柱列で、前述のS A 08・23と位置・形状が近いことから同様の塼とみる。S A 15 A類の区画溝の溝S D 03の西肩にほぼ沿う南北方向の柱列で、先後関係からS D 03より新しい。西側にB群の南北棟建物が重複して南北に並ぶことから、区画溝の塼とみる。

**C類** 溝6条(S D 20～25)がある。

S D 20・21 S D 20は南北方向の溝で、本来はA類とすべきだが南端部がC類の東西方向の溝S D 21と接続することからC類に含める。S D 21は先後関係からA類の区画溝の溝S D 03より新しく、S D 20との接続部より東方では方角方位東に少しやや南に振れるが、A類の建物S B 10・11の南側を通る西方では東西の方位とほぼ合う。一部の建物の北側柱列や東西方向の柱列が溝の北岸沿いにあるが、ここを境界にC類の建物の配置が変化することから、区画溝の溝とみる。

S D 20の位置は同東辺の推定位置の96m西である。S D 21の位置は三坪南辺の推定位置の概ね90m北で、坪内の北1/4分割線付近にあたる。両者の埋土から8世紀後半の土器片が出土した。

S D 22・23ともにS D 21の南肩から南に約1.2～1.8m隔てて掘削された東西方向の溝で、S D 21を北側溝とする坪内通路の南側溝の可能性もある。S D 22はS D 21の西端部に沿う。東端はS D 20・21の接続部付近と揃い、南側に後述する窪みS X 02を伴う。埋土はS X 02と一連である。S D 23はS D 21の東端部に沿い、埋土から8世紀後半の土器が出土した。

S D 24・25ともに発掘区南東部で検出した東西方向の溝で、またいで建つ建物はない。S D 24は区画溝の溝S D 21の9m南に位置し、先後関係からC類の建物S B 36より古い。S D 25は同15m南に位置し、坪内の北1/8分割線の位置に設けられた区画溝の溝とみる。両者の埋土から8世紀後半の土器が出土した。

## (2) 居住に関わるもの

建物・柱列と井戸、溝がある。

### a. 建物・柱列

**A類** 建物24棟、柱列16条で、ともに発掘区内全体でみられる。前述したように南北方向のA類の区画溝の溝S D 02・03をまたいで建つものではなく、溝をはきんで東・中央・西の3群に識別できる。

◆東群：建物-S B 41・42・44

柱列-S A 05・09・10

建物は部分的な検出にとどまる。S B 41・42は区画溝の塼S A 08を挟んで建つ。S B 42と区画溝の塼S A 32とは位置が重複し、同時併存しない。S B 41・44は位置が近接し、同時併存の可能性が低い。柱間2間の南北柱列S A 05は区画溝の塼S A 08の西端の柱穴の北延長上に位置し、区画溝の欄に取り付く門の可能性がある。

◆中央群：建物-S B 01・03・04・27～29・31・33・37～39

柱列-S A 01・04・21・23・27～31・33・36

建物の大半は南北棟で9棟(S B 01・03・04・27～29・37～39)あり、規模のわかるものは桁行3間のもの(S B 03・04・28・29)と同4間のもの(S B 01・27・38・39)がある。東西棟は2棟で、S B 31が桁行3間、S B 33が同4間である。

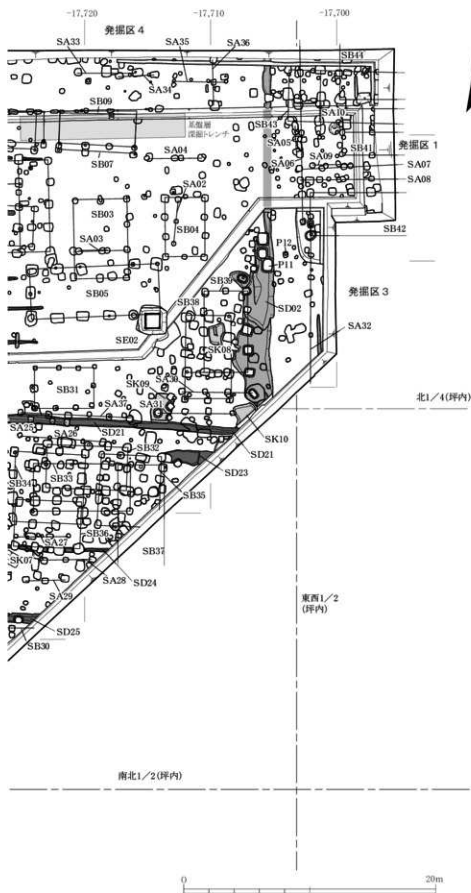
桁行3間の南北棟は、北寄りでS B 03・04が北側柱列を揃えて東西に並び、南寄りでS B 28・29が区画溝の溝S D 03の東側に西側柱列を揃えて南北に並び、また、S B 04は桁行4間の南北棟S B 01、S B 28は桁行4間の東西棟S B 33と柱筋が揃う。

桁行4間の南北棟は、S B 01・27が区画溝の溝S D 03の東側に沿って南北に並び、S B 38・39が同S D 02の西側に沿って建つ。S B 01は東側付きで、比較的大型の建物である。S B 27の東西中軸線とS B 31の南側柱列の位置は三坪南辺の推定位置の90m北で、坪内の北1/4分割線付近にあたる。S B 39は先後関係からS B 38や区画溝の溝S D 02より新しい。桁行4間の東西棟S B 31・33は西側柱列を揃えて南北に並び、





HJ 第750次調査 遺構平面図1



—古墳～平安時代初頭— (1/300)

IU第750次調査 奈良時代 遺構一覧表1

## ◆ 孤立住列 (SA)

遺構番号	住所・棟方向		規模 (間)	長さ (m)			住間寸法 (m)		備考
	基本	傾き		折行×壁行+廊	折行	壁行	廊の出	折行	
SA 01	南北	A	2		3.6			1.8等間	
SA 02	南北	C	2		3.6			1.8等間	SB 04と重複
SA 03	東西	B	1		2.4			2.4	SB 03より新しい
SA 04	東西	A	2		4.2			2.1等間	
SA 05	南北	A	2		2.4			1.2等間	
SA 06	南北	B	5以上	12.0以上				北から2.4-2.4-3.0-2.1-2.1	祭壇区外北に続く可能性
SA 07	東西	B	3以上	5.4以上				1.8等間	西端はSA 04に接続 祭壇区外東に続く可能性
SA 08	東西	A	3以上	5.7以上				西から1.5-2.1-2.1	祭壇区外東に続く可能性
SA 09	東西	A	3	3.15				1.05等間	
SA 10	南北	A	1		2.1			2.1	SB 43より古い
SA 11	東西	C	4	6.6				西から1.5-2.1-1.5-1.5	
SA 12	東西	C	2	3.9				1.95等間	SX 03より新しい
SA 13	東西	B	2	4.5				2.25等間	SX 03より新しく、SB 25と重複
SA 14	南北	A	3以上	7.2以上				北から3.0-1.8-2.4	SX 03より新しく、SB 25と重複
SA 15	南北	B	5	11.1				北から2.1-3.0-2.1-1.8-2.1	SD 03より新しく、SB 26と重複
SA 16	南北	B	2	2.4				1.2等間	
SA 17	南北	A	3	4.2				北から1.2-1.5-1.5	SB 26と重複
SA 18	南北	A	1	1.8				1.8	
SA 19	東西	B	2	3.6				1.8等間	SB 23と重複
SA 20	南北	A	2	3.6				1.8等間	SA 19より古く、SB 23と重複
SA 21	東西	A	2	3.3				1.65等間	SD 03より新しく、SB 27と重複
SA 22	東西	C	3	5.4				1.8等間	SD 03より新しく、SB 27と重複 SD 21の北側に沿う
SA 23	東西	A	2	3.3				1.65等間	SB 27・SD 03と重複
SA 24	東西	C	3	6.3				北から2.4-2.4-1.5	SB 26・SD 03と重複
SA 25	東西	C	3	4.8				西から1.8-1.8-1.2	SD 21より古い
SA 26	東西	C	3	7.5				西から2.4-2.7-2.4	SB 32と重複
SA 27	東西	A	2	4.2				2.1等間	SB 36と重複
SA 28	東西	B	2以上	3.9以上				西から1.8-2.1	祭壇区外東に続く可能性
SA 29	東西	A	2以上	3.0以上				1.5等間	祭壇区外東に続く可能性
SA 30	東西	A	3	5.7				西から1.8-1.8-2.1	SD 02より新しく、SB 38と重複
SA 31	東西	A	3	6.0				西から2.1-1.95-1.95	SK 10より古く、SK 31より新しい
SA 32	南北	A	4以上	8.7以上				北から2.4-1.8-2.1-2.4	SB 42と重複。祭壇区外南に続く可能性
SA 33	東西	A	2	4.5				2.25等間	
SA 34	東西	B	1	3.0				3.0	
SA 35	南北	C	3	4.05				1.35等間	
SA 36	南北	A	2	3.6以上				1.8等間	SA 35と交差。祭壇区外北に続く可能性
SA 37	東西	C	5	8.7				西から2.25-1.5-1.65-1.65-1.65	SD 21の北側と重複

HJ第750次調査 奈良時代 遺構一覧表2

## ◆掘立柱建物(SB)①

遺構番号	棟方向		規模(間) 桁行×梁行(間)	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	廂の出 (m)	身舎住間寸法(m)		備考
	基本	振れ					桁行	梁行	
SB01	南北	A	4×3(東廂1)	7.2	6.45	2.25	1.8等間	2.1等間	身舎の北から1間目に関仕切り
SB02	東西	C	2×2	4.5	3.6		2.25等間	1.8等間	SB01と重複
SB03	南北	A	3×2	6.3	4.2		2.1等間	2.1等間	SB05と重複、南から1間目に関仕切り
SB04	南北	A	3×2	4.8	3.2		北 1.65-1.5-1.65	1.65等間	
SB05	東西	B	5×2	9.9	3.9		西から1.95-1.95-2.1-1.95-1.95	1.95等間	SB03・SE02と重複
SB06	東西	C	3×1	5.85	2.7		1.95等間	2.7	
SB07	東西	C	3×1	5.85	2.7		西から2.1-1.95-1.95	2.7	
SB08	東西	C	3×1	6.3	2.4		西から1.95-1.95-2.4	2.4	SB06より新しく、ほぼ同じ位置に重複
SB09	東西	C	3×1	5.85	2.4		1.95等間	2.4	SB07より新しく、ほぼ同じ位置に重複
SB10	東西	A	3以上×3(南1)	5.4以上	6.3	2.4	1.8等間	1.95等間	
SB11	南北	A	5×2	8.55	3.9		北から1.5-2.1-1.8-1.65-1.5	1.95等間	北寄りに3基の理樂遺構を伴う
SB12	南北	C	3×2	5.1	1.8以上		北から1.8-1.65-1.65	1.8	
SB13	東西	C	3×2	6.3	3.3		西から2.55-1.65-2.1	1.65等間	SD22・SX02より新しく、SK01・02より古い
SB14	東西	A	4×3(南1)	7.5	6.0	2.4	西から1.2-2.1-2.1-2.1	1.8等間	
SB15	東西	A	3×2	5.7	3.8		西から2.1-2.1-1.5	3.8	SB14より古く、SB16と重複
SB16	東西	A	3以上×2	5.4以上	4.2		2.7等間	2.1等間	
SB17	東西	C	3以上×2	2.7以上	3.0		1.35等間	1.5等間	
SB18	東西	A	4以上×2	6.3	3.6		西から2.1-2.4-1.8	1.8等間	
SB19	東西	C	3×2	7.2	3.0		西から1.5-2.85-2.85	1.5等間	西から1間目に関仕切り、SB18より新しい
SB20	南北	B	3×1	4.95	3.9		1.65等間	3.9	
SB21	南北	B	3×1	5.7	3.6		北から1.8-1.8-2.1	3.6	SB20より新しく、SB23より古い
SB22	南北	A	2×2	4.2	2.7		2.1等間	1.35等間	SB21・23と重複
SB23	南北	B	3×2	5.4	3.3		1.8等間	1.65等間	SB21より新しく、SB25と重複
SB24	南北	C	3×2	5.1	3.6		北から1.8-1.5-1.8	1.8等間	SX03より新しい
SB25	南北	A	5×3(西1)	10.2	5.7	2.1	北から2.4-2.4-1.8-1.8-1.8	1.8等間	SX03より新しく、SB24・SE05と重複 身舎の北から2間目に関仕切り
SB26	南北	C	3×2	5.1	3.3		北から1.8-1.5-1.8	1.65等間	SD03より新しく、SA15・16及びSB20と重複
SB27	南北	A	4×2	8.25	3.3		北から2.4-1.95-1.95-1.95	1.65等間	SD21より古く、SA23・24と重複
SB28	南北	A	3×2	4.95	3.3		1.65等間	1.65等間	SK07より古い
SB29	南北	A	3×2	4.95	3.6		1.65等間	1.8等間	SD25より古い
SB30	不明	A	2以上×2以上	2.25以上	1.8以上		2.25	1.8	SB29と重複、発掘区外南・東に続く
SB31	東西	A	3×2	4.8	3.0		西から1.8-1.5-1.5	1.5等間	
SB32	東西	C	4×2	6.3	3.6		西から1.5-1.8-1.5-1.5	1.8等間	SB33～35より新しく、SA25・SD21と重複
SB33	東西	A	4×2	7.8	3.6		1.95等間	1.8等間	SB32より古く、SB34・35と重複
SB34	南北か	C	3×3	5.4	5.4		1.8等間	1.8等間	SA27と重複
SB35	南北	C	3×3	5.4	4.8		1.8等間	西から1.5-1.8-1.5	SB34と南・北側住列の柱筋を揃える
SB36	東西	C	3×2	5.4	3.6		1.8等間	1.8等間	SB34・SD24より新しく、SA27と重複

IU第750次調査 奈良時代 遺構一覧表3

## ◆掘立柱建物 (SB) ②

遺構番号	棟方向		規模 (間)	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	扉の出 (m)	身倉柱間寸法 (m)		備考
	基本	取れ					桁行×梁行 (間)	桁行	
SB 37	南北	A	3以上×2	4.5以上	3.6		1.5等間	1.8等間	SB 36より古い、発掘区外南に続く
SB 38	南北	A	4×2 (南1)	4.5	3.6	2.1	1.5等間	1.8等間	SK 08より新しく、SA 30と重複
SB 39	南北	A	4×2	6.3	3.3		北から1.5-1.5-1.5-1.8	1.65等間	SB 38・SD 02より新しい
SB 40	東西	A	1以上×1以上	東西 1.95以上	南北 1.5以上		東西 1.95	南北 1.5	発掘区外北・西に続く
SB 41	東西	A	2以上×2	2.4以上	3.6		2.4	1.8等間	総柱建物 SB 43と重複、発掘区外東に続く
SB 42	東西	A	3以上×2	4.8以上	3.3		西から1.8-1.5-1.5	1.65等間	SA 23と重複、発掘区外東に続く
SB 43	東西	C	3×2	7.2	2.1		2.4等間	2.1等間	SA10より新しく、SA 05・06 及びSB 41・44と重複、西から1間目に間仕切り
SB 44	東西か	A	1以上×1以上	2.1以上	2.1以上		2.1	2.1	発掘区外北・東に続く 南西隅から北に1間目の柱穴は他より小さく、妻柱の可能性

## ◆溝 (SD) ①

遺構番号	平面形等 (掘り)	平面規模 (m)	検出面からの深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SD 02	南北方向 (A)	幅: 0.5 ~ 2.5、長さ: 26以上	0.3	8世紀後半	土師器: 杯 (A・B)・桶 (C)・蓋 (B)・甕、須恵器: 杯 (B)・杯蓋・鉢・甕	発掘区外南に続く SA 30・SB 39より古い
SD 03	南北方向 (A)	幅: 1.0 ~ 3.0、長さ: 37以上	0.2	8世紀後半	土師器: 杯・杯蓋・皿 (A・C)・桶 (A・C)・高杯・甕 (B)・甕、須恵器: 杯 (A・B)・杯蓋・甕・鳥形埴、製塩土器、平瓦	南はSX 01と接続、発掘区外北に続く可能性 SA 15・22、SB 26より古い
SD 04	東西方向 (A)	幅: 0.2、長さ: 3以上	0.1	8世紀	土師器: 器種不明細片、須恵器: 甕	発掘区外西に続く SA 30・SB 39より古い
SD 05	東西方向 (A)	幅: 0.2、長さ: 6.0	0.1	8世紀	土師器: 器種不明細片	SB 01・SE 01より古い
SD 06	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 3.3	0.1	8世紀	土師器: 器種不明細片、須恵器: 甕	
SD 07	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 6.6	0.2	8世紀	土師器: 器種不明細片	SD 03と接続
SD 08	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 8.7	0.2	8世紀	土師器: 器種不明細片	SD 03と接続
SD 09	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 9.5	0.2	8世紀	須恵器: 杯 (A・B)・杯蓋	SD 03と接続
SD 10	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 5以上	0.1	8世紀	須恵器: 杯蓋・甕	発掘区外東西に続く
SD 11	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 3.0	0.1	8世紀	須恵器: 杯 (A)	
SD 12	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 6.0	0.1	8世紀	土師器: 甕、須恵器: 杯 (A・B)・甕	SD 20より古い
SD 13	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 4.0	0.1	8世紀	なし	SB 11より古い
SD 14	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 14程度	0.1	8世紀	土師器: 杯 (A・B)・蓋 (B) 須恵器: 杯 (A・B)・蓋蓋・甕	SB 11・SD 20より古い 西端は鎌倉以降の改変で消失か
SD 15	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 14程度	0.1	8世紀	土師器: 器種不明細片	西端は鎌倉以降の改変で消失
SD 16	東西方向 (A)	幅: 0.3、長さ: 9.4	0.1	8世紀	土師器: 器種不明細片	SB 11より古い
SD 17	東西方向 (A)	幅: 0.3 ~ 0.5、長さ: 4.0	0.1	8世紀後半か	土師器: 甕、須恵器: 杯 (A)・杯蓋・甕	SB 27の北妻側柱列の北側に沿い、SD 03と接続
SD 18	南北方向 (A)	幅: 0.5、長さ: 6.5程度	0.2	8世紀後半か	須恵器: 杯 (B)・甕	SB 27の東面側柱列の東側に沿う SD 21より古い
SD 19	L字形 (東西・南北、3.5・南北 4.0)	幅: 0.3 ~ 0.5、長さ: 東西 3.5・南北 4.0	0.1	8世紀後半か	須恵器: 杯 (A)・杯蓋・甕	SD 03と接続する東西溝の東端で北に屈曲 SD 25より古い
SD 20	南北方向 (A)	幅: 0.7、長さ: 12以上	0.2	8世紀後半	土師器: 皿 (C)・高杯・蓋 (B)・甕 須恵器: 杯 (A・B)・杯蓋・蓋 (L)・蓋蓋・甕、平瓦	南端でSD 21と接続し、発掘区外北に続く
SD 21	東西方向 (A・C)	幅: 0.7 (一部2.4)、長さ: 45以上	0.2	8世紀後半	土師器: 杯 (A)・皿 (C)・甕 須恵器: 杯 (A・B)・杯蓋・高杯・鉢 (D) 甕・鳥形埴、丸・平瓦	発掘区外東に続き、西端は鎌倉以降の改変で消失 SD 20との接続部以東では東に対しやや南に振れる SD 03・18より新しく、SE 03・SK 03より古い

HJ第750次調査 奈良時代 遺構一覧表4

## ◆溝 (SD) ②

遺構番号	平面形等 (掘れ)	平面規模 (m)	横出面から の深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SD 22	東西方向 (A)	幅: 1.0 ~ 1.5、長さ: 13 以上	0.2	8 世紀後半	(準)SX 02 と一連で取り上げ	南に接するSX 02 と埋土は一通 西端は鎌倉以降の改築で消失 SB 21 より新しく、SB 13 とSK 01・02 より古い
SD 23	東西方向 (C)	幅: 1.2、長さ: 4.5 以上	0.1	8 世紀後半	土師器: 杯・甕 須恵器: 甕、丸瓦	発掘区外東に続く
SD 24	東西方向 (C)	幅: 0.4、長さ 14 以上	0.1	8 世紀後半	土師器: 皿 (A)・甕 須恵器: 杯 (B)・杯蓋・甕、平瓦	発掘区外東に続く SB 26・SK 07 より古い
SD 25	東西方向 (C)	幅: 0.7、長さ 8.5 以上	0.2	8 世紀後半	土師器: 杯 (B)・甕、須恵器: 杯 (B)・ 杯蓋・鉢 (E)・甕、平瓦	発掘区外東に続く SB 29・SD 19 より新しい

## ◆井戸 (SE)

遺構番号	掘方等			井戸特			時期	主な出土遺物
	平面形態	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)	水留・護道 施設等		
SE 01	不整形	東西 3.2 ×南北 2.5	1.8	方形縦板組隅柱 横横積	一边 0.9	—	8 世紀後半	(掘方) 土師器: 杯 (A)・皿 (C)・柄 (A)・高杯・甕・ 甕、須恵器: 杯 (B)・杯蓋・皿 (C)・鉢 (D)・蓋 (M)・ 蓋蓋・平瓶・甕、製塩土器、丸・平瓦 (特納内) 土師器: 皿 (A・C)・高杯・甕、須恵器: 杯 (A・ B・F)・杯蓋・高杯、製塩土器、平瓦 (特内) 土師器: 杯 (C)・甕、須恵器: 杯 (A・B・F)・ 杯蓋・蓋 (L)・平瓶・浄瓶・ミニチュア (横瓶)・甕、 製塩土器、平瓦
SE 02	隅丸方形	一边 2.8	2.0	方形縦板組隅柱 横横積	一边 1.2	—	8 世紀後半 ~末	(掘方) 土師器: 皿 (C)・高杯・甕、須恵器: 杯 (B)・ 杯蓋・ミニチュア (平瓶)・甕 (特納内) 土師器: 甕、須恵器: 蓋 (G)・M)・甕、埴 (特内) 土師器: 杯 (A)・B)・皿 (A)・C)・柄 (A)・C)・ 蓋 (B)・甕・甕、須恵器: 杯 (A)・F)・杯蓋・皿 (C)・ 蓋 (M)・甕、土馬、丸・平瓦
SE 03	隅丸方形	東西 1.8 ×南北 1.5	2.6	方形縦板組横横積	一边 0.6	—	8 世紀後半	(掘方) 土師器: 杯・柄 (C)・高杯・甕 (B)・甕・甕、 須恵器: 杯 (A)・B)・杯蓋・蓋・甕、円面硯、土馬、 丸瓦 (特接取穴内) 土師器: 皿 (C)・柄 (C)・甕・甕、須恵器: 杯 (B)・杯蓋・甕、
SE 04	不整形	東西 3.2 ×南北 2.5	3.4	方形縦板組横横積 留	一边 0.8	—	8 世紀後半 ~末	(掘方) 土師器: 皿 (C)・甕、須恵器: 杯 (B)・杯蓋・ 蓋 (L)・M)・甕、平瓦、埴 (特内) 土師器: 杯 (A)・B)・E)・杯蓋・皿 (A)・C)・柄 (A)・ C)・蓋 (B)・E)・甕、須恵器: 杯 (A)・B)・E)・杯蓋・ 皿 (C)・鉢 (A)・蓋 (A)・L)・甕、三彩片、製塩土器、 丸・平瓦、埴、銭貨 (萬年通寶)、種子、帯金具
SE 05	隅丸方形	一边 2.4	2.7	方形縦板組隅柱 横横積の可能性	一边 1.1 程 度	竊取	8 世紀後半	土師器: 杯 (A)・B)・杯蓋・皿 (A)・C)・蓋 (A)・B)・ 甕・甕、須恵器: 杯 (A)・B)・杯蓋・皿 (B)・C)・蓋・ 蓋蓋・甕、製塩土器、丸・平瓦
SE 06	隅丸方形	一边 2.4	2.7	方形横板組	一边 1.05	—	8 世紀後半 ~末	(掘方) 土師器: 杯 (E)・甕、須恵器: 杯 (B)・杯蓋・ 甕、製塩土器、平瓦 (特内) 土師器: 杯 (A)・皿 (A)・C)・柄 (A)・C)・高杯・ 蓋 (E)・甕、須恵器: 杯 (A)・B)・杯蓋・蓋 (L)・ 平瓶・横瓶・ミニチュア (蓋)・平瓶・甕、製塩土器、 軒丸瓦 (6225 種別不明)・軒平瓦 (6663P・6714A)・平瓦

## ◆土坑・その他 (SK・SX) ①

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SK 01	不整形	径 2.2 前後	0.4	8 世紀後半 ~末	土師器: 杯 (A)・B)・皿 (A)・B)・柄 (A)・ 高杯・甕・甕・甕、須恵器: 杯 (A)・B)・ 杯蓋・皿 (A)・B)・C)・甕、製塩土器、軒 丸瓦 (6075A)、丸・平瓦	埋土中に多量の炭粒・焼土塊を含む
SK 02	隅方形	長径 1.2 × 短 径 0.6	0.2	8 世紀後半 ~末	土師器: 高杯・甕、須恵器: 杯 (A)・B)・ 杯蓋・蓋・甕、平瓦	埋土中に多量の炭粒・焼土塊を含む
SK 03	不整形	径 1.1	0.2	8 世紀後半 ~末	土師器: 皿 (A)・甕、須恵器: 杯 (A)・ 杯蓋・皿 (A)・蓋・甕、製塩土器、平瓦	埋土中に多量の炭粒・焼土塊を含む
SK 04	不整形	長径 3.0 × 短 径 1.0	0.4	8 世紀	土師器: 高杯、須恵器: 甕	
SK 05	隅丸方形	東西・南北 とも 3.0 以上	0.5	8 世紀か なし		SB 25・SE 06 より古い、井戸の掘方の可能性

## HJ 第 750 次調査 奈良時代 遺構一覧表 5

## ◆土坑・その他 (SK・SX) ②

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SK 06	隅丸方形	東西 1.4 以上 × 南北 3.0 以上	0.7 以上	8 世紀	土師器: 皿 (C)・甕、須恵器: 壺・甕、平瓦	SE 06 より古い、井戸の掘方の可能性
SK 07	不整形	長径 2.5 × 短径 1.9	0.2	8 世紀	土師器: 皿 (A)・柄 (C)・甕、須恵器: 杯 (A・B)・杯蓋	SB 28 より新しい
SK 08	不整形	東西 1.2 × 南北 1.7	0.3	8 世紀	土師器: 甕、須恵器: 杯 (A・B)・甕	SB 38 より古い
SK 09	不整形	東西 1.7 × 南北 2.4	0.1	8 世紀か	なし	SD 21 より古い
SK 10	不整形	東西 1.8 以上 × 南北 2.0 以上	0.2	8 世紀か	土師器: 器種不明破片	
SX 01	隅丸方形	東西 2.8 以上 × 南北 3.0	0.3	8 世紀後半	土師器: 杯 (A)・皿 (A)・柄 (A)・高杯・甕、須恵器: 杯 (A・B)・杯蓋・壺 (K)・甕・円形瓦、製版土器、丸・平瓦	北西隅で SD03 と接続、小規模な池の可能性
SX 02	不整形	東西 14 以上 × 南北 2.0 前後	0.2 前後	8 世紀後半	土師器: 杯 (A・B)・皿 (A・C)・柄 (A・C)・高杯・甕・壺、須恵器: 杯 (A・B)・杯蓋・皿 (B)・高杯・壺 (K)・平瓶・甕、丸・平瓦	SD 02 の南縁に沿って広がる森みで、南辺では溝状の傾斜が進む
SX 03	不整形	東西 7.5 × 南北 4.5	0.1 ~ 0.2	8 世紀後半	土師器: 杯 (A・B)・杯蓋・皿 (A・B・C)・柄 (A・C)・高杯・甕・壺、須恵器: 杯 (A・B)・杯蓋・鉢 (A)・壺 (K)・甕、丸・平瓦	一辺 1.5 ~ 2 m の方形の土坑が 6 基以上重複して掘削が



HJ 第 750 次調査 A 類の区画溝・塼と建物・柱列、井戸 (1/800、方眼は 30 m 四方)

前者は桁行 4 間の南北棟 S B 27 とも柱筋が揃う。

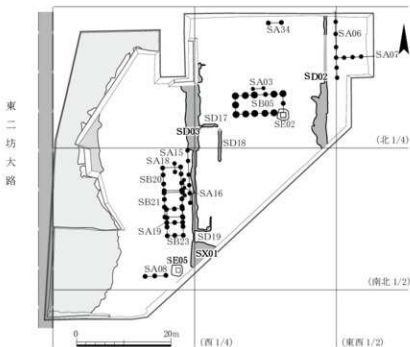
なお、S B 29 と S B 30、S B 33 と S B 37 は位置が重複するため、同時併存しない。

柱列のうち、S B 01 の西側に沿う S A 01、S B 04 の北側に沿う S A 04、S B 39 の南側に沿う S A 30、S B 38 の南側に沿う S A 31 は建物の目隠し塼の可能性がある。S A 04 は S B 01 の北側柱列と、S A 29 は S B 28 の南側柱列と、S A 31 は S B 31 の南側柱列とそれぞれ柱筋を揃える。S A 30・S B 39 は区画溝の溝 S D 02 より新しく、S A 21・23 は同 S D 03 より新しい。

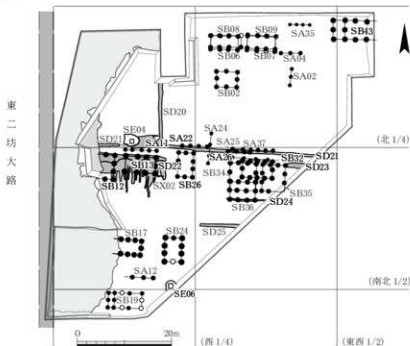
◆西群：建物—S B 10・11・14～16・18・22・25  
柱列—S A 14・17・20

建物は東西棟が 5 棟 (S B 10・14～16・18)、南北棟が 3 棟 (S B 11・22・25) で、三坪南辺の推定位置の 90 m 北にある坪内の北 1/4 分測線付近をはさんで北 (S B 10・11) と南 (S B 14～16・18・22・25) の 2 つの小群に識別できる。

東西棟のうち、S B 10・14 は桁行 4 間以上の南廂付きの大型の建物である。S B 15・18 は桁行 3 間の小型の建物。S B 16 は柱間寸法から大型の建物とみる。南



HJ第750次調査 A類の区画溝・堀とB類の建物・柱列、井戸(1/800、方眼は30m四方)



HJ第750次調査 C類の区画溝・堀と建物・柱列、井戸(1/800、方眼は30m四方)

北棟のうち、SB 11と西面付きのSB 25は桁行5間の大型の建物である。SB 11は埋壘を伴う。SB 22は東西・南北とも2間であるが、柱間寸法の小さい南・北の柱列を妻側とみる。柱穴の大きさは西隣の大型建物SB 14と同程度である。

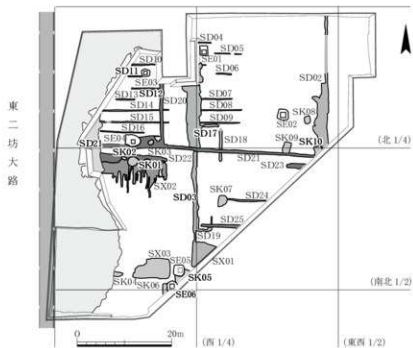
SB 14はSB 18と西側柱列、SB 22と北側柱列の柱筋を揃える。また、SB 16の北側柱列はSB 20の南側柱列と柱筋を揃える。SB 18の北側柱列の位置は三坪南辺の推定位置の60m北で、坪内の南北1/2分割

線付近にあたる。SB 14はSB 15より新しい。SB 16はSB 14・15と位置が重複し、SB 25と近接するので、これらの建物と同時併存しない。

柱列はすべて南北方向で、SA 17はSB 22の東側柱列、SA 20はSB 25の東側柱列と柱筋が揃う。SA 14はすぐ東に井戸SE 05があることから、その目隠し堀の可能性はある。

**B類** 建物は4棟で、内訳は東西棟1棟(SB 05)・南北棟3棟(SB 20・21・23)である。発掘区の北東





HJ第750次調査 A・C類の区画溝と井戸・土坑ほか（1/800、方眼は30m四方）

部にあるS B 05は桁行5間の大型の東西棟で、A群のS B 03・04とは位置が重複・近接するため、同時併存の可能性はない。同南西部にはB類の区画割の塀S A 15のすぐ西側で桁行3間の南北棟S B 20・21・23が東側柱列の柱筋を揃えて南北に重複して建つ。S B 21はA類のS B 22と位置が重複し、先後関係からS B 20・23より古い。S B 23の南側柱列はA類のS B 16の南側柱列と柱筋がほぼ揃う。

柱列は5条あり、柱間1・2間の小規模なものが建物と同様に発掘区の北東部（S A 03・34）と南西部（S A 16・18・19）でみられる。S B 05の北側柱列中央部のすぐ北にあるS A 03はその目隠し塀の可能性がある。

**C類** 建物は16棟で、内訳は東西棟11棟（S B 02・06～09・13・17・19・32・36・43）、南北棟及びその可能性があるものが5棟（S B 12・24・26・34・35）で、発掘区の北西部を除く範囲でみられる。

規模がわかるものは桁行3間が大半を占め、南北棟は南半部に限られる。S B 24・26はすべての側柱列が3間で、柱間が短い南・北側柱列が妻側と考える。S B 19・32は桁行4間で、S B 17・43も同4間かそれ以上の可能性がある。

発掘区の北東部では、ほぼ同規模の2棟の東西棟S B 06・07及びS B 08・09が柱筋を揃えて東西に並ぶ。先後及び位置関係から後2者は前2者の建替えとみる。同南東部では、ほぼ同規模の2棟の南北棟S B 34・35

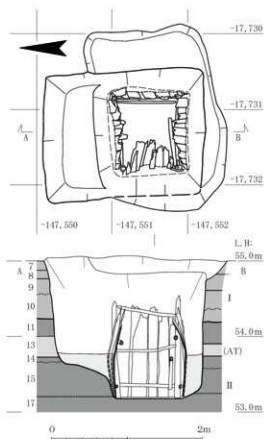
が柱筋を揃えて東西に並ぶ。S B 32は先後関係からS B 34・35より新しく、S B 36はS B 34より新しい。

西寄りでは、区画割の溝S D 21の南に沿う東西棟S B 13の東隣に桁行3間の南北棟S B 26が建ち、その約15m南でも東西棟S B 17の東隣に桁行3間の南北棟S B 17が建つ。S B 12・13の北側柱列はC類の区画割の溝S D 21の南に沿うS D 22の溝心、S B 34・35の北側柱列は同様の溝S D 23の溝心の西延長上に位置する。S B 36の南側柱列はC類の区画割の溝S D 24上に位置する。いずれの柱列も先後関係から溝より新しい。

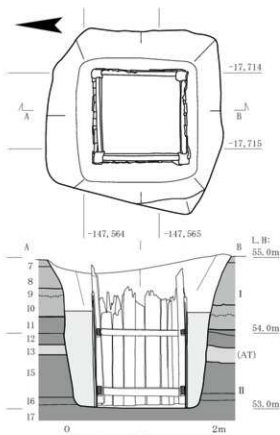
A・B類の建物との先後関係は、S B 19がA類のS B 18より、S B 34がA類のS B 33より、S B 36がA類のS B 37よりそれぞれ新しい。重複関係は発掘区の南寄りでも多く認められるが、北寄りではS B 02がA類のS B 01と重複するのみである。

柱列は10条あり、その内訳は東西方向8条（S A 04・11・12・22・24～26・37）、南北方向2条（S A 02・05）である。建物と同様に発掘区の北西部を除く範囲でみられ、規模がわかるものは柱間3間か最多い。

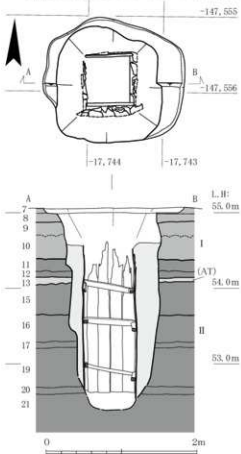
東西方向のS A 11・22・25・37はC類の区画割の溝S D 21に沿う。S A 04はS B 06・07の南側柱列と、S A 11はS B 26の北側柱列と柱筋が揃う。S A 11は1.5m南にある東西棟S B 13の妻側柱列と両端がほぼ揃うことから、目隠し塀か縁側の柱列の可能性もある。



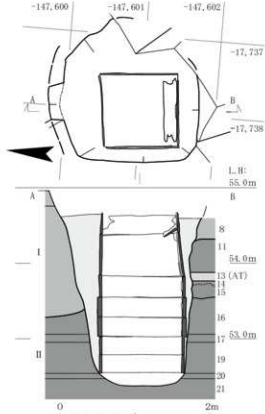
HJ第750次調査 SE 01 平面・立面図 (1/50)



HJ第750次調査 SE 02 平面・立面図 (1/50)

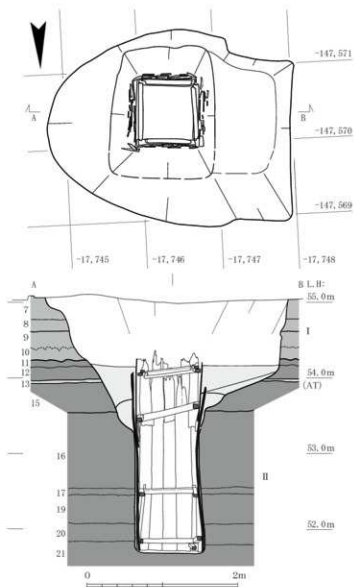


HJ第750次調査 SE 03 平面・立面図 (1/50)



HJ第750次調査 SE 06 平面・立面図 (1/50)

※いづれも層番号は柱状図と対応



HJ第750次調査 SE 04 平面・立面図 (1/50、層番号:柱状図と対応)

## b. 井戸

SE 01～06の6基があり、SE 05を除く5基で井戸枠が残っていた。掘方の掘削床はSE 01・02が概ね標高53.0m、SE 03・05・06が概ね標高52.5m、SE 04が標高51.8mで、いずれも基盤層の砂層内である。

SE 01・02ともに井戸枠は方形縦板組横柱横棧留で、隅柱・横棧はSE 01が丸太材でSE 02が角材。SE 01の井戸枠内からは8世紀後半の土器が出土している。SE 02は先後関係からB類の建物S B 05より新しく、井戸枠内から8世紀末の土器が出土した。

SE 03・04ともに井戸枠は方形縦板組横棧留。SE 03の中心はA類の建物S B 11の棟筋の北延長上に位置する。井戸枠は本来上下2段組とみられ、残存する井戸枠上に抜取穴がある。井戸枠の抜取穴内から8世紀末

の土器が出土した。SE 04の井戸枠は上下2段組で、下段の内側に上段の縦板を横棧で押さえて支持する。先後関係からC類の区画割の溝SD 21より新しく、井戸枠内から8世紀末の土器・銭貨等が出土した。

SE 05 井戸枠は残存しなかったが、掘方埋土に板材や角材の細片を含み、掘方底面中央部に方形の礎敷きが残ることから、方形縦板組横棧留と想定できる。中心の位置はA類の建物S B 22及びB類の建物S B 23の棟筋のほぼ南延長上にあたる。先後関係からA類の建物S B 25と後述の土坑S K 05より新しく、掘方埋土から8世紀後半の土器片が出土した。

SE 06 井戸枠は方形横棧組で7段分が残り、上から2段目は転用材（机か）である。四隅の仕口は柄組で上下は太杓を介する。中心の位置はC類の建物S B 24の棟筋のほぼ南延長上で、先後関係から後述の土坑S K 06より新しい。井戸枠内から8世紀末の土器が出土した。

## c. 排水溝

SD 17・18ともにA類の建物S B 27に伴うとみられる溝。SD 17はA類の区画割の溝SD 03から東に分岐してS B 27の北側に沿う。SD 27は同東側に沿い、先後関係からC類の区画割の溝SD 21より古い。本来は一連の溝で、建物の排水溝あるいは雨落ち溝の可能性はある。

SD 19 A類の区画割の溝SD 03から東に分岐する平面L字状の溝。A類の建物S B 29とは位置が重複するため同時併存せず、先後関係からC類の区画割の溝SD 25より古い。宅地や建物の排水と関わる可能性がある。

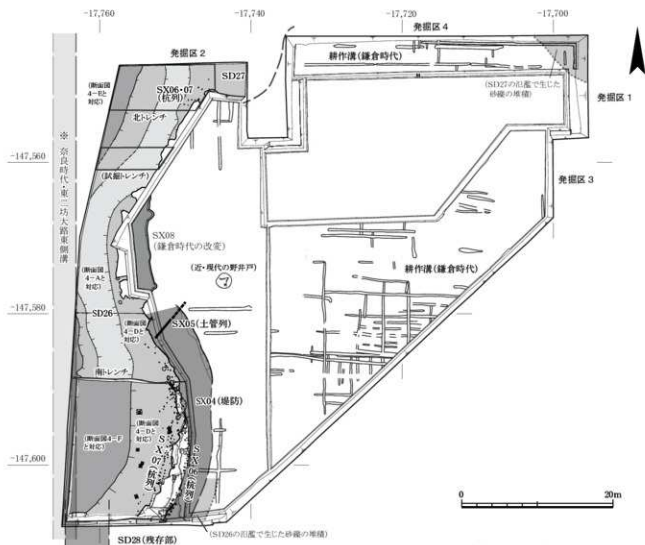
## (3) その他

### a. 溝群

SD 04～16 発掘区北西部で検出したA類の東西方向の溝群で、約3m間隔で掘削されている。A類の区画割の溝SD 03の東側でSD 04～09、その西側でSD 10～16を検出したが、位置関係から一連のものとみる。先後関係から前者はSD 03より古く、後者はA類の建物S B 11やC類の区画割の溝SD 20より古い。宅地利用前の遺構と考えられ、耕地の畝間の溝あるいは宅地開発時の排水に伴う溝の可能性はある。

### b. 土坑

SK 01～03 SK 01・02は先後関係からC類の建物S B 13より新しく、SK 03はC類の区画割の溝SD 21より新しい。いずれも埋土に炭粒を含み、8世紀後半～末の土器が出土した。



HJ第750次調査 遺構平面図②—鎌倉時代以降— (1/500)

S K 04～06 S K 04は東部分が残る。S K 05・06は先後関係からそれぞれ井戸 S E 05・06よりも古く、形状から前身の井戸の掘方の可能性もある。

S K 07 先後関係から A 類の建物 S B 28 より新しく、C 類の区画溝の溝 S D 24 より古い。

S K 08～10 先後関係から S K 08 は A 類の建物 S B 38 より古く、S K 09 は A 類の東西方向の柱列 S A 31 より古く、S K 10 は C 類の区画溝の溝 S D 21 より古い。

### c. 池状遺構ほか

S X 01 A 類の区画溝の溝 S D 03 の南端に接続する池状の遺構で、S D 03 と西肩の位置が揃う。埋土は灰色のシルトで、8 世紀後半の土器が出土した。

S X 02 C 類の区画溝の溝 S D 22 の南側に広がる窪みで、南肩沿いに複数の溝状の侵食がみられる。埋土は S D 22 と一連で、8 世紀後半の土器が出土した。

S X 03 一辺 1.5～2 m の方形の土坑が 6 基以上重複

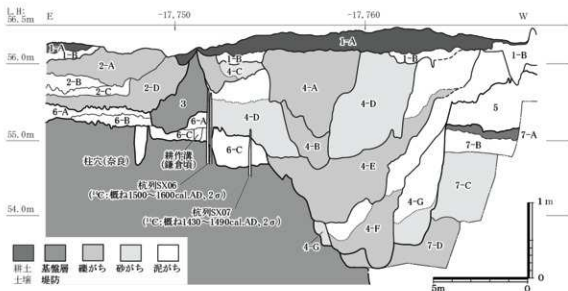
したもので、先後関係から A 類の建物 S B 25・柱列 S A 14、B 類の柱列 S A 08、C 類の建物 S B 24・柱列 S A 12 より古い。埋土から 8 世紀後半の土器が出土した。

### 3. 鎌倉時代以降の遺構

鎌倉～室町時代の埋没河川 3 条 (S D 26～28) と S D 26 に伴う堤防 1 条 (S X 04)・土管列 1 条 (S X 05)・杭列 2 条 (S X 06・07)、耕作溝がある。

S D 26 地溝が旧河道を反映する現水田の床土直下の面で検出した埋没河川で、やや蛇行しながら南流し、北端では東岸側に後述する埋没河川 S D 27 が合流する。発掘区の南・北辺にトレンチ (南・北トレンチ) を設定して掘り下げた。

河道は幅 18 m 程度、深さ 2.8 m で、基盤層・後述する埋没河川 S D 28 の埋土及びその上に堆積する沼沢地の様相を示すシルト・粘土層を掘り下げて形成しており、東岸沿いに後述する堤防 S X 04 が構築されている。



- 1:水田耕土・床土  
 A (耕土)黒灰色砂質シルト B (床土)灰色砂礫混り粘土  
 2:埋没河川SD26の氾濫堆積層  
 A・D 灰色砂礫 B・C 灰色砂質シルト  
 3:堤防SX04  
 灰色粘土ブロック・灰色砂礫(ともに厚0.2m前後)の互層  
 4:埋没河川SD26の河道内堆積層  
 ※ユニット(ある特定の性格で関連付けられる複数の層の一群)単位  
 A (流路埋土)灰色砂礫 B(流路埋土)灰色砂礫  
 C (流路埋土)上位一灰色シルト質砂・下位一灰色砂礫  
 D (流路埋土)上位一青灰色粘土・下位一灰色砂・礫互層(砂がち)

- E (流路埋土)上位一青灰色粘土・下位一灰色砂礫(礫がち)  
 F (流路埋土)上位一青灰色腐植混りシルト・下位一灰色砂礫(礫がち)  
 G (当初の堆積層)上位一青灰色腐植混りシルト・下位一灰色砂  
 5:沼沢地の堆積層(遊水地か)  
 青灰色砂質シルト  
 6:埋没河川SD28の氾濫堆積層  
 A 青灰色砂質シルト B 褐色砂質シルト C 暗灰色砂質粘土  
 7:埋没河川SD28の河道内堆積層  
 A (土壌化)暗灰色砂質シルト B 青灰色砂質シルト  
 C 青灰色シルト質砂 D 灰色砂礫(礫がち)

HJ第750次調査 埋没河川SD26・28、堤防SX04土層断面図(横:1/200、縦:1/50)

(※桜材の<sup>14</sup>C年代測定値は、奈良文化財研究所 村田泰輔氏の提供資料による)

河道内では埋没が進む度に流路を繰り返し掘り直しており、発掘区南壁における埋土の断面観察ではA～Gの7つのユニットが識別できた(断面図参照)。河道内の当初の埋土であるGと及び埋没後に掘り直された流路内の埋土D～Fは(下位)砂・砂礫→(上位)砂質シルトと埋没が進むにつれ細粒化する。埋土D～Fに伴う流路はほぼ河道幅で掘削されている。同A～Cは砂礫主体で、後述する堤防SX04東側の堆積層の様相から、B・Cは一連のユニットとみなせる。伴う流路はD～Fと異なり河道の中央付近に掘削されている。

南トレンチでは、流路内の埋土A～Dの掘り下げ時に16世紀～17世紀初頭の土師器・瓦質土器片、堤防SX04沿いの同Dに伴う流路底から16世紀の土師器・瓦質土器・国産陶器片、柿経、漆器椀、北宋銭(聖宋元宝)、同Gの砂質シルト層から笹塔婆が出土した。北トレンチでは同A～Dの掘り下げ時に16世紀～17世紀初頭の土師器・瓦質土器・国産陶磁器片、土管片と石造物3点(箱仏2・五輪塔水輪1)が出土した。

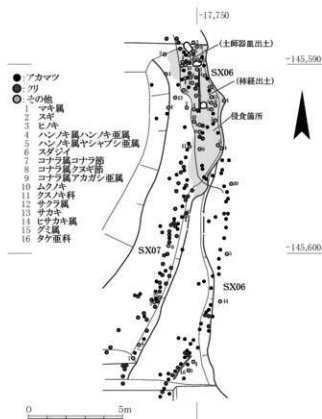
SD27 SD26の北端において東岸側に合流する埋没河川で、河道内の埋土はSD26と一連である。流向が東西方向とみられ、発掘区北東隅の土層断面では氾濫で

形成された可能性のある砂礫層が観察できた。

SD28 発掘区南西隅においてSD26の直下で検出した南北方向の埋没河川。東部分はSD26の河道の掘削で破壊されている。河道の幅は10m程度、中心はY=-17,761付近で、東二坊大路東側溝と西屑の位置が揃う可能性がある。河道内の埋土の層位から鎌倉時代の旧耕土層上面から掘削されたと推察する。

河道内の埋土は上位が青灰色砂質シルト～シルト質砂、下位が河床礫とみられる灰色砂礫で、埋没が進むにつれ細粒化し、最上層上面付近は土壌化がみられる。時期不明の土器片が数点出土した。なお、南壁断面で後述する鎌倉時代の切土改変部SX08上を覆う青灰色粘土層(断面図6層)は層位的に上層と対応し、層相も似ていることからその氾濫堆積層とみる。

SX04 SD26の東岸に沿う南北方向の堤防で、SD28の氾濫堆積層の形成後に築かれている。発掘区南壁断面において、堤体は幅約3m、高さ約1mで、地山のシルト・粘土ブロックを積み上げて構築し、基底部分はSD28の氾濫堆積層を掘り下げて形成した状態が観察できた。基底部の掘り下げに伴う窪みは、SD14の東岸沿いでも検出している。堤体の西側面はSD26の水



図第750次調査 杭列SX06・07平面図(1/200)

(※ 杭材の樹種判定は全原正明氏(奈教大)・全原正子氏・全原美奈子氏(文化財科学センター)の提供資料による)

流により浸食され、東側面上はS D 26の流路内埋土A～Cの氾濫で生じた2層の砂礫層が堆積する(断面図参照)。

沼沢地の様相を示すシルト・粘土層を掘削してS D 26の河道が形成されることから、S X 04の本来の性格は田尻保川の遊水地の堤防であり、シルト・粘土層は遊水地内の埋土、S D 26は埋没が進んだ遊水地の排水を確保するためにS X 04沿いに掘削された水路と考える。蛇行の要因については、S D 28の埋没時に生じた自然流路を遊水地の排水路に活用したためと想定する。S X 05 S X 04に伴う暗渠の土管列で、瓦質土管を8本以上連ね、堤体基底部を横断する。堤防東側にたまった水を遊水地やS D 26へ排水する機能が推察できる。S X 06・07 S X 06は埋没河川S D 26の東岸及び堤防S X 04の西裾に沿う杭列で、南・北両トレンチで検出した。南トレンチでは基本的に1列で打設されているが、堤防側面の侵食が著しい箇所では2列あるいはランダムに打設され、2列の杭の間に頭大の礫を並べることで土留めを強化している。1・2列の杭列にはタケを用いたしがみが残る。北トレンチでは前述した埋没河川S D 27の合流部を横断する。

S X 07はS X 06の約1m西側に沿う杭列で、南・北両トレンチで検出した。南トレンチでは概して2～3列で打設されるが、不規則な箇所もみられる。北トレンチではS D 27の合流部で途切れる。

両者の杭はともに一方の先端を尖らせた径10cm前後、長さ1～1.5mの樹皮付きの丸太材で、地表から0.5～0.7m下まで打ち込んでいる。1～3列で打設された杭の大半はクリとアカマツで、S X 06のランダムに打設された杭は多様な樹種の広葉樹である(平面図参照)。

なお、杭材の放射性炭素年代測定を行ったところ、S X 06が概ねAD1500～1600年、S X 07が概ねAD1430～1490年(ともに暦年校正)の結果が得られた<sup>2)</sup>。

堤防S X 04の形成要因や埋没河川S D 26の埋没過程を踏まえると、S X 16は流路埋土Dに伴う流路の掘り直しに伴うS X 04の改修時の杭列、S X 17はS X 04の堤体形成当初の杭列の可能性がある。

S X 08 S D 26の東側で検出した平坦面とその東縁に沿う比高差0.2mの西落ちの段差からなる南北方向の切土改変部で、S D 28の氾濫堆積層の暗灰色砂質粘土で埋まる。段差の位置はY=-17,753付近である。耕作溝 鎌倉時代の旧耕土層上面から掘り込まれており、東西方向のものも南北方向のものがある。

#### IV 出土遺物

遺物整理箱で100箱分があり、土器類が大半を占める。内訳は以下の通りである。

##### 1. 土器類・土製品

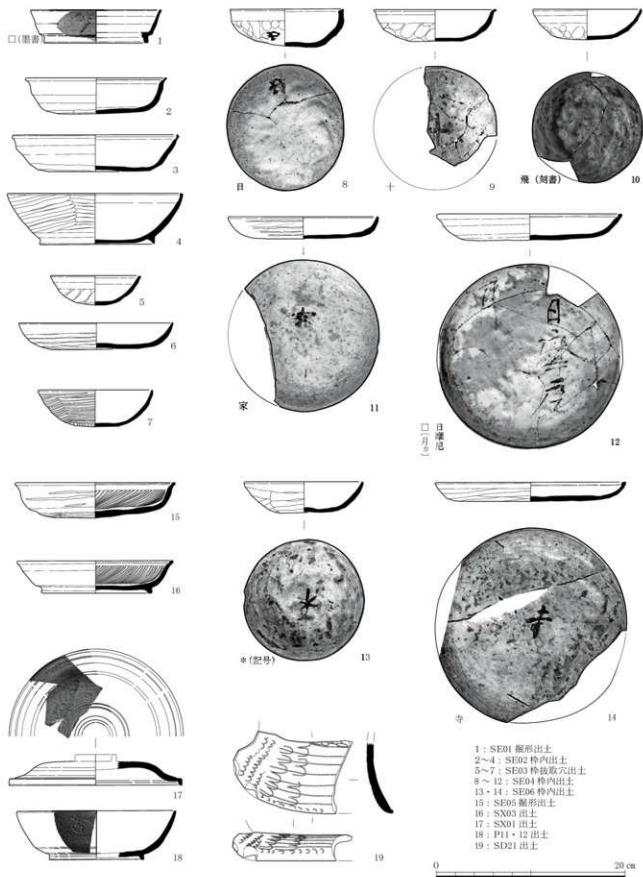
奈良時代後半～平安時代初頭のものが多い。他に古墳～飛鳥時代と鎌倉～江戸時代初頭のものがある。

##### (1) 古墳～飛鳥時代

主なものは溝S D 01から出土した土師器壺・壺と、奈良時代の井戸S E 04の掘方埋土等から出土した円筒埴輪片である。溝S D 01から出土した壺は小型で肩部に把手が付き、壺は球状の肩～体部の破片で長頸壺とみる。ともに古墳時代後期～飛鳥時代の特徴がある。円筒埴輪片はすべて細・小片である。外面タテハゲ調整で突帯が低く、埴輪編年V期の特徴を示す。

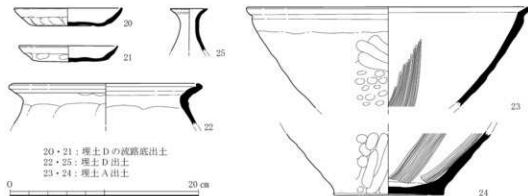
##### (2) 奈良時代後半～平安時代初頭

主に井戸・溝・土坑の埋土や整地土層から出土し、8世紀後半～末のものが大半を占める。土器類の主な器種は土師器杯・杯蓋・椀・皿・高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・壺・平瓶・横瓶・甕、施釉陶器杯・皿、製塩土器で、須恵器壺・平瓶・横瓶はミニチュア製品を含む。主な土製品は甕・陶甕・土馬である。一部を図示した。



HJ 第750次調査 出土土器 ①奈良～平安時代初頭 (1/4)

(※図に挿入した写真は奈良文化財研究所が撮影、墨書土器は赤外線写真)



HJ第750次調査 出土土器 ②埋没河川SD 26 出土 室町後期～江戸時代(1/4)

井戸から出土した土器の様相は、以下の通りである。SE 01 枠内から出土した土師器は杯・皿が少なく、椀はない。須恵器にはミニチュア横瓶や浄瓶があり、杯Bは転用甕を含む。掘方埋土から出土した須恵器杯Bの器表に墨書がある(1)。8世紀後半の特徴を示す。

SE 02 枠内から出土した土師器杯B・椀Aはc3手法で外面を調整する。栴痕跡内や枠内から出土した土師器杯A・椀Aの一部と須恵器壺G・Mは完形である。8世紀末の特徴を示す。

SE 03 栴採取穴や枠内から出土した土師器皿A・椀Aはc手法で外面を調整する。壺は少ない。栴採取穴から出土した土師器皿A(6)・椀A(7)・椀C(5)・甕と須恵器皿Aはほぼ完形で、8世紀末の特徴を示す。SE 04 枠内から出土した土師器杯B・椀Aの外面調整はc手法、同皿Aはa・c手法。底部外面に墨書・刻書がある土師器椀C(8～11)・皿A(12)が出土している。皿Aの「日摩尼」は仏教用語で、千手観音の右の第8手が持つ太陽をかたどった玉をさす<sup>1)</sup>。須恵器杯蓋は転用甕を含む。土師器壺Eや黒色土器A類杯も出土している。8世紀末の特徴を示す。

SE 05 土師器杯A(15)・皿Aは口縁部内面に斜放射状の暗文を施すものを含み、椀はない。須恵器杯Bは転用甕を含む。8世紀後半の特徴を示す。

SE 06 枠内から出土した土師器椀Aの外面調整はc手法で、同皿Aはa・b・c手法がみられる。底部外面に墨書がある土師器皿Aが2点、同椀Cが1点出土しており、土師器皿Aのうち1点は「寺」と書かれている(13・14)。壺は少ない。須恵器の横瓶とミニチュアの壺・平瓶は完形。8世紀末の特徴を示す。

池状遺構SX 01から出土した土師器杯A・皿Aは外面をa手法で調整し、口縁部内面に斜放射状の暗文を施す。外面に唐草文の線刻を施す須恵器蓋も出土している。SX 03から出土した土師器杯B(16)も口縁部内面に

斜放射状の暗文を施す。ともに8世紀後半の特徴を示す。特記すべきものに、器表に唐草文の線刻を施す須恵器蓋(17)・椀C(18)と鳥形甕蓋(19)がある。

前者のうち、蓋は池状遺構SX 01、椀Cは区画溝の溝SD 01や同SD 02東側で検出した小土坑P 11・12から出土した。同様の須恵器蓋・椀Cは平城宮東院地区で奈良文化財研究所が実施した平城第104次調査(昭和53年度)の溝SD 8600で8世紀前半の土器とともに出土しており、唐代の金属器を模倣した可能性がある<sup>2)</sup>。

後者は区画溝の溝SD 21から出土した。器表に羽毛のへら描きがある。京内において出土数の少ない陶器で、同様のものは左京八条三坊九・十坪で奈良文化財研究所が実施した平城第93次調査(昭和50年度)の溝SD 1155(八条条間北小路南側溝)で出土している。

### (3) 鎌倉～江戸時代初頭

鎌倉時代の土器には、12～13世紀頃の瓦器椀(大和皿類)、土師器羽釜(大和B型)・皿、輸入陶磁器類(青磁・白磁)碗・皿があり、旧耕土層(柱状図6層)や室町時代の埋没河川SD 26から出土した。

室町～江戸時代初頭の土器の大半は埋没河川SD 26の流路埋土A～D及びDの流路底から出土した16世紀～17世紀初頭のもので、土師器皿(20・21)・羽釜(大和I型:22)、瓦質土器摺鉢(23・24)・捏鉢・鉢、国産陶磁器(備前産・徳利:25、信楽産一摺鉢)がある。

### 2. 瓦類

奈良時代の軒瓦、丸・平瓦・埴、室町時代の軒平瓦、瓦質土管がある。奈良時代の瓦類は主に区画溝・井戸の埋土や整地土層から出土した。大半が丸・平瓦で、軒瓦の内訳については軒丸瓦が6075A、6225種別不明(AかF)、6304A、6316D、型式不明が各1点ずつ、軒平瓦が6663F、6714A、型式不明が各1点ずつである。

室町時代の軒平瓦は埋没河川SD 26から出土し、室町時代後期の大安寺247型式と同范である。瓦質土管



は暗渠の土管列 S X 05 に伴うものや S D 26 の埋土 A ~ D から出土したもので、前者はほぼ完形である。

### 3. 木製品

主なものは、奈良時代後半～平安時代初頭の井戸枠・曲物・箸・櫛・斎串と室町時代の笹塔婆・柿経・漆椀である。奈良時代後半～平安時代初頭の櫛は井戸 S E 02、曲物・箸は同 S E 04、斎串は同 S E 06 のいずれも井戸枠内から、室町時代の笹塔婆・柿経・漆椀は埋没河川 S D 26 からそれぞれ出土した。笹塔婆には「アマタフツ」の線刻があり、柿経は観無量寿経の一節を墨書で記している（写真）。

### 4. 金属製品

主なものは奈良時代後半～平安時代初頭の熊手・釘・帯金具・銭貨（万年通宝：初铸 760 年）、平安時代後半の北宋銭（聖元元宝：初铸 1101 年）である。熊手は井戸 S E 04、釘・帯金具と万年通宝は同 S E 06 のいずれも井戸枠内から出土した。聖元元宝は室町時代の埋没河川 S D 26 から出土した。

### 5. 石器・石製品

主なものは縄文時代頃の石鎌、室町時代の石造物（箱仏 2 点、五輪塔水輪 1 点）である。石鎌は基盤層最上層の上面から出土したもので、サヌカイト製で無茎。石造物は埋没河川 S D 26 の北トレンチの流路埋土 A から出土したもので、箱仏は地蔵像が彫られている。

## V 調査所見

今回の調査では、左京六条三坊三坪北西部の宅地利用の様相とともに佐保川が形成した氾濫平野の基盤層及び飛鳥時代以前の遺跡の様相、鎌倉～室町時代の埋没河川・氾濫平野及び耕地の形成過程がわかった。

### 1. 基盤層と飛鳥時代以前の旧地形・遺跡について

基盤層・旧地形 奈良時代の遺構面となる最上層上面は標高 55.3m で、左京六条二坊十三・十四坪にあたる西隣接地の調査地よりも 0.3～0.8m 高く、すぐ南方の左京六条二・三坊及び七条二坊にあたる京奈和自動車道奈良 I C 計画地内の調査地よりも 0.3～1.3m 高いことがわかった。

深掘部における最上層上面から 3.6m 下までの地層観察と自然科学分析の結果からは、層序・層相が泉隈報 (2022) で図示された奈良 I C 計画地内の基盤層のうち微高地の様相を示す「3区深掘 Tr」とほぼ対応する。最上層上面から 1.0～1.2m 下までが縄文時代早期以降に形成された層、その下が後期旧石器時代に形成された層で、大局的には最終氷期の最寒冷期と縄文時代中期頃～鎌倉時代に沖積作用が沈静化することや、後者には A

T 火山灰の再堆積層を挟み、その直下の層に含まれる有機物の放射性炭素年代測定値が奈良 I C 計画地と同様に A T 火山灰の年代値と新旧逆転することも確認した。

縄文時代早期以降の層では最上層からの乾裂痕が顕著なのに対し、後期旧石器時代の層ではほとんど見られない点については、前者が沖積作用の変化によって乾燥と湿潤を繰り返したのに対し、後者は湿潤な沼沢地の状態を維持した堆積環境の違いを反映すると考える。縄文時代早期後葉～末の暗色の粘土層の植物微化石分析では、当時は乾燥気味でササやススキが繁茂していたことがわかった。その直上へ上方が粗粒化する灰色砂～砂礫層が堆積することからは、微高地上に小水路が存在することや、長期的には沖積作用の活発化と捉えられる状況も短期的には侵食・乾燥につながる沖積作用の沈静化と堆積につながる活発化を繰り返したことが読み取れる。

飛鳥時代以前の遺跡 古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物 1 棟と溝 1 条を検出し、西隣接地の調査地を含めた範囲では飛鳥時代以前の居住関連の遺構が極めて少ないことがわかった。S D 01 は耕地に伴う水路の可能性がある。埴輪編年 V 期の円筒埴輪片が出土したことから、周辺に後期古墳が存在することが推察できる。

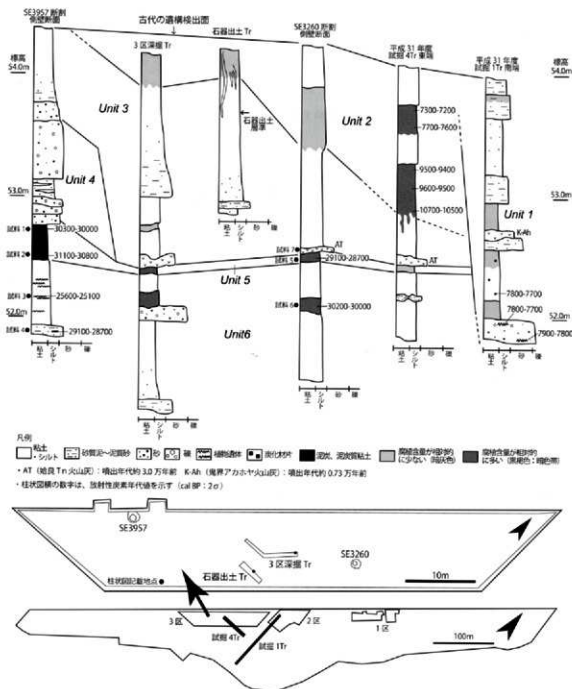
### 2. 三坪北西部の宅地利用の様相について

出土遺構や出土遺物の様相から、奈良時代後半～平安時代初頭に宅地に利用されたことがわかった。

掘立柱建物・柱列は柱筋、溝は延長方向の方位の東西・南北に対する振れにより、A 類：方位とほぼ合うもの、B 類：方位北に対し西、または同東に対し北にやや振れるもの、C 類：方位北に対し東、または同東に対し南にやや振れるもの 3 つに分類でき、先後関係からは、(旧) A 類→B 類→C 類(新) の変遷を読み取ることができると。

特に三坪北西部の宅地区分と建物配置については、

- 1) A 類の区画溝・塀の位置について、三坪東辺の推定位置から S D 02 の溝心までの距離は 63m (210 小尺)、S A 32 までが 60m (200 小尺)、S D 03 の溝心までが 90m (300 小尺) で、概ね 30m 間隔である。
- 2) A 類の中央群の建物 S B 27 の中心の位置が三坪南辺の推定位置の 90m (300 尺) 北である。西群の建物もこの位置を境に南北 2 群に識別できる。
- 3) C 類の区画溝 S D 21 の溝心から三坪南辺の推定位置までの距離は 90m (300 小尺) で、S D 25 は S D 21 の溝心から 15m (50 小尺) 南に位置する。
- 4) C 類の建物は東寄りとし西寄りで建物配置が異なる。といった点から、六条条間南小路に面する坪の南辺及び



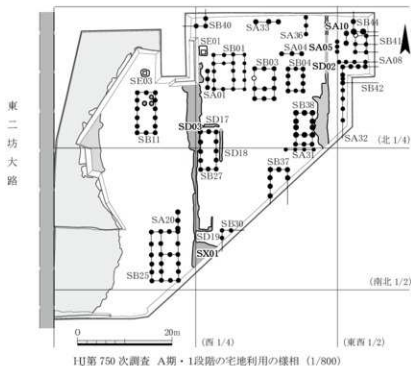
福考研奈良IC計画地の調査 (2018 ~ 20) の基盤層柱状図 奈良福考研 (2020) から引用

に東三坊坊間東小路に面する同東辺を基準とした東西・南北とも 120 m (400 尺) 四方の範囲を宅地利用の範囲とみなし、各辺を 4 分割した 30 m (100 尺) 方形の計画線を基準としたことが推測できる。

A・B 類の区画溝の溝・堀及び建物に関連する宅地区分は、宅地の西 1/4 分割線を境に東西に 2 分割し、西側は同北 1/4 分割線を境にさらに南北に 2 分割した (1/8 坪  $\times$  1 + 1/16 坪  $\times$  2) の構成で、1/8 坪の区画は南北に長い矩形、1/16 坪の区画は正方形に近いと想定できる。C 類の区画溝・堀及び建物に関連する宅地区分は、

宅地の北 1/4 分割線を境に南北に 2 分割し、南側をさらに南北に 2 分割した (1/8 坪  $\times$  1 + 1/16 坪  $\times$  2) の構成で、全ての区画が東西に長い矩形と想定できる。

三坪北西部の宅地利用の変遷は、柱筋の揃う建物・堀を同時併存とみなし、遺構の先後・重複関係と上記の宅地区分の想定に基づくと、A・B 類の区画溝の溝・堀及び建物から把握できる A・B 期 (8 世紀後半) と、A・B 類よりも時期が下る C 類の区画溝の溝・堀及び建物から把握できる C 期 (8 世紀末) の大きく 3 時期の変遷があり、A 期にはさらに 2 段階の推移が認められる。

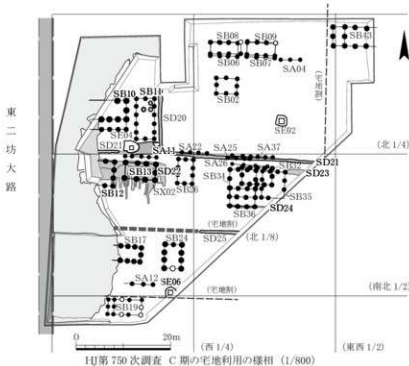
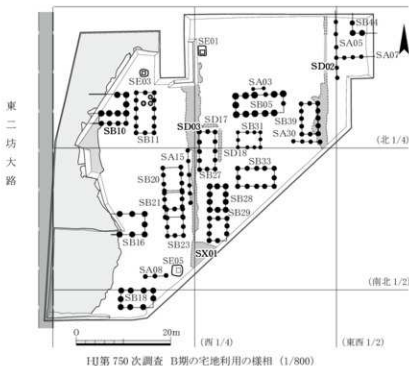


**A期** 居住関連の遺構の先後・重複関係から、1・2段階の小変遷を捉えることができる。建物はA類のみである。1段階では、東半部の区画では区画割の溝SD 02・03に沿って大型建物SB 01・27・38があり、SB 01の東隣に付属的な小型の南北棟SB 03・04が東西に並ぶ。西半部の区画では北側の区画に大型建物SB 11、南側の区画に大型建物SB 25が建てられる。

2段階では、桁行4間以上の東西棟の大型建物とそれに付属的な小型建物が加わる。東半部の区画では南北棟

のSB 27の東側に東西棟の建物SB 31が建てられ、その北側にSB 31、南西側にSB 28・29の3棟の小型の付属的な建物を伴う。東西棟SB 31と南北棟SB 28・29はL字状あるいはコの字状の配置と考えられる。西半部の北側の区画では南北棟のSB 11の西側に東西棟のSB 10が建てられ、南側の区画では南北棟のSB 25の代わりに小型の付属的な建物SB 22を東隣に伴う東西棟SB 14・15が建てられる。

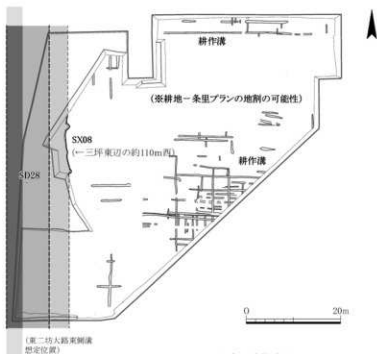
**B期** 区画溝SD 02・03が埋没して後者ではB類の区



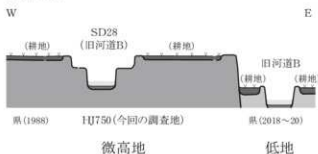
画解 S A 15 が設置される。建物は B 類への建替えがみられ、A・B 類が混在する。東半部の区画の北寄りでは、東西に並ぶ南北棟 S B 01・03・04 を除却して B 類の大型の東西棟 S B 05 が建てられ、A 類の南北棟 S B 38 が同様の南北棟 S B 39 に建て替わる。西半部の南側の区画では、A 類の大型の東西棟 S B 15 が A 類の東西棟 S B 16 に、東隣の付属的な A 類の小型の南北棟 S B 22 が B 類の小型の南北棟 S B 20・21・23 に建て替わる。

**C 期** 建物は主に C 類で、建物配置には各区画の東部分で同規模の建物を東西に 2 棟並べて配し、西部部分では東から南北棟—東西棟の順で配する規則性がある。北半部の区画では、東部分の南寄りが空地で、西部部分の建物は A 類の大型建物 S B 10・11 を A 期から継続して使用したと考える。北半部と南半部の北側の区画では、東部分の東西に 2 棟並ぶ建物は建替えが行われている。

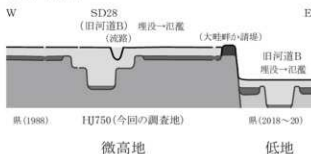
三坪の東西 2 分画線より東の建物・塀についても同様の時期区分による変遷が認められる。なお、瓦類がほと



●鎌倉時代



●室町時代前半



HJ第750次調査 鎌倉～室町時代前半の旧河道とその周辺の様相 (平面図：1/800)

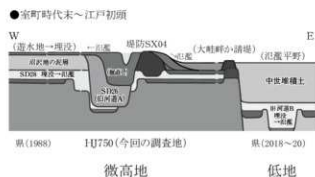
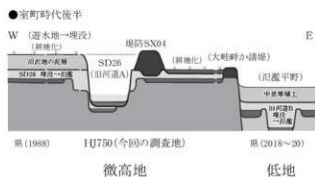
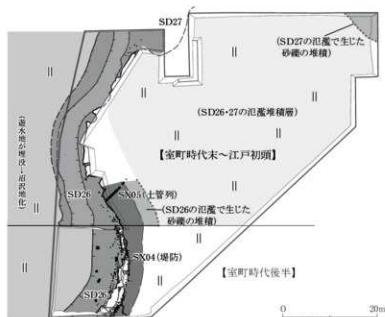
んど出土していないことから、建物が板葺き等の可能性がある。留意すべき遺物に、①「寺」や仏教用語の「日摩尼」の黒青土器、②外面に唐草文の線刻を施す須恵器 椀C・蓋、③鳥形甕があり、通常の宅地ではなく寺院と関連するなどやや特殊な性格を帯びた施設の可能性も考える必要がある。

### 3. 鎌倉時代以降の河川・氾濫平野及び耕地の形成過程について

発掘区の西寄りでは、北側延長部分が現在の佐保川と重複する旧河道を反映した地割の水田の床土直下において室町時代～江戸時代初頭の埋没河川SD26・27、SD26の東岸に沿う堤防SX04とその護岸の杭列SX16・17を検出し、SD26の直下で鎌倉～室町時代の埋没河川SD28を確認した。SX16・17の杭材の放射性炭素年代測定の結果やSD26の流路埋土A～Dの出土遺物の時期から、SX04の構築時期が15世紀中頃～後半で16世紀に改修されたことや、SD26が16世紀に機能し17世紀初頭に埋没したことも把握できた。

また、同中央～東寄りでは、奈良時代の遺構面である基盤層の直上に鎌倉時代の耕土層があり、上面から掘削された耕作溝を検出した。加えて、鎌倉時代は耕土層に乾裂痕がみられることから乾燥気味の土地条件であったことや、室町時代には河床が上昇して湿潤化したうえにSD26・28を通じて後背地の山地から多量の土砂がもたらされて厚さ1m以上の氾濫堆積層が形成され、シルト・粘土層の上面に耕地利用を示す代掻きの痕跡が残ることを確認した。

鎌倉～室町時代の埋没河川SD28の河道は、中心の位置と想定される川幅から奈良時代の東二坊大路東側溝を東に拡幅して掘削された可能性があり、鎌倉時代の旧耕土層に乾裂痕がみられることから当初は水位が低かったことが推察できる。鎌倉時代の耕地の地割については、SD28東側の切土改変部SX08の段差が三坪東辺の想定位置の約110m西に位置することや耕作溝の様相から、三坪東・南辺の位置を基準に坪境の畦畔を設けた条里プランであったと推察する。



HJ 第 750 次調査 室町時代後半～江戸時代初頭の旧河道とその周辺の様相 (平面図: 1/800)

堤防 S X 04 は室町時代～江戸時代初頭の埋没河川 S D 26 の東岸に沿うが、河道の西岸側が沼沢地の様相を示すシルト・粘土層であることから、本来は旧佐保川の遊水地の堤防で、S D 26 は埋没が進んだ遊水地の排水路として掘削されたと考える。遊水地の形成については、S X 04 と沼沢地の様相を示すシルト・粘土層の直下が S D 28 の氾濫堆積層であることから、S D 28 の埋没に伴う治水機能の低下が契機と考える。堤防の西側に沿う杭列 S X 06・07 は護岸を目的としており、S D 26 の河道内の流路との関係も踏まえると、S X 06 が侵食の進んだ堤防の改修時、S X 07 が構築時のものとみなせる。

埋没河川 S D 26・28 の氾濫堆積層は厚さがほぼ一定であることから、調査地のすぐ東に氾濫した流水や土砂を受け止める大畦畔あるいは請墾の存在が想定できる。

鎌倉～室町時代の多量の土砂の流入については、この時期に広葉樹林からマツ林へと変化する奈良盆地の植生史を考慮すると、上流域の山地斜面における森林伐採に

伴う土砂流出に起因する可能性が高い。

なお、樞考研の奈良 I C 計画地内の調査では、放射性炭素年代測定により埋没河川 S D 26 に対応する河道 A に含まれる生材で 15 世紀中頃～17 世紀初頭、その基盤となる中世の堆積層 (報文では「中世耕作土層」) に含まれる炭化材で 15 世紀前半～17 世紀前半、埋没河川 S D 28 に対応する河道 B に含まれる炭化材で 14 世紀初頭～15 世紀初頭の暦年値を得ており (樞考研 2020)、今回の調査成果と整合する。

以上の点を踏まえると、鎌倉時代から江戸時代初頭までの調査地付近の土地条件の変遷を図のようにまとめることができる。治水に関連する遺構の変遷からは、鎌倉時代の「深く掘られた水路による水量調整」の限界を室町時代後半に「遊水地による貯留と通水」で克服しようとした治水の発想の変化が推察できる。埋没が進んだ遊水地を耕地拡大に利用する意図がうかがえることも考慮しておく必要がある。また、現状では一連で捉えられる調査地付近の佐保川の氾濫平野が、基盤層が形成する



1J 第750次調査地周辺の旧状 (1/12,000、米軍1949年撮影空中写真に加筆)

(※ 等高線—基盤層上面の微地形で、樞考研の奈良IC調査地・本調査地及び周辺の調査地の成果から推定)

地形と鎌倉時代～江戸時代初頭に行われた耕地開発と治水・利水の違いから生じる異なる様相の複数の小地形の複合体であることにも留意する必要がある。河岸に高い堤防を伴う佐保川の現河道と水田から成り立つ現況の耕地景観の原形が成立するのは江戸時代初頭とみて間違いない。室町時代の埋没河川 S D 26 と佐保川の現河道との関連については、水田地帯に反映された菰川を含む旧河道の流形が現河道に近いことから、現河道は室町時代の S D 26 の機能を踏襲したうえで合流点を上流側へ移設し、高い堤防による水制と遊水地の機能強化により氾濫の抑制を図ったものといえる。上流側へ移す理由には、堤防構築に適した微高地の安定した地盤との関連が考えられる。「治山治水」の発想が鎌倉・室町時代と江戸時代で大きく異なることがわかる。

現在の水利慣行は江戸時代に成立したと考えられるが、旧河川の形成と耕地化の経緯を考慮すれば室町時代

後半頃にその祖型が存在した可能性がある。(安井宣也)

註

1) 奈良文化財研究所 畑中健志氏のご教示による

2) 奈良文化財研究所 神野恵氏のご教示による

参考・引用文献

- 『奈良市平城京左京六条二坊十二・十三坪発掘調査概報』
- 『奈良文化財研究所 2018年度(第2分冊) 奈良県立橿原考古学研究所編 1992 『平城京左京六条二・三坊、七条二坊』』
- 『奈良文化財研究所 2018年度(第2分冊) 奈良県立橿原考古学研究所編 2020 『平城京左京六条二・三坊、七条二坊』』
- 『奈良文化財研究所 2019年度(第2分冊) 奈良県立橿原考古学研究所編 2021 『平城京左京六条二坊、七条二坊』』
- 『奈良文化財研究所 2020年度(第2分冊) 奈良県立橿原考古学研究所編 2022 『平城京左京六条二・三坊、七条二坊、八条一坊』』 『大和を語る 38』 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 2023
- 河角龍典「佐保川流域平野における先史時代の地形変化—平城京左京五条二坊十五・十六坪の調査より—」『平城京左京五条二坊十五・十六坪』奈良県立橿原考古学研究所 2006
- 『昭和53年度平城京跡発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1978
- 『平城京左京八条三坊発掘調査報告』奈良県 1976



HJ第750次調査 調査地全景（左：西から、右：北東から）



HJ第750次調査  
発掘区1（北東部）  
（南西から）

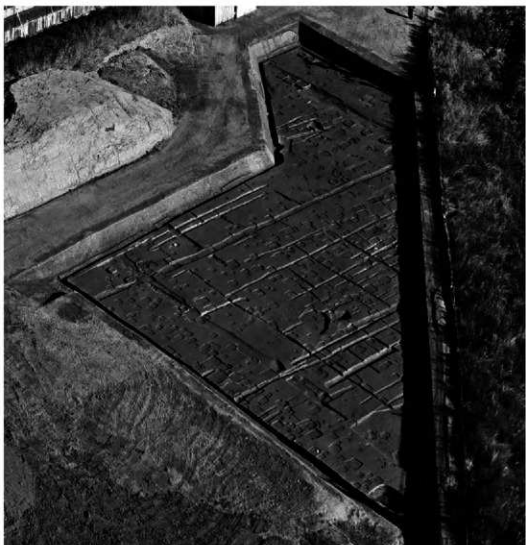


HJ第750次調査  
発掘区4（北東部北端）  
（東南東から）

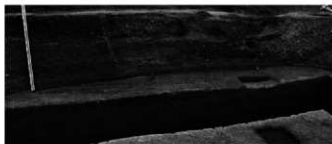




HJ第750次調査  
発掘区2（西部分）  
（南西から）



HJ第750次調査  
発掘区3（南東部）  
（南西から）



HJ第750次調査 発掘区土層断面 左上:SD26堤防東側(北から)、左下:西部分東壁(北西から)、右:北東部基盤層深掘部北壁(南から)



HJ第750次調査 井戸SE01(東から)



HJ第750次調査 井戸SE02(西から)



HJ第750次調査 井戸SE03

上:枠抜取穴内(南西から)、下:井戸枠(南から)



HJ第750次調査 井戸SE04 左：断割状態（北から）、右：井戸枠内（北から）



HJ第750次調査 井戸SE06 左：検出時（西から）、右：井戸枠北側板（南から）



HJ第750次調査 埋設河川SD26南トレンチ 当初掘り下げ停止面（左：北西から 右：垂直写真（上が北））



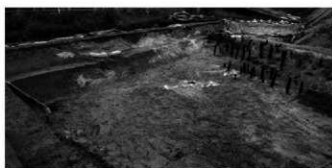
HJ第750次調査  
埋没河川SD 26 南トレンチ  
(北から)



HJ第750次調査  
埋没河川SD 26・28 断面  
(北から)



HJ第750次調査 堤防SX 14と氾濫堆積物 断面(北から)



HJ第750次調査 埋没河川SD 26 北トレンチ(南西から)



HJ第750次調査 杭列SX 06とそれに伴う石列・しがらみ(南西から)



HJ第750次調査 SD 26

(左から出土塔婆・棒柱、土師器皿出土状態(北から))

## 2. 平城京跡（左京二条四坊九坪）の調査 HJ第751次

事業名 有料老人ホーム新築  
 届出者名 株式会社 八重桜  
 調査地 法蓮町410-7、410-10

調査期間 令和3年5月10日～5月25日  
 調査面積 89㎡  
 調査担当者 久保邦江

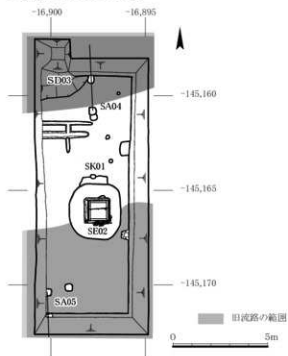
### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京二条四坊九坪の中央やや西よりの部分にあたる。同坪内では東隣で昭和56年に国131-16次調査が行われており、平城京造営以前の溝・掘立柱塼・土坑、奈良時代的一条大路南側溝・掘立柱建物・塼・井戸・土坑を検出している。この調査では古墳時代の旧流路が広範囲に広がっており、軟弱地盤を避けた建物配置となっている。

発掘調査は建物建設予定部分に南北14.5m、東西6mの発掘区を設定し、九坪の宅地内の様相を確認する目的で調査を実施した。

### II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、厚さ0.7mの造成土以下、耕作土(0.1m)、淡灰色土・明黄灰色土の床土(各0.1m)と続き、奈良時代の遺物包含層である茶褐色粘質土(0.15m)となる。包含層以下については、調査区北端部と南端部が奈良時代以前の旧流路埋土である灰色砂、発掘区中央部では明黄褐色土の地山となる。遺構の検出は旧流路埋土及び地山上面で行った。遺構検出面の標高は67.0mである。



【HJ第751次調査 発掘区平面図 (1/200)・断面図 (1/100)

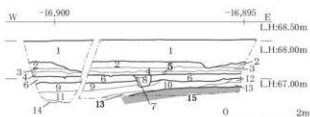


【HJ第751次調査 調査地位位置図 (1/5,000)

### III 検出遺構

奈良時代の土坑1基、奈良時代末から平安時代の井戸1基、時期不明の溝1条、柱列2条である。

SK01 発掘区中央部で検出した土坑。南半分は井戸SE03によって壊されている。東西1.5m、南北0.4m以上、検出面からの深さは0.35mである。埋土から奈良時代の土器器皿・杯・甕、須恵器甕の破片が出土した。SE02 発掘区中央部で確認した井戸。井戸掘方は東西2.75m、南北3.05mの隅丸方形である。枡材の南辺外側には直径0.1～0.2mの円礫が部分的に敷かれている。枡構造は方形縦板組横棧留で、内法は1.1m四方、検出面からの深さは1.7mである。枡材の縦板は幅27cm、厚さ5cmで各面に4枚ずつ使用している。縦板材は上下2か所で太柄留をしている。板材の中には筏穴を残すものや、床材を転用したと思われる加工が施されているものがある。横棧は一段分を確認した。隅柱は



- 1 淡黄褐色土・灰色土層 (造成土)
- 2 暗灰色土 (耕土)
- 3 淡灰色土
- 4 明黄灰色土 (3・4:床土)
- 5 淡灰色土・黄灰色粘土混
- 6 茶褐色粘質土
- 7 灰色粗砂・灰色粘土混 (住穴埋土)
- 8 淡茶褐色土・灰色土混 (住穴埋土)
- 9 灰色粘土・灰色砂
- 10 灰色砂・青灰色粘土混
- 11 灰色砂 (9～11:SD01埋土)
- 12 淡黄褐色土・茶褐色粘土混
- 13 青灰色細砂
- 14 黒色砂 (12～14:旧流路埋土)
- 15 明黄褐色土 (地山)

ないが、四隅の外側に幅10cm程度の縦板があてがわれている。幅9cm程度の板材の末端を加工し、三枚柄差の仕口を施している。

井戸は深さ0.55mまで埋め立てられた後、枠内を仕切るように東西方向に並べ、両脇から直径3cm程の細い棒状の部材を打ち込んで固定している。横板は湧水層より高い位置まで埋め立てた後で、その段階では井戸として機能していたとは考え難い。

井戸枠内からは奈良時代末から平安時代初頭の土師器の食器類や、須恵器甕の破片、灰軸陶器、瓦当欠損の軒平瓦が出土した。

SD 03 東で北に約27°振れる素掘りの溝で、発掘区北端で南岸を検出した。北屑を検出するために、北西部を一部拡張したが検出できなかった。幅2.5m以上、埋土は灰色粘土・灰色砂が混合したものである。深さは0.15mで、埋土から熨斗瓦片1点が出土した。

SA 04 発掘区北端部で検出した南北方向の柱列である。柱穴2基分で柱間は1.8m。柱穴は一辺0.4m四方、検出面からの深さは0.2mである。南側の底面には埴が礎盤として置かれていた。

SA 05 発掘区南端部で検出した南北方向の柱列である。南側の柱穴が南壁にかかり柱間は不明。柱穴は一辺0.4m四方、検出面からの深さは0.4mである。

#### IV 出土遺物

出土遺物は土器類が遺物整理箱3箱分、瓦類が遺物整理箱1箱分出土した。

土器類は土師器、須恵器、灰軸陶器、製塩土器等がある。多くが奈良時代末から平安時代初頭の土器である。柱穴から出土した土器は小片で時期は不明である。瓦類には軒平瓦(瓦当欠損)1点、埴1点、丸瓦、平瓦がある。

#### V 調査所見

調査の結果、奈良時代末から平安時代初頭の井戸を検出したが、それ以外は柱列、土坑があるのみで非常に遺構密度が希薄であった。調査面積が狭小であることに起因するのか、宅地利用上の空地であったのか、今後の周辺の調査に期待したい。(久保邦江)



HJ第751次調査 SE 02 (西から)



HJ第751次調査 発掘区全景(南から)

### 3. 平城京跡(左京一条七坊五坪)・奈良町遺跡・多聞城跡隣接地の調査 第753次

事業名 宅地造成

届出者名 株式会社 Dear

調査地 川上町 563 番 3 他

調査期間 令和3年5月28日～令和3年6月7日

調査面積 186.25㎡

調査担当者 中島和彦 久保邦江

#### 1 はじめに

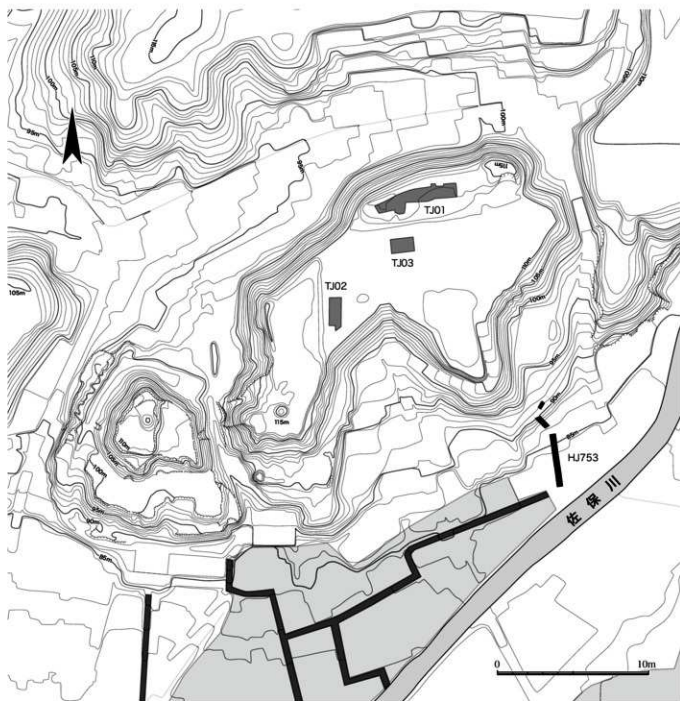
調査地は、平城京の条坊復元では左京一条七坊五坪の北辺と北一条条間路にあたるが、現状は東西方向の丘陵南面の裾部分であり条坊の施工は疑わしい。一方この丘陵上には、永禄3(1560)年から天正4(1576)年まで松永久秀によって築かれた多聞城跡があるが、昭和23(1948)年に行われた若草中学校建設工事によって、遺跡は大部分が削平された。その後奈良市による発掘調査が3回おこなわれ、第1次調査からは多数の瓦が出土し、多聞城使用の瓦の一端が明らかになっている。また多聞城の南側は、江戸時代には奈良奉行所の同心屋敷で、奈良町遺跡の一画となっている。



HJ第753次調査 調査地位位置図 (S=1/5,000)



HJ第753次調査 第1発掘区全景(北から)



HJ第753次調査 多聞城跡周辺地形図 (1/2,500)

今回の調査地は、多聞城の位置する丘陵南裾と丘陵南側法面の一部にあたることから、奈良時代の条坊の確認、多聞城の城郭関連遺構の確認、江戸時代の町家の広がり の確認を目的として調査を実施した。

調査地の現状は、佐保川北岸の土手から北へ長さ約60 mの平坦地があり、さらにその北の丘陵裾との間に長さ約20 mの緩斜面地がある。この北側は高さ約9.0 mの崖面で、崖上には南北約5 m、東西約17 mの細長い平坦地がある。平坦地北にはさらに学校テニスコートの長方形の平坦地があるが、これらが城郭に伴うものか

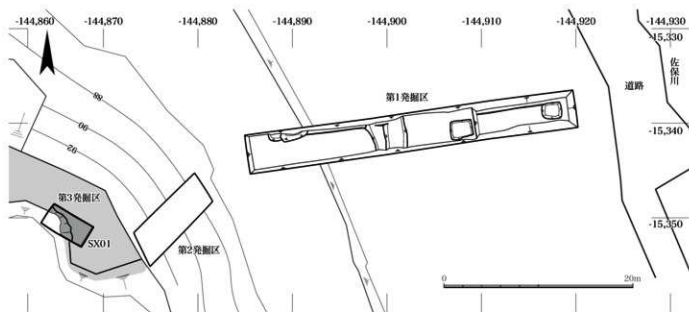
は不明。

上図は奈良文化財研究所作成平城京地形図(1/1000)を元に多聞城跡部分の地形のみを描き出したもので、昭和37(1962)年の多聞城跡の地形を示している。若草中学校部分は大きく削平されており、奈良市多聞城跡第1次調査地で僅かに旧状が残ること分かる。また今回の発掘調査地が多聞城跡の丘陵南東隅部分にあたることも見てとれる。

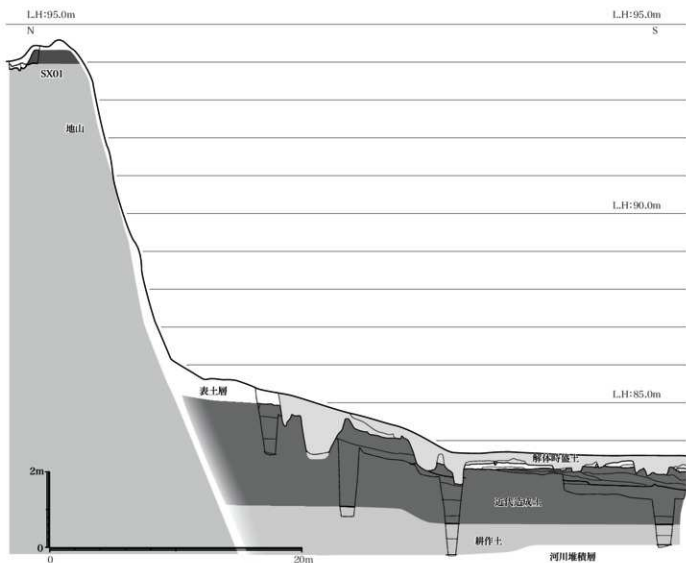
発掘区は、道路設置箇所(第1発掘区)と、工事で削られる南側崖面(第2発掘区)とその上の平坦面先



平城京跡 (左京一条七坊五坪)・奈良町道跡・多聞城跡隣接地の調査 第753次



HJ第753次調査 発掘区平面図 (1/400)



HJ第753次調査 発掘区土層図 (縦1/100, 横1/300)



HJ第753次調査 第1発掘区全景（南から）



HJ第753次調査 第3発掘区全景（西から）



HJ第753次調査 第1発掘区南端土層断面（西から）

端（第3発掘区）に設定した。また平坦面北側の暗渠排水溝の掘削工事に際して立会調査を実施し土層を確認した。

## II 基本層序

第1発掘区は、近現代の造成土が厚さ1.8～2.5 mあり、その下に厚さ0.5～0.8 mの耕作土がある。耕作土下は河川堆積層の暗灰色砂礫である。現地表下2.5～2.8 mまで掘削したが、湧水が激しくそれ以下は確認出来なかった。第2・3発掘区と平坦面北側の立会調査では厚さ0.15 mの表土層直下で地山の黄褐色土等となる。

## III 検出遺構

第1発掘区では先述のとおり河川堆積層を確認し、この層が南北約20 mにわたり存在することが判明した。耕作土からは江戸時代以降の遺物が出土しているが、河川の詳細な時期は不明。なお堆積層の上面の標高は81.0～81.2 mで、南側の佐保川の河原上面が標高約80 mであることから、第1発掘区は佐保川北岸の河原と考えられる。

第3発掘区では、平坦面南辺に沿って、高さ約0.7 m、幅約4.5 mの土手状の高まりSX01がある。SX01は地山の上に淡茶灰色土（小礫含む）を積んで築かれているが、堅固に築かれた様子が無く土塁と認識できるかは不明。周辺にはこの他の遺構は無く、時期を示す遺物も出土していない。

第2発掘区は崖の法面で、地山を確認したのみである。

## IV 出土遺物

土器類・瓦類が遺物整理箱1箱分出土した。多くは表土等からの出土で遺構に伴うものは無い。土器類には須恵器甕、土師器皿・羽釜、瓦質土器搦鉢・鉢、国産陶器椀（肥前産）・搦鉢（信楽産）等があり、大半が江戸時代以降のもので、一部中世後期に遡るものもある。

## V 調査所見

調査の結果、多聞城の南裾で河川堆積層を確認し、一帯が佐保川の河川北岸であることが判明した。河川の時期は不明で、多聞城の時期まで遡りえるかは今後の課題である。また丘陵部分はおおよそ地山を削り出しており、大規模な造成等は確認出来なかった。多聞城に伴う遺構・遺物は発見できず、曲輪等の城郭関連遺構が存在するかは不明である。（中島和彦）

## 4. 平城京跡（一条条間路（東五坊））の調査 HJ第754次

事業名 個人住宅新築

届出者名 東郷（香港）實業有限公司

調査地 法蓮町775番、786番地

調査期間 令和3年7月26日～7月30日

調査面積 106㎡

調査担当者 久保邦江

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京二条五坊北郊十一坪北側的一条間路にあたり、敷地北端部に北側溝が想定される位置にあたる。調査地南側にはかつて奈良中学（奈良高校）があり、昭和29年の校庭拡張に伴う調査で奈良時代の掘立柱建物・井戸を検出している。この調査では「小治田寺」の墨書がある土器が出土している（国1954）<sup>1)</sup>ことから、当該地周辺に飛鳥から小治田寺が移転してきたと考えられている<sup>2)</sup>。また、小治田寺は「大后寺」の法号を有しており、平安時代の『小右記』の記述の位置関係に矛盾がないことなどが指摘されている。奈良高校が移転した後は昭和58年に佐保幼稚園建築に伴う調査、昭和59・60年には宿泊施設増築工事及び駐車場整備に伴う調査を実施し、奈良時代の掘立柱建物・塀や、溝、平安時代初頭に廃絶する円形井戸を検出している（HJ第46次調査、県1985）。



HJ第754次調査 調査地位置図 (1/5,000)

調査に先立って、令和5年6月27～29日に試掘調査2022-2次調査を敷地西端で実施した。東西3m、南北21.5mの調査区を設定したところ、調査区北端部で東西方向の溝2条を検出した。埋土から奈良時代の須恵器・土器破片が出土したことから、これらの溝が奈良時代の条坊遺構に係るものである可能性が考えられた。そのため、溝の続きを東側へ追求して、平城京北端部の様相を明らかにし、小治田寺（大后寺）に関わる遺構を確認する目的で、試掘部分を含め東西14m、南北7（一部8）mの発掘区を設定し本調査を実施した。

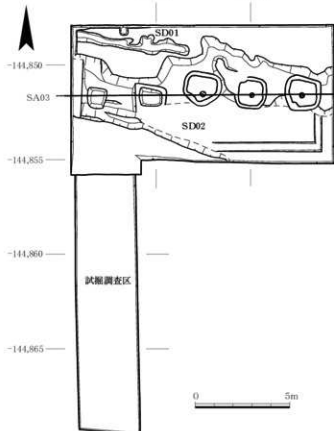
### II 基本層序

調査地の北側には小河川が西流しており、さらに北側には平城山丘陵から派生する台地が迫っている。

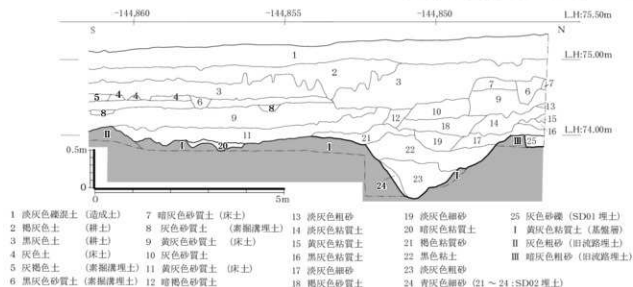
発掘区内の基本的な層序は、上から現代の盛土（0.3m）、褐色土・黒灰色土（ともに耕土0.2m）、黄灰色砂質土（床土：0.3m）、灰色粘砂（床土：0.2m）と続き、現地表下約1.2mで黄灰色粘質土（地山）若しくは灰色粗砂（旧流路）となる。遺構検出は黄灰色粘質土上面・灰色粗砂上面で行った。検出面の標高は西端が74.0mで南北方向はほぼ水平、東端は74.2mで西に向かって緩やかに下降している。

### III 検出遺構

奈良時代の溝2条と、掘立柱塀1条を検出した。SD01 発掘区北端で検出した東西方向の溝で、東で南に約9°傾く。発掘区外西側に続く。検出長6.1m、幅0.3～1.0m、検出面からの深さは0.2mである。埋土は灰色砂礫で奈良時代の須恵器・土器破片が出土した。



HJ第754次調査 発掘区平面図 (1/200)



HJ第754次調査 断面図(横:1/100 縦:1/50)

SD 02 発掘区北端部で検出した東西方向の溝で、両端は発掘区外に続く。SD 01と同様、東で南に約9°傾く。検出長15.5m、幅2.6~5.7m、検出面からの深さは0.9m。埋土は上から褐色粘砂、黒色粘土、淡灰色粗砂である。遺物は黒色粘土から土師器の甕の破片が、淡灰色粗砂から土師器の高杯・甕の破片が出土した。

SA 03 SD 02 上面で検出した柱間6間以上の東西方向の柱列である。東側の柱穴3基は長径1.3~1.6mと比較的大型のもので柱根が残存している。西側の2基は長径1.0~1.2mと一回り小さく柱根も残存しない。別の建物とも考えられるが、柱間が2.7m(9尺)等間であるため一体の遺構とした。柱根は直径0.3~0.4mの丸太材を8角形もしくは10角形に面取りしている。地形的にみて北側に柱列の存在を想定できず、試掘の範囲でも南側で柱列を確認していないため単独の柱列としたが、掘立柱建物と想定すると南北18m以上的大型建物になる。



試掘 2021-2 調査区全景 (北から)

#### IV 出土遺物

土器類が遺物整理箱1箱分出土した。ほとんどが奈良時代のもので、須恵器甕・杯蓋・杯・皿、土師器甕・高杯・皿・炊飯具の把手が出土している。

#### V 調査所見

今回の調査では、小治田寺(大后寺)に係る遺構・遺物は出土しなかったが、一条条間路の北側溝想定位置で東西方向の溝を確認した。ただし正方位に対し約9°傾くため条坊側溝とは考え難い。一方、同位置では東西方向の柱列を検出することができた。柱列以南には遺構がなく空地であるため、この範囲が一条条間路の路面であるとすれば検出した柱列は外京域の北端部を限る施設である可能性がある。(久保邦江)

註

- 1) 公立学校共済組合 奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条五坊北郊の調査』1970 この報告で 鈴木嘉吉「奈良高等学校下庭における掘立柱建物遺跡」『大和文化研究25』1954年を再録
- 2) 吉田真司「小治田寺・大后寺の基礎的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 2013



HJ第754次調査 発掘区全景 (西から)

## 5. 平城京跡（右京北辺三坊三坪）の調査 HJ第755次

事業名 保育園新築  
届出者名 株式会社 nexus  
調査地 西大寺本町 264-9

調査期間 令和3年9月6日～9月14日  
調査面積 102㎡  
調査担当者 中島和彦

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京北辺三坊三坪の中央南端部にあたり、一条北大路に北接する。調査地の西側隣接地では、平成18年度に奈良文化財研究所による発掘調査が行われ、一条北大路を検出し、二坪内では奈良・平安時代の掘立柱塼を2条確認したものの、顕著な遺構は未確認で宅地の様相は不明である。

発掘調査は、建物予定箇所に幅6m、長さ17mの南北方向の発掘区を設定し、古代の遺構の確認を目的に調査を実施した。

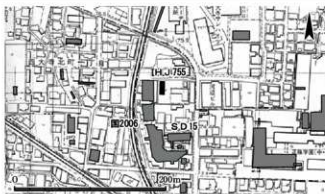
### II 基本層序

発掘区内の層序は、上から現代の盛土（アスファルトを含め約0.7m）、耕作土（約0.25m）、灰色砂質土（約0.05m）、奈良時代の遺物包含層の茶灰色砂質土（約0.1m）と続き、現地表下約1.1mで灰色砂または青灰色粘土の地山となる。地山面の標高は約74.3mで、遺構検出は地山上面で行った。

### III 検出遺構

掘立柱建物2棟と、建物としてまとまらない柱穴35基、素掘小溝6条を確認した。柱穴は奈良時代以降、素掘小溝の多くは中世以降のものと考えられる。

掘立柱建物S B 01は、南北3間（約9.6m）、東西1間以上の南廂付東西棟建物の西側妻柱列と考えられ、発掘区外東側に続く。身舎部分の柱間は約3.0m等間、廂の出約3.6mで、柱穴の掘方規模も一辺約1.0mあり大型の掘立柱建物と想定できる。身舎の柱はすべて抜き取られており、南端の柱抜き取り坑は瓦で埋まり、遺物



整理箱6箱分の瓦が出土した。

掘立柱建物S B 02は、南北1間、東西1間以上で発掘区外に続き全容は不明である。柱間は南北約2.4m、東西約2.4mである。

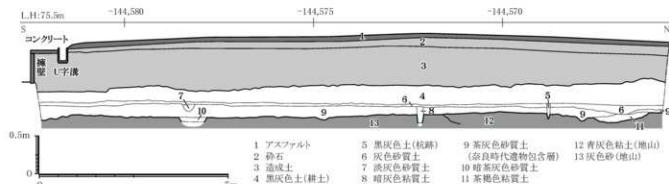
### IV 出土遺物

出土遺物は、土器類が遺物整理箱1箱分、瓦類が遺物整理箱8箱分ある。

土器類には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器等があり、奈良時代から平安時代前半にかけてのものである。瓦類には軒丸瓦（型式不明）1点、軒平瓦（瓦当欠損）1点、磚1点、丸瓦336点（40.540kg）、平瓦217点（30.256kg）がある。

### V 調査所見

調査の結果、掘立柱建物が2棟検出され、三坪内は奈良時代には宅地として利用されていることが明らかになった。北辺坊は設置の時期を含め土地利用が不明な点が多く、今後の調査の蓄積が望まれる。（中島和彦）



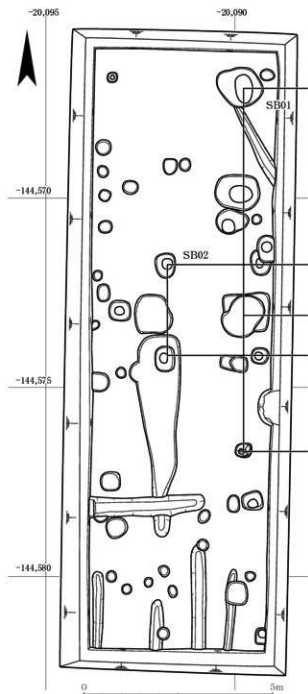
HJ第755次調査 西壁土層図 (横1/100・縦1/50)



HJ第755次調査 発掘区全景 (北から)



HJ第755次調査 発掘区全景 (南から)



HJ第755次調査 発掘区平面図 (1/100)

## 6. 平城京跡（右京六条三坊十六坪）の調査 HJ 第756次

事業名 宅地造成

届出者名 個人

調査地 六条一丁目801-1、803

調査期間 令和3年9月13日

調査面積 80㎡

調査担当者 中島和彦

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京六条三坊十六坪の南東隅にあたり、薬師寺西方の丘陵上にある。この丘陵上には条坊の遺存地帯が確認できず、発掘調査事例も少なく、奈良時代の様相については不明点が多い。

調査地は南北に延びる丘陵頂部の平坦地にあたり、東西側に向かって下降している。道路予定部分に幅4m、長さ20mの東西方向の発掘区を設定し、古代の遺構の確認を目的に調査を実施した。

調査地内は事前の準備工によって表土を除去しており、調査地内の表土直下には所々地山が確認できた。

### II 基本層序

発掘区内の層序は、厚さ約0.1mの表土直下で明黄褐色粘土または明灰色粘土の地山となる。地山面の標高は、発掘区西端で約78.9m、東端で約78.6mとなる。

### III 検出遺構

時期不明の土坑1基と小土坑数基を確認した。

土坑SK01は、径約1.2mの平面円形で、深さ約0.4mまで確認した。掘方は垂直に掘られており埋土は淡橙褐色土（灰白色粘土ブロック含む）で、出土遺物はない。時期・性格とも不明。

発掘区中央にある小土坑群はいずれも深さ約0.1mで、出土遺物はないが、耕作土で埋まることから近現代のものと考えられる。

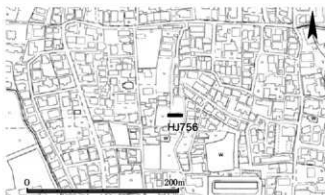
### IV 出土遺物

遺物は出土しなかった。

### V 調査所見

調査の結果、古代の遺構は確認できなかった。古代当初から土地利用がなかったのか、後世の削平により失われたのかは不明である。今後の周辺の調査に期待される。

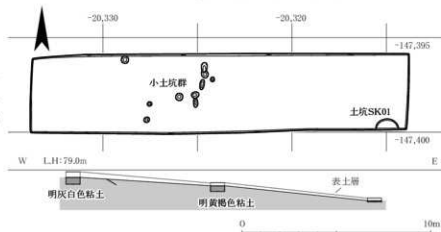
(中島和彦)



HJ 第756次調査 調査地位置図 (1/5,000)



HJ 第756次調査 発掘区全景 (南西から)



HJ 第756次調査 発掘区平面図 (1/200)・土層概念図 (1/50)

## 7. 平城京跡（左京四条五坊十一坪）の調査 HJ 第757次

事業名	共同住宅新築	調査期間	令和3年10月18日～11月11日
届出者名	個人	調査面積	156㎡
調査地	杉ヶ町40番1	調査担当者	秋山成人

### 1 はじめに

調査地は平城京左京四条五坊十一坪にあたり、坪の南半中央西よりに位置する。当該地は周辺で弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物が見つかった（杉ヶ町遺跡）。これまでの周辺調査にはHJ第144次・第360次・第388次・第423次・第721次調査がある。HJ第144次・第721次調査では弥生時代後期の方形竪穴建物を、HJ第360次・第388次・第423次調査では主軸が大きく振れる掘立柱列・建物、小柱穴、弥生時代後期から古墳時代前期の溝を検出している。また平城京の条坊遺構は確認されていない。その他に室町・江戸時代の土坑が見つかった。以上の調査成果を踏まえ弥生から古墳時代の遺構、平城京に関する遺構、さらに室町・江戸時代の遺構を確認し、宅地の性格を明らかにする目的で実施した。

### II 基本層序

発掘区内の基本層序は上から造成土、黒灰色土（耕作土）、灰色砂質土、褐色砂質土、淡褐色砂質土、以下黄灰色粘質土（地山）が堆積する。遺構面は淡褐色砂質土上面と黄灰色粘質土上面で、標高は淡褐色砂質土上面が67.0m、地山上面が66.7mである。

### III 検出遺構

黄灰色粘質土上面で弥生時代の溝SD01、奈良・平安時代の掘立柱列SA02・03、淡褐色砂質土上面で時期不明の土坑SK04～07、黒灰色土（耕作土）直下で江戸時代の粘土探掘坑SK08を検出した。また、旧河川が発掘区の北東から南西方向に流れており、弥生時代のSD01、奈良時代のSA03を壊している。

SD01 発掘区北東側で検出した、北西から南東に延びる溝である。規模は長さ3.5m以上、幅0.42m、深さ0.18m。断面U字形である。埋土は弥生時代後期土器小片を含む暗黄灰色砂質土。重複関係から旧河川より古い。

SA02・03 発掘区北東側で検出した、南北1間以上の掘立柱列である。SA02は柱間寸法が2.1m、SA03は柱間寸法が1.8mである。埋土に奈良・平安時代の土器器片を含む。重複関係からSA03はSK06より古い。



HJ 第757次調査 調査地位置図 (1/5,000)

SK04～07 発掘区北東側で検出した平面隅丸方形掘方の土坑である。規模は一辺1～1.4m、深さ0.14～0.65mで、埋土は灰色粘土である。

SK08 発掘区南側で検出した、発掘区外西と南に広がる平面不整形掘方の粘土探掘坑である。規模は東西9.5m以上、南北5.6m以上。埋土は暗灰色粘質土（黄灰色粘土含む）で、江戸時代の陶磁器碗・瓦質土器鉢が含まれていた。重複関係から旧河川より新しい。

旧河川 発掘区の中央で北東から南西方向に延びる河川で、2時期の河川が上下に重複する。下層河川は黄灰色粘質土上面で検出し、最大幅6.5m、深さ0.75mである。埋土は灰色の粘土と砂で、弥生時代後期の甕・壺・器台が含まれていた。上層河川は淡褐色砂質土上面で検出し、最大幅4.0m、深さ0.4～0.5mである。埋土は灰色の砂で、遺物は含まれていなかった。

### IV 出土遺物

遺物整理箱で9箱分あり、弥生時代後期の壺・甕・鉢・高杯・器台、8・9世紀の土器器碗、須恵器杯、丸瓦・平瓦、17・18世紀の陶磁器がある。

### V 調査所見

今回確認した弥生時代後期の溝は周辺で検出した遺構の時期と符合するもので、杉ヶ町周辺に広がる弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡の一部と考えられる。そして、奈良時代の柱列が見つかったことにより平城京関連の遺構が残っていることが明らかとなった。また、江戸時代の粘土探掘坑が広がることから、調査地周辺にも粘土探掘が及んでいたことがわかる。（秋山成人）

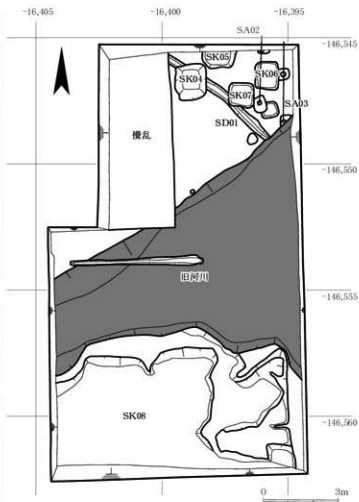




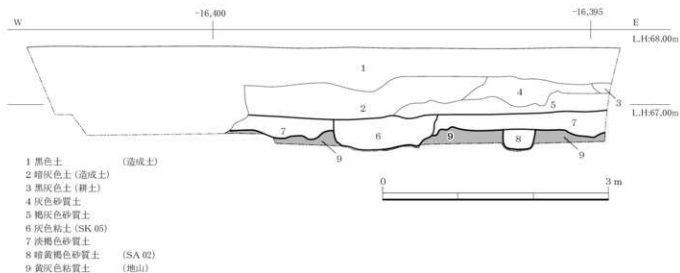
HJ第757次調査 発掘区南半全景（南西から）



HJ第757次調査 発掘区北半全景（東から）



HJ第757次調査 発掘区平面図（1/150）



HJ第757次調査 発掘区北壁土層図（1/50）

## 8. 平城京跡(左京六条三坊十五坪・六条条間北小路)の調査 HJ第758次

事業名	宅地造成	調査期間	令和3年11月8日～令和3年11月11日
届出者名	大和ハウス工業株式会社 奈良支店	調査面積	62㎡
調査地	大安寺三丁目85番2、85番5、86番	調査担当者	中島和彦

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京六条三坊十五坪の北辺にあたり、敷地北側には六条条間北小路が想定される。十五坪内では過去7回の発掘調査が行われている。奈良時代の掘立柱建物群(HJ第91次調査)、10世紀前半の井戸(HJ第62次調査)、11世紀末の土坑(HJ第74次調査)など特筆する調査成果があるが、いずれも小規模な調査のため坪内の様相は不明である。

発掘調査は十五坪北側の六条条間路北小路の確認を目的とし、開発道路部分に南北方向の発掘区を設定した。

なお、調査地内は事前の準備工により表土を除去しており、調査地内の表土直下には所々地山が確認できた。

### II 基本層序

発掘区内の層序は、厚さ約0.3mの表土直下で淡茶灰色粘土の地山となる。地山面の標高は、発掘区北端で約58.7m、南端で約58.6mである。

### III 検出遺構

奈良時代の井戸1基、江戸時代の土坑4基、時期不明の溝1条を確認した。

井戸SE01 東西約1.2m、南北約0.9mの平面楕円形掘方の素掘り井戸で、深さ約1.9mある。井戸底からは土師器甕、須恵器平瓶・壺が完形でまとも出土した。

土坑SK02 平面不整形の土坑で、東西2.3m以上、南北約2.2m、深さ約0.8mある。奈良時代の遺物とともに17世紀後半の肥前産磁器が出土した。

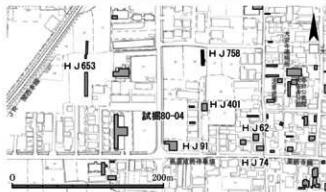
土坑SK03 平面不整形の土坑で、東西2.7m以上、南北約4.3m、深さ約0.3mある。重複関係から土坑SK02より新しい。

土坑SK04 平面長方形の土坑で、東西約0.7m以上、南北約1.8m、深さ約0.4mある。

土坑SK05 平面不整形の土坑で、東西約2.0m、南北1.8m以上、深さ約0.2mある。18世紀後半以降の国産陶磁器が出土した。

### IV 出土遺物

土器類・瓦類が遺物整理箱7箱分、斎串1点、サヌカイト石核1点出土した。多くは奈良時代の井戸出土のものである。

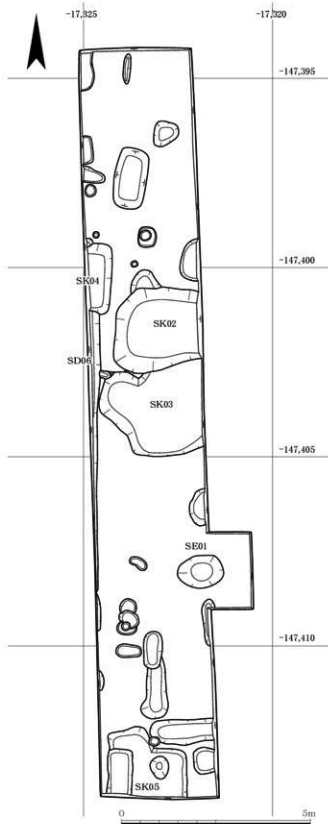


HJ第758次調査 調査地位置図 (1/5,000)

井戸SE01からは、土器類・瓦類が遺物整理箱5箱分と製塩土器4点、斎串が1点、桃核1点出土した。土器類には、土師器杯(1)・皿(2・3)・甕、須恵器杯(7～10)・杯蓋(4～6)・平瓶(12)・壺(11)・甕がある。土師器杯・皿は内面に放射状の暗文を施し、3はさらに見込みに螺旋状の暗文を施す。須恵器平瓶の中には、中央部分に紐が巻かれた木棒が残存していた。木棒は長さ約15.2cm、一辺約1.5cmの角棒状である。木枝を利用して、2面を割裂き、残りの2面は樹皮を残したままで、丁寧な加工等は施さない。紐の輪を木棒に回し、紐のもう一



HJ第758次調査 発掘区全景 (北東から)



HJ第758次調査 発掘区平面図 (1/100)



HJ第758次調査 発掘区全景 (南から)



HJ第758次調査 井戸SE01 (西から)



HJ第758次調査 井戸 SE01 出土平瓶



HJ第758次調査 平瓶内紐付き木棒出土状況

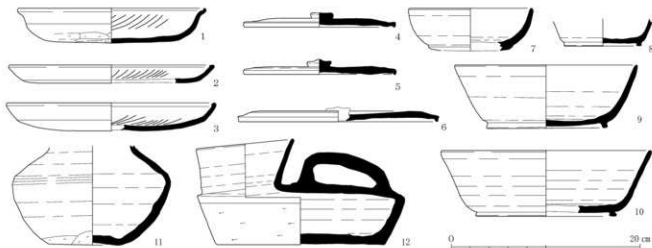


0 5cm

HJ第758次調査 井戸 SE01 出土紐付き木棒 (1/2)



HJ第758次調査 井戸 SE01 出土紐付き木棒細部



HJ第758次調査 井戸 SE01 出土土器 (1/4)

端を輪に通す「ひばり結び」で結ばれる。木棒の長さは平瓶の口縁を上まわり、この平瓶は釣瓶として利用されていたと考えられる。奈良時代の釣瓶の使用方法が判明する貴重な類例である。

#### V 調査所見

調査の結果、六条条間路北小路は確認できなかった。西約150m地点のHJ第653次調査では、北側溝がX-

-147,393.10の位置で確認され、条間北小路の幅が20大尺または20小尺とすれば発掘区内に南側溝が想定されるが、検出できなかった。また奈良時代の遺構も井戸1基の他は検出できず、中世以降に削平されて遺構面が残存していない可能性も考えられる。今後の周辺の調査に期待される。

(中島和彦)

## 9. 平城京跡（左京八条三坊十四坪・東三坊大路）の調査 HJ第759次

事業名	宅地造成	調査期間	令和3年12月1日～12月17日
届出者名	株式会社 ハウスプロジェクト	調査面積	176㎡
調査地	東九条町498番1、499番、502番	調査担当者	秋山成人

### I はじめに

調査地は平城京東市推定地の東側に隣接する左京八条三坊十四坪にあたり、坪の東辺中央北寄りに位置する。周辺の調査にはT I第3次・第5次、H J第613次・648次調査がある。T I第3次・第5調査では八条条間路北側溝・八条三坊十一坪と十四坪を画する東三坊坊間東小路と東西両側溝を検出している。H J第613次調査では奈良時代に4回の建替えが行われ、宅地内は東西に分割利用されていたと考えられている。H J第648次調査では奈良から鎌倉時代の遺構と弥生から古墳時代の遺構を確認している。今回の調査は条坊（東三坊大路）関連遺構と宅地利用、下層遺構の確認を目的として、東西2つの発掘区に分けて調査を行った。

### II 基本層序

発掘区内の基本層序は上から黒灰色土（耕土）、褐色土、旧河川堆積の褐色粗砂・灰色シルト・淡褐色粗砂、以下地山の黄灰色粘土である。遺構は東発掘区東端から約2/3の旧河川堆積層上面と、それより西の黄灰色粘土（地山）上面で検出した。遺構面の深さは東発掘区東端で現地表面から0.34 m（標高57.92 m）、西発掘区西端で現地表面から0.33 m（標高58.0 m）である。

### III 検出遺構

遺構には奈良時代の東三坊大路西側溝SD 01、井戸SE 02、溝SD 03・04、鎌倉・室町時代の溝SD 05、井戸SE 06、近現代の土坑又は井戸SX 07、時期不明の土坑SK 08・09がある。

SD 01 東発掘区東端で検出した南北に延びる溝である。幅2.8 m以上、長さ3.8 m以上、深さ0.43 m、断面皿状である。溝東肩は発掘区外のため溝心は求められなかったが、検出した溝西肩の座標はX: -148,648.3 Y: -17,245.5である。東三坊坊間東小路との位置関係から、SD01は東三坊大路西側溝に相当することがわかる。埋土は上から灰色土、暗灰色土が堆積し、灰色土から12・13世紀の瓦器片・土師器皿、暗灰色土から8・9世紀の土師器片が出土した。奈良時代の東三坊大路西側溝を踏襲し、中世に埋没した可能性がある。

SE 02 西発掘区西側で検出した平面隅丸長方形掘方の井戸である。内側に枠採取と考えられる痕跡が見



HJ第759次調査 調査地位位置図 (1/5,000)

られる。掘方は東西2.13 m、南北2.2 m以上、深さ1.08 m以上、埋土は掘方が黄灰色砂質土、採取が暗褐色土で8世紀の土師器高杯・壺、須恵器甕、製塩土器が出土した。なお、工事に影響を及ぼすために、掘削はGL-約1.3 m以上行わなかった。

SD 03・04 西発掘区の北辺東で検出した発掘区外北へ延びる溝である。長さ1.7 m以上、幅0.7～0.9 m、深さ0.13～0.20 mである。埋土は暗褐色土で、SD 03から奈良・平安時代の土師器甕が出土した。

SD 05 東発掘区南辺に沿って検出した東西に延びる溝である。長さ8.92 m以上、幅0.55 m、深さ0.25 mである。埋土は暗灰色粘質土で12・13世紀の瓦器椀、14・15世紀の土師器羽釜、瓦質土器が出土した。

SE 06 東発掘区中央で検出した平面不整形円形掘方の井戸である。内側には枠又は枠採取痕跡がみられる。掘方は東西1.87 m、南北1.95 m、深さ1.0 m以上である。埋土は掘方が暗灰色土で13世紀の土師器羽釜、枠又は枠採取痕跡は暗灰色土で14・15世紀の瓦質土器鉢・13世紀の土師器羽釜・瓦器皿が出土した。

SX 07 西発掘区東側で検出した平面不整形円形掘方の土坑又は井戸である。上段は東西3.13 m、南北2.8 m、深さ0.37 mで、黒灰色土（耕土）から掘られている。この下面北西隅において、東西1.4 m、南北1.5 mの下段掘方があり、深さ0.27 mまで確認した。埋土は暗灰色土で近現代の陶磁器が出土した。

SK 08・09 東発掘区の西側で検出した平面不整形掘方の土坑である。東西1.2～1.4 m、深さ0.13～

0.2 mで、発掘区外北にひろがる。埋土は暗灰色土で、遺物が出土せず時期不明である。

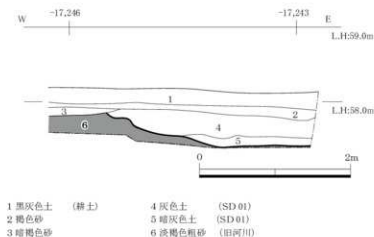
#### IV 出土遺物

遺物整理箱で3箱分があり、8・9世紀の土師器椀・壺・高杯、須恵器甕、製塩土器、軒平瓦、丸瓦、平瓦、9世紀の緑釉陶器、12・13世紀の土師器羽釜、瓦器皿・椀、14～16世紀の瓦質土器鉢、土師器羽釜、近現代の陶磁器がある。

#### V 調査所見

今回の調査で、周辺に鎌倉～室町時代の遺構が広がることが判明した。また、東三坊大路西側溝を検出したことにより平城京条坊復元のための新たな資料を得た。

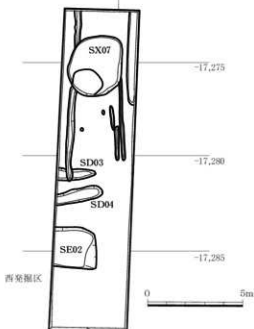
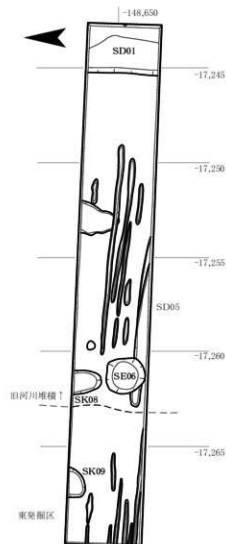
(秋山成人)



SD01 土層図 (1/50)



HJ 第759次調査 発掘区全景 (西から)



HJ 第759次調査 発掘区平面図 (1/200)

## 10. 平城京跡（左京四条五坊十三坪）の調査 H J 第 762 次

事業名	共同住宅新築	調査期間	令和4年2月28日～3月25日
届出者名	檜尾建設株式会社	調査面積	200.75㎡
調査地	杉ヶ町8番1	調査担当者	秋山成人

### I はじめに

調査地は平城京左京四条五坊十三坪の北端部に位置する。杉ヶ町周辺では平城京関連遺構が少なく、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が多く見つかっている。H J 第 144 次調査では弥生時代後期の方形竪穴建物・土坑、H J 第 360 次調査では古墳時代以前の掘立柱建物・土器埋納遺構・溝・杭跡、H J 第 388 次調査では弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱塼・溝、H J 第 423 次調査では弥生時代後期後半から古墳時代前期の溝・土坑・杭跡、H J 第 721 次調査では弥生時代末の方形竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑、古墳時代前期の溝、H J 第 757 次調査では弥生時代後期の溝、奈良時代の掘立柱列を検出している。

以上の成果に基づき、平城京関連遺構と杉ヶ町周辺に広がる弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を確認する目的で調査を行った。

### II 基本層序

発掘区内の基本層序は上から造成土、黒灰色土（耕作土）、褐灰色土、淡褐色土、暗黄褐色土（地山）である。遺構は地山上面で検出した。地山までの深さは GL-0.5～0.6 m で、その標高は概ね 68.0 m である。

### III 検出遺構

検出遺構には弥生時代後期の方形周溝墓状の遺構 1 基（S T 01）とその周溝 3 条（S D 02・03・04）、弥生時代後期末～古墳時代前期初めの溝 3 条（S D 05・06・07）、掘立柱列 5 条（S A 08・10・11・12・14）、掘立柱建物 3 棟（S B 09・13・15）、杭跡 S X 16 がある。S T 01（S D 02・S D 03・S D 04）S T 01 は周溝に囲まれ、その内側が南北 6.9 m、東西 6.9 m 以上の方形となる遺構である。周溝の内側は削平されたらしく、地山のみが見られ、盛土及び墓墳は確認出来なかった。周溝は北辺に S D 02・西辺に S D 03・南辺に S D 04 が廻り、東辺は発掘区外である。北西・南西・南東隅で途切れ、S D 03 の北側で 1.4 m、S D 04 の西側で 1.8 m、S D 04 東側で 2.3 m 以上間隔が空く。S D 02 は長さ 6.2 m 以上、幅 1.2 m、深さ 0.15 m。S D 03 は長さ 6.5 m、幅 0.65～0.95 m、深さ 0.12 m。S D 04 は長さ 1.75 m、幅 0.75 m、深さ 0.24 m。いずれの溝も



断面は逆台形である。埋土は上から暗褐色砂質土、黄褐色砂質土で、弥生時代後期後半の壺・甕・鉢・高杯が出土している。

S D 05 主軸が西で北に 20° 振れ、発掘区外西へ延びる溝。長さ 6.2 m 以上、幅 0.8～1.2 m、深さ 0.24 m。断面は逆台形である。埋土は上から暗褐色砂質土、暗灰色砂質土で、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の壺・高杯・ミニチュア土器が出土している。

S D 06・07 S D 05 から 2 条に分岐し 0.65 m の間隔をあけて並行する溝で、主軸が北で東へ 30° 振れる。両溝とも、長さ 4 m、幅 0.2～0.3 m、深さ 0.1～0.2 m。断面は逆台型である。埋土は暗灰色砂質土である。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の壺・甕・鉢が出土。

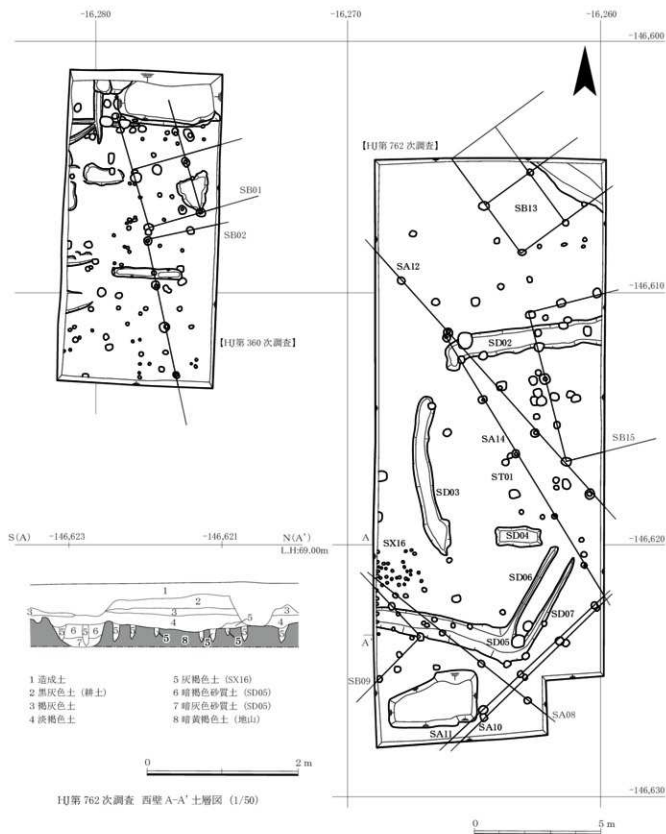
S A 08 主軸が西で北に 38° 振れる掘立柱列である。柱間は 3 間 (6.6 m) 以上、柱間寸法は 2.4・1.8・2.4 m である。

S B 09 北で東に 45° 振れる掘立柱建物と考えられるが主軸は不明である。北西側の柱列は 1 間 (1.8 m) 以上、南西側の柱列は 2 間 (2.4 m) 以上で柱間寸法は 1.2 m である。

S A 10 主軸が北で東に 45° 振れる掘立柱塼で、柱間は 3 間 (6.3 m) 以上、柱間寸法は 2.1 m 等間である。重複関係から S A 11 より古い。S B 09 と振れが共通する。

S A 11 主軸が東で北に 42° 振れる掘立柱列である。柱間は 3 間 (6.3 m) 以上、柱間寸法は 2.1 m 等間である。

S A 12 主軸が北で西に 42° 振れる掘立柱列である。柱間は 4 間 (11.1 m) 以上、柱間寸法は北から 2.7-



HJ第762次調査 西壁A-A'土層図 (1/50)

HJ第762次調査 遺構平面図 (1/150)



3.0-2.25-3.15 mである。重複関係から S A 14 より古い。  
S B 13 主軸が北で東に 45° 振れる掘立柱建物である。  
柱間は桁行梁間とも 1 間 (2.4 m) 以上となる。

S A 14 主軸が北で西に 30° 振れる掘立柱塼である。  
柱間は 4 間 (10.35 m) 以上、柱間寸法は北から 2.85-  
2.4-2.85-2.25 m である。

S B 15 主軸が北で西に 15° 振れる掘立柱建物である。  
柱間は桁行 4 間 (6 m)、梁間 2 間 (2.85 m) 以上、桁  
行柱間寸法は北から 1.35-1.35-1.8-1.5 m、梁行柱間寸  
法は西から 1.35-1.5 m である。桁行の北から 2 間目の  
柱穴に柱根が残り、放射性炭素年代測定の結果 A D 128  
- AD246 の値を得た。

S X 16 S A 08 の北西に接し、不規則に分布する杭  
跡の一群を検出した。径 0.06 ~ 0.09 m、深さ 0.15 ~  
0.25 m で、重複関係から S D 05 より新しい。同様の杭  
跡は H J 第 360 次・第 423 次でも検出されているが、  
今回の調査では隣接する河川跡も見られないことから、  
堰とも考えられず、詳細不明である。

#### IV 出土遺物

遺物整理箱で 4 箱分あり、土器類は弥生時代後期後半  
の弥生土器壺・甕・鉢・高杯・ミニチュア土器、古墳時  
代前期初頭の土器壺・甕・高杯がある。

#### V 調査所見

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代の遺構を検出  
した。西隣の H J 第 360 次調査では主軸が北で西に振  
れる建物 S B 01・02 を検出。S B 01 は主軸が北で西  
に 15° 振れ、S B 02 は主軸が北で西に 12° 振れる。S  
B 01 の振れ幅は今回の S B 15 と共通し同時期のもの  
と考えられる。

また、今回の発掘区では奈良時代の遺構については検  
出されず、これまで同様、希薄であることが追認された。

これまでの調査から、杉ヶ町に所在する弥生時代～古  
墳時代の遺構検出範囲は径約 230 m に広がる。奈良県  
遺跡地図には H J 第 144 次調査成果を基に「杉ヶ町遺  
跡」の範囲が記載されているが、1991 年度試掘調査成  
果からその南側にも別に「遺物散布地」が記載されてい



HJ第762次調査 発掘区全景（北東から）



HJ第762次調査 発掘区全景（南から）



HJ第762次調査 杭跡SX16（東から）

る。これまでの杉ヶ町周辺での調査成果をまとめ、地形  
などを考慮し、遺跡の範囲を検討していく必要がある。

(秋山成人)

HJ第762次調査SB15 放射性炭素年代測定結果 (δ<sup>13</sup>C 補正值)

測定番号	採取場所	2024 形態	処理方法	δ <sup>13</sup> C (‰) (δ13)	δ <sup>13</sup> C補正あり	
					Libby Age (yrBP)	gRC (yr)
IAAA-220057	遺構No.38柱根	木片	AAA	-23.74 ± 0.26	1,840 ± 20	79.54 ± 0.23

HJ第762次調査SB15 放射性炭素年代測定結果 (δ<sup>13</sup>C未補正值、暦年較正用<sup>14</sup>C年代、較正年代)

測定番号	δ <sup>13</sup> C未補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年較正範囲	2σ暦年較正範囲
	Age (yrBP)	gRC (yr)			
IAAA-220057	1,828 ± 20	79.75 ± 0.22	1,838 ± 22	1550calAD - 1850calAD (95.2%)	1280calAD - 2160calAD (95.4%)

## 11. 平城京跡（右京五条四坊二坪）の調査 HJ第765次

事業名 宅地造成  
 届出者名 株式会社 八州エイジェント  
 調査地 平松四丁目360番1他

調査期間 令和4年3月7日～3月15日  
 調査面積 120㎡  
 調査担当者 久保邦江

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京五条四坊二坪の中央西寄り部分にあたり、敷地西端部分で西三坊大路西側溝が想定される位置になる。

現状は水田で、西ノ京丘陵から派生する段丘の一角にある。南側の京西中学校建設に伴い、昭和51年に国立奈良文化財研究所によって第100次調査が実施されている。この調査では主に三坪を調査しているが、北端部のH・Kトレンチが二坪と三坪を画す五条条間南小路の想定位置に設定されている。東側のHトレンチでは五条条間南側溝とその両側溝を検出したが、西側のKトレンチでは遺構が削平されていた。また、同調査のIトレンチとJトレンチで西三坊大路とその両側溝を検出した。

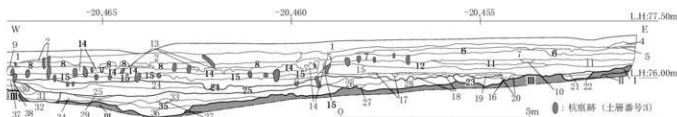
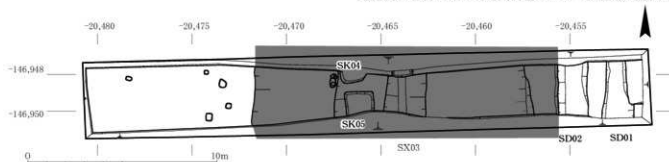
今回の調査地はこの北側延長上にあたることから、西三坊大路の西側溝を検出し、二坪の宅地内の様相を確認することを目的として調査を実施した。



HJ第765次調査 調査地位置図 (1/5,000)

### II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から黄灰色中～粗粒砂、黄灰色中粒砂・にぶい黄褐色細粒砂混土（以上耕作土）0.35 m、にぶい黄褐色中粒砂、褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂混土（床土）0.65 mで、東側では現地表面から約1.0 mで明黄褐色シルト～細粒砂の地山と



- |                                     |                     |                      |                      |
|-------------------------------------|---------------------|----------------------|----------------------|
| 1 黄灰色中～粗粒砂                          | 11 褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂 | 22 明褐色細～極細粒砂・明黄褐色粗粒砂 | 33 褐色シルト・灰色細～中粒砂     |
| 2 黄灰色中粒砂・にぶい黄褐色細粒砂<br>(上部に明黄褐色土が混入) | 12 褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂 | 23 黄灰色シルト～中粒砂        | 34 灰色細～中粒砂・褐色シルト     |
| 3 黄灰色中～粗粒砂 (粒復雑)                    | 13 灰色中粒砂            | 24 灰黄褐色中粒砂           | 35 黄灰色極細粒砂           |
| 4 黄灰色中粒砂・にぶい黄褐色細粒砂                  | 14 明黄褐色シルト・褐色シルト    | 25 褐色シルト             | 36 灰白色極細粒砂～細粒砂       |
| 5 黄灰色中粒砂・にぶい黄褐色細粒砂                  | 15 褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂 | 26 灰色シルト～中粒砂         | 37 明黄褐色シルト～中粒砂       |
| 6 にぶい黄褐色中粒砂                         | 16 灰色シルト～中粒砂        | 27 褐色シルト・明黄褐色シルト     | 38 黄褐色極細～中粒砂         |
| 7 褐色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂                   | 17 黄灰色極細～細粒砂        | 28 黄灰色極細粒砂・黄灰色細粒砂    | I 灰黄色粗粒砂             |
| 8 灰色中粒砂                             | 18 にぶい黄褐色中粒砂・褐色シルト  | 29 灰色中～粗粒砂 腐化物混      | II 明黄褐色粗粒砂           |
| 9 灰色中粒砂                             | 19 にぶい黄褐色中粒砂・褐色シルト  | 30 明黄褐色シルト～中粒砂       | III 明褐色黄褐色シルト～細粒砂    |
| 10 褐色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂                  | 20 灰黄褐色中粒砂          | 31 褐色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂   | IV 黄褐色粗粒砂 (I～IV: 地山) |
| 11～24・4・5: 耕土 3: 杭頭跡                | 21 明褐色細～極細粒砂        | 32 黄灰色シルト            |                      |

HJ第765次調査 遺構平面図 (1/200)・北壁土層図 (1/100)

なる。遺構検出は地山面で行った。遺構検出面の標高は、概ね76.3 mである。

### III 検出遺構

奈良時代の溝1条、土坑2基、浅い谷状の落ち込み、時期不明の溝1条、小柱穴7基を確認した。

**S D 01** 発掘区東端で検出した素掘溝である。幅1.1～1.7 m、深さ0.2 m、長さ3 m分を検出した。埋土は上下2層に分かれ、上下層の境目に炭化物が集中する。出土遺物はなかったが、検出位置から、西三坊大路西側溝であると考えられる。

**S D 02** S D 01の西に1 mの位置で検出した素掘溝である。幅1.65 m、深さ0.3 m、長さ3 m分を検出した。出土遺物はなかった。

**S X 03** 発掘区中央部で検出した南北方向の浅い谷状の落ち込みである。幅16 m、検出面からの深さは1.15 mである。0.1～0.2 m単位で埋め立てられているが、およそ半分埋めた段階でS K 04・05を掘削している。S K 04・05が埋没後、炭化物の混じる土で再び埋め立てられている。後半に埋めた層から、奈良時代後半の土器が出土している。東側はS D 02によって壊されていることからS D 02より古いことがわかる。

**S K 04・05** S X 03内で検出された土坑である。南北方向に並んで検出した。S K 04は不整形の土坑で、南半を検出した。直径1.3 m、検出面からの深さは0.5 m、埋土から埴輪片、奈良時代の土器・瓦が出土した。S K 05は隅丸方形の土坑で北半を検出した。東西1.5 m、南北1.2 m以上、検出面からの深さは0.6 m。埋土から奈良時代の土器が出土した。

他に発掘区西半で小柱穴を7基検出したが、建物としてはまとまらなかった。

### IV 出土遺物

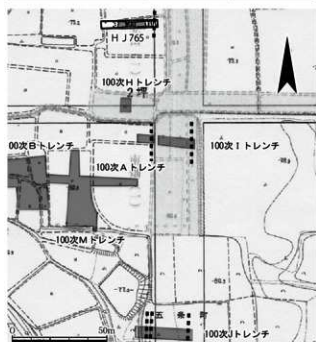
出土遺物は遺物整理箱3箱分ある。土器類には土師器、須恵器があり、奈良時代後半のものである。瓦類は平瓦・丸瓦片が若干出土している。そのほか、円筒埴輪・盾形埴輪、石硯等が出土している。

### V 調査所見

調査の結果、西三坊大路の西側溝を検出することができた。二坪・三坪間に関しては、西側溝が北で東に0°38'16"傾いていることがわかった。発掘区西半は後世の削平を受けており、宅地内の様相を明らかにすることができなかった。（久保邦江）

西三坊大路側溝座標値一覧表

地点名	X座標	Y座標
S D 01 (今回の調査)	-146,950,000	-20452,350
国100次調査Iトレンチ	-147,024,100	-20453,175
国101次調査Jトレンチ	-147,124,400	-20454,750



H J 第765次調査 周辺図の調査 (1:2,000)



H J 第765次調査 発掘区全景 (東から)



H J 第765次調査 発掘区全景 (南西から)

## 12. 赤田横穴墓群の調査 AD第6次

事業名 大和中央道街路整備社会資本交付金事業  
 届出者名 奈良市長  
 調査地 西大寺赤田町一丁目 556-35 他

調査期間 令和3年3月8日～令和3年8月31日  
 調査面積 757㎡  
 調査担当者 吉田朋史・鈴木桃子・三澤朋未

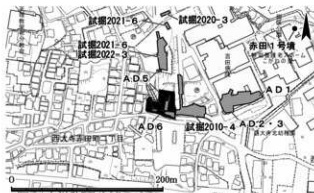
### I はじめに

調査地は、西ノ京丘陵北東部の東西に延びる丘陵上に位置し、この東側の南斜面では病院建設に伴って昭和58年・平成22・23年度に試掘・発掘調査（AD1～3次調査）が実施され、16基の横穴墓が東西に並ぶ赤田横穴墓群を確認した。うち9基を発掘調査し、横穴墓の詳細が明らかになっている。また、谷を挟んだ調査地北側の丘陵南斜面では、令和元年度の大和中央道街路事業に伴う調査で新たに秋篠阿弥陀谷横穴墓群が確認され、横穴墓4基を発見している。

今回の調査地は、赤田横穴墓群の西側隣接地にあたり、事前に横穴墓の有無を確認するための試掘調査を行った（AD第5次調査）。その結果、丘陵南斜面の中腹から南裾において4～5基の横穴墓があることが明らかになり、令和2～3年度に丘陵南斜面を対象に発掘調査を実施した（AD第6次調査）。

### II 基本層序

調査地は丘陵南斜面を雑壇上に造成された宅地である。発掘区の東側壁面の層序は、上段から中段で上から表土（厚さ0.1～0.3m）、造成土（0.1～0.5m）、



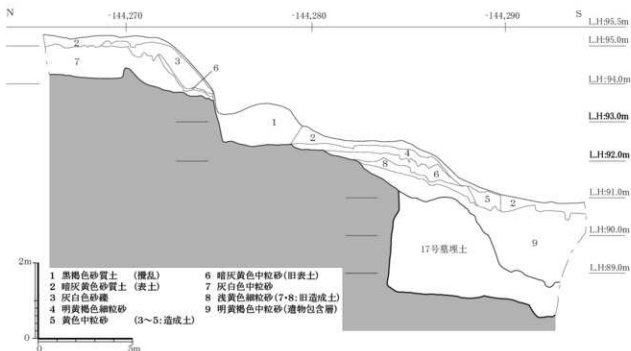
AD第6次調査 調査地位置図 (1/5,000)

旧表土（厚さ0.1～0.4m）、旧造成土（厚さ0.1～0.9m）と続き、茶褐色砂質土・淡黄色中粒砂の地山となる。一方、中段から下段部では、明黄褐色中粒砂の遺物包含層（厚さ0.1～2.0m）が堆積している。

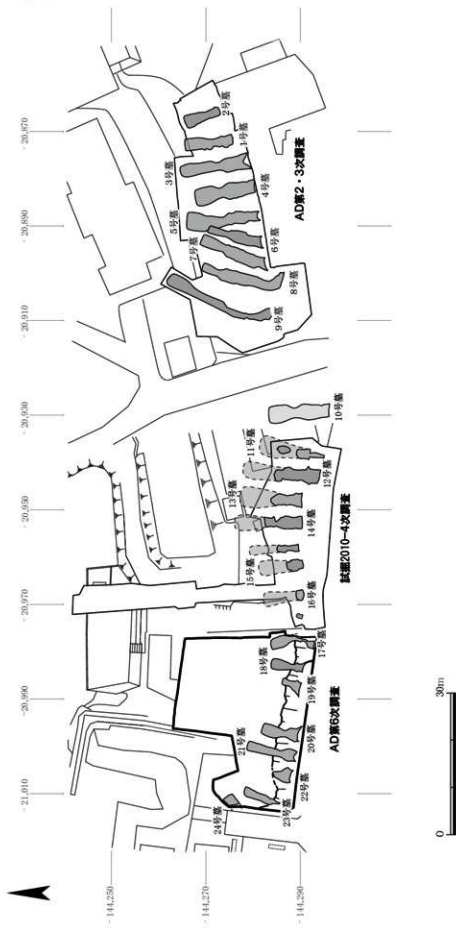
発掘調査地内の地山面の標高は上段部の最高所で約94.4m、19号墓の墓道部分で約87.7mと最も低い。

### III 検出遺構

丘陵南側裾部分で、古墳時代後期から飛鳥時代の横穴墓を8基検出した。これまで確認されている16基の通



AD第6次調査 発掘区東壁土層図 (縦1/100・横1/200)



AD第6次調査 赤田横穴墓群遺構分布図 (1/800)



-144,270

-144,280

-144,290

AD第6次調査 遺構平面図 (1/200)



AD第6次調査 発掘区全景（南から）



AD第6次調査 発掘区全景（北西から）



AD第6次調査 東壁（南西から）

し番号に続けて東から順に17～24号墓とした。

横穴墓はいずれも丘陵南斜面に築造され、南側に向かって開口する。横穴墓は、棺を納める玄室と丘陵斜面を溝状に切り通して築いた墓道、その間のやや幅の狭まった通路上の羨道から構成されている。17～21・23号墓については玄室・羨道・墓道を確認できたが、24号墓は大半が発掘区外西側に延びており玄室のみの確認となった。玄室内には土師質亀甲形陶棺・土師質円筒形陶棺と木棺などが置かれていたと推定でき、出土遺物から6世紀後半～7世紀中頃にかけてのものと考えられる。

以下にその概要を記述し、規模等は一覧表にまとめた。また、遺構平面図に付す遺物番号はTが鉄器、Dが土器でそれぞれの番号は遺物実測図の遺物番号と対応する。**17号墓** 全長9.3m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。中規模の玄室を有する横穴墓である。床面は初葬と

追葬の上下2面があり、羨道部では各面に閉塞土が確認できる。

#### 初葬時床面の棺と副葬品

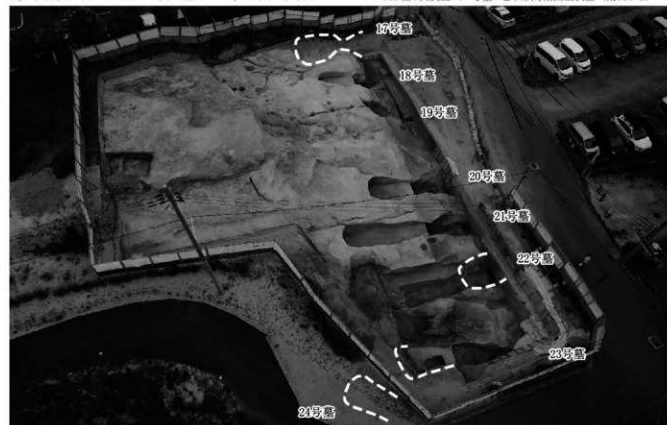
玄室の東側に土師質亀甲形陶棺が玄室主軸方向に沿って置かれ、棺蓋は棺身の上に崩れ落ちた状態で、ほぼ埋葬当時のまま残存していた。陶棺の全長は2.1m・幅0.8mで、棺の脚部は3行10列である。陶棺内から鉄刀子1点出土。

#### 追葬時の棺と副葬品

閉塞土の堆積状態から追葬が行われたと推察される。玄室西側に空閑地があり、奥壁側で土師器丸底壺1点、そこから南へ1.9mの位置で須恵器杯身2点が出土した。これらの土器が木棺の両小口に置かれていたと想定すれば、ここに南北方向の木棺が追葬された可能性が考

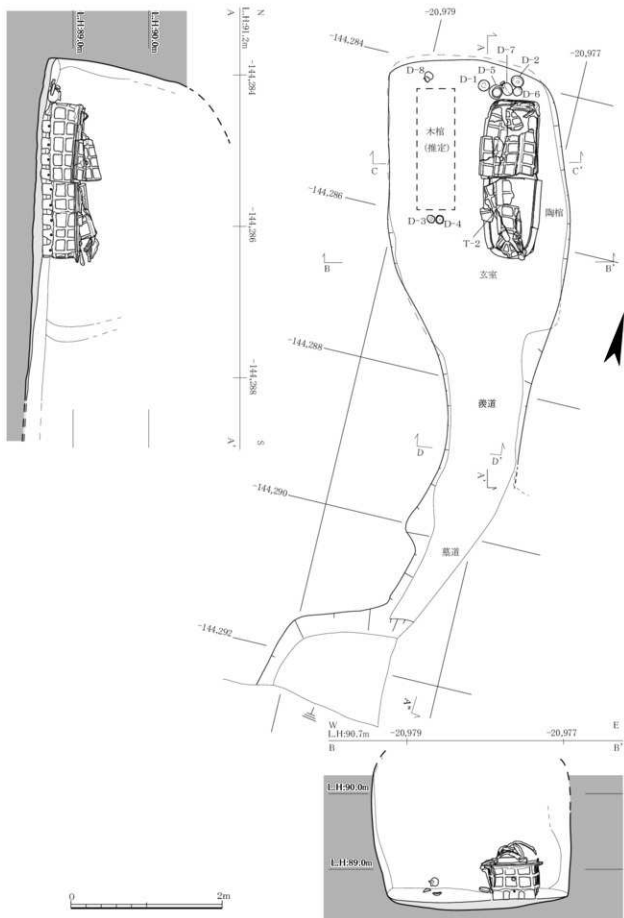


AD第6次調査 17号墓 亀甲形陶棺出土状態（南西から）

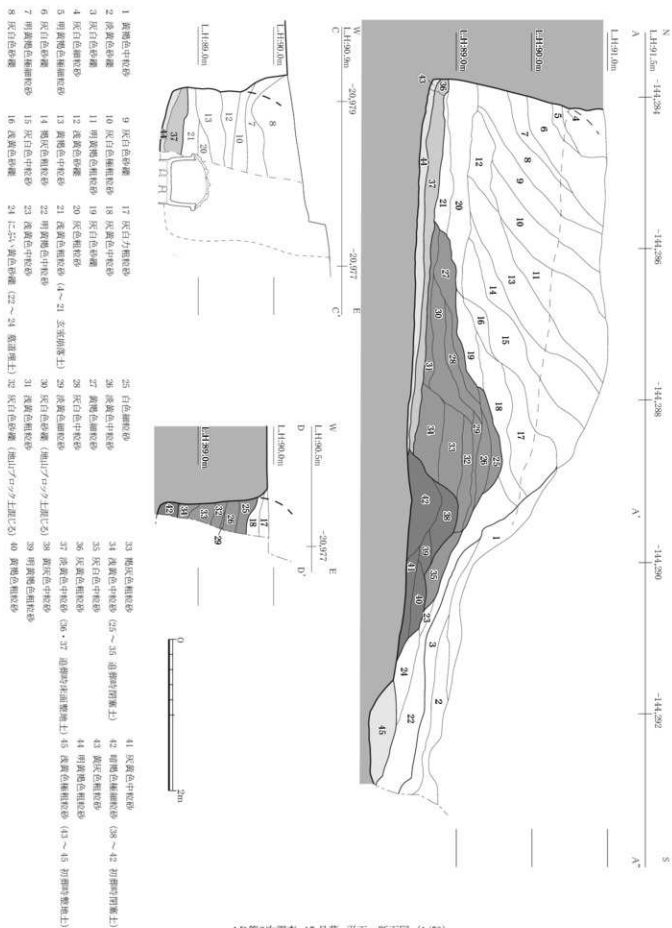


AD第6次調査 発掘区全景（北西から）





AD第6次調査 17号墓 平面・立面図 (1/50)



AD第6次調査 17号墓 平面・断面図 (1/50)



AD第6次調査 17号墓玄室 西側土器出土状態（南から）

えられるが、木質が腐朽して痕跡を留めていない。

**18号墓** 全長8.6 m以上で、墓道の大半が後世の削平を受けているが、その南端は発掘区外続く。中規模の玄室を有する横穴墓である。床面は初葬と追葬の上下2面があり、羨道部ではそれぞれの面で閉塞土が確認できる。

#### 初葬時の棺と副葬品

玄室の東半部に寄せて合口の土師質円筒形陶棺1基を東側、木棺（推定）1基を西側に玄室主軸と並行して配置する。

円筒形陶棺は棺蓋・棺身とも完存しており、横置きの状態で出土し、全長0.9 m・幅0.23 mである。

円筒形陶棺内の北側から鹿角柄刀子1点・南側から鉄鍔1点出土した。木棺（推定）は腐朽し残存していないが、拳大の円礎を四隅に配置した棺台の上に安置されていたと推察できる。

西側に近接する棺台付近から鉄鍔1点、玄室奥壁西側から鉄鍔1点出土した。

#### 追葬時の棺と副葬品

棺の明確な痕跡を確認できなかったが、閉塞土の堆積状態や初葬床面の上に0.2 mの整地層があり、副葬品が出土したことから追葬が行われたと推察される。

玄室西側に空地があり、ここに南北方向の木棺が追葬された可能性が考えられるが、木質が腐朽して痕跡を留めていない。玄室奥壁北側中央付近で須臾器短頸壺1



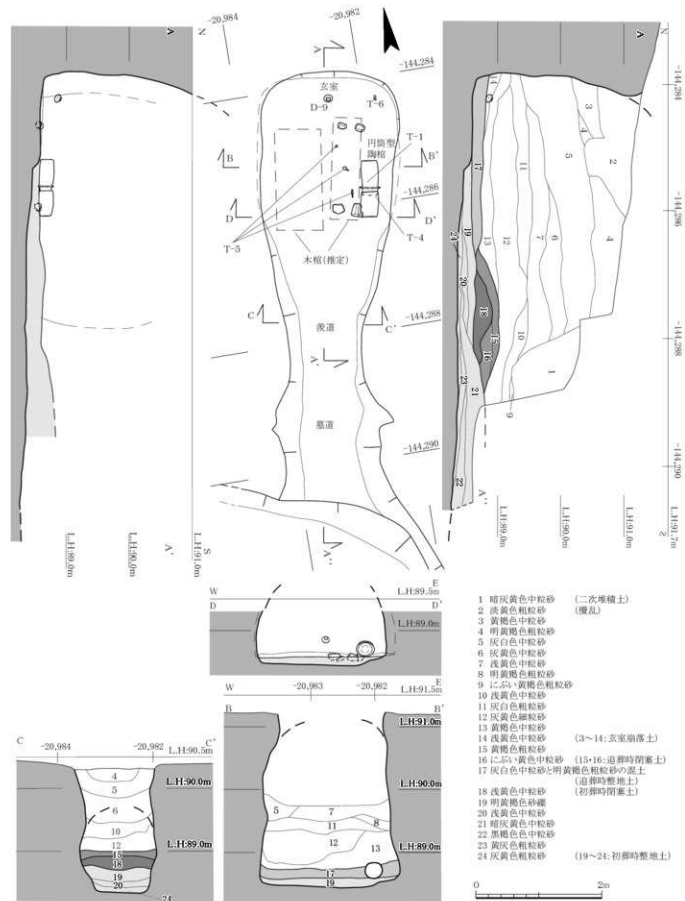
AD第6次調査 18号墓 遺物出土状態（南から）



AD第6次調査 18号墓 円筒形陶棺内遺物出土状態（南から）

点（D-9）が出土した。

**19号墓** 全長5.2 m以上で、羨道の一部及び墓道は後世の削平を受けている。今回確認した横穴墓の中で、玄



AD第6次調査 18号墓 平面・断面・立面図 (1/60)

室の規模が最も小さい。床面は1面で、羨道部では閉塞土が確認できる。玄室の規模が他の横穴墓と比べ小型であることから横穴墓の最終段階（7世紀中頃）に埋葬されたと考えられる。

玄室中央部の床面に木板が玄室主軸方向に沿って残存していた。板は腐食が進み原形をとどめないが、残存状況から長さ1.67m、幅0.6m程度に復元でき、木棺の底板と考えられる。底板の南端では主軸方向に直交する枕木を確認した。板はスギ材で、裏面に植物のクズの蔓が付着していたことから、棺をクズの蔓で縛っていた可能性がある。木棺に伴う副葬品は確認できなかった。

なお、玄門付近において頭部および両腕部が欠損した人物埴輪と朝顔形埴輪が玄室側に倒れた状態で閉塞土の下から出土した。出土した埴輪は、19号墓の築造時期より古く、6世紀前半から中頃のもので、近隣の古墳から運び込んで転用された可能性が高い。出土状態から埋葬時には樹立されていたが、閉塞土を積み上げた際に玄室側へ倒れたと推察される。

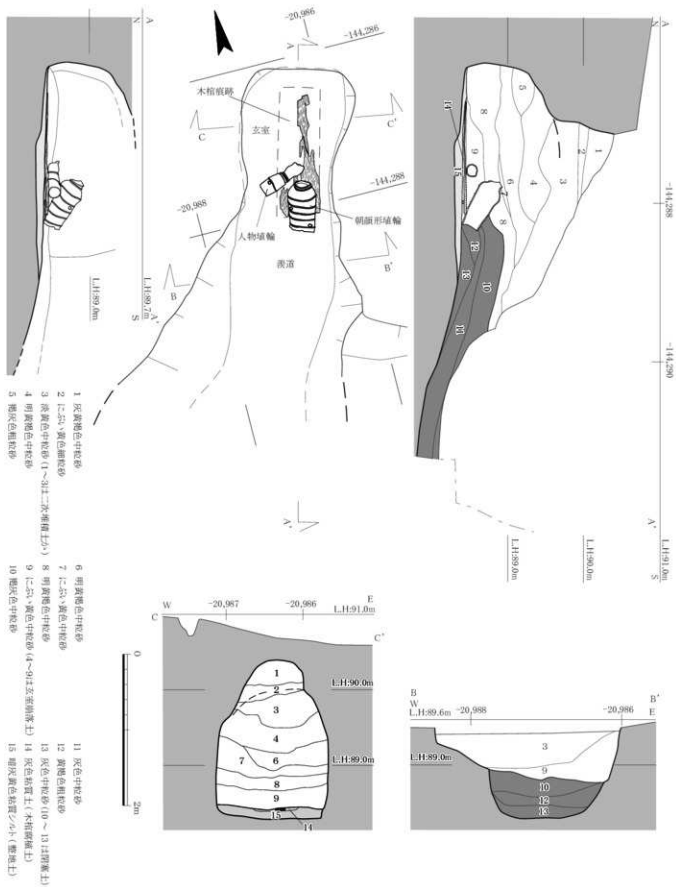
**20号墓** 全長7.7m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。比較的大型の玄室を有する横穴墓で、羨道が短く、



AD第6次調査 19号墓 埴輪出土状態（南西から）



AD第6次調査 19号墓 出土埴輪の樹立状態（復元）（南西から）



AD第6次調査 19号墓 平面・断面・立面図 (1/50)

玄室の全長は奥壁幅の2倍以上である。床面は1面で、羨道部では閉塞土が確認でき、玄門付近の高さは横断面より1.2 mと推定できる。

棺の明確な痕跡を確認できなかったが、閉塞土の存在から埋葬が行われたと推察される。木棺が腐朽して痕跡を留めておらず、埋葬位置は確定できない。

玄室北西側の奥壁付近で須恵器台付長頸壺1点・短頸壺1点、土師器椀1点が出土した。

なお、墓道の整地土下から南北方向の溝を確認した。溝の中からマツ材の枝木が出土しており、この部分で湧



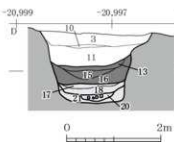
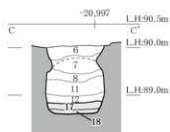
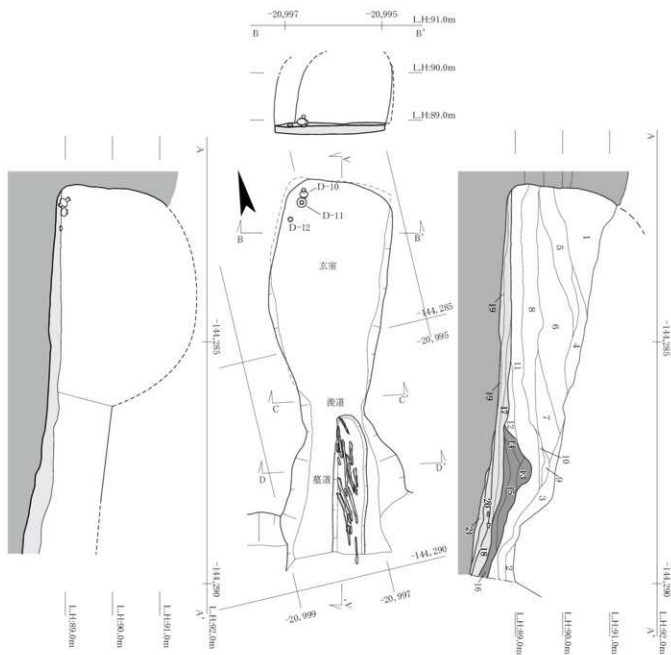
AD第6次調査 20号墓 羨道部閉塞土 (南西から)



AD第6次調査 20号墓 玄室北西側 遺物出土状態 (南から)



AD第6次調査 20号墓 全景 (南西から)



- |             |                |
|-------------|----------------|
| 1 明黄色砂質土    | 15 にぶい黄色粗砂     |
| 2 灰黄色粘質シルト  | 16 黒褐色中粒砂      |
| 3 灰黄色粘質土    | (13~16; 閉塞土)   |
| 4 淡黄色中粒砂    | 17 暗灰黄色中粒砂     |
| 5 淡黄色中粒砂    | 18 黒色中粒砂       |
| 6 灰白色粗砂     | 19 にぶい黄色中粒砂    |
| 7 黄褐色中粒砂    | 20 黒褐色中粒砂      |
| 8 灰白色中粒砂    | 21 灰白色中粒砂      |
| 9 明黄色砂質土    | (17~21; 床面整地土) |
| 10 黄褐色砂質土   |                |
| 11 にぶい黄色中粒砂 |                |
| 12 灰黄色中粒砂   |                |
| 13 淡黄色中粒砂   |                |
| 14 黄灰色中粒砂   |                |

AD第6次調査 20号墓 平面・断面・立面図 (1/80)



水が認められるため構築時の排水溝である可能性が考えられる。

**21号墓** 全長10.1m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。大型の玄室を有する横穴墓で、羨道が短く、玄室の全長は奥壁幅の2倍以上である。床面は1面で、羨道部では閉塞土が確認できる。玄室中央部分は、後世に攪乱されている。

玄室の西側から主軸方向に沿って土師質亀甲形陶棺の



AD第6次調査 21号墓 最上層 陶棺出土状態 (南西から)

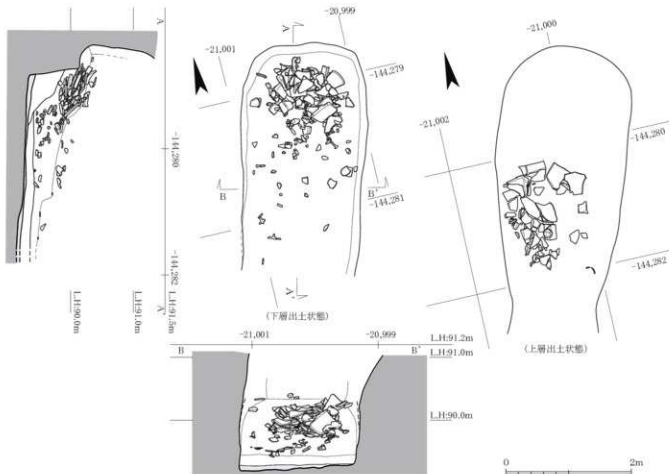
脚部痕跡、玄室床面東側から木棺を置いた棺台と考えられる横長の円礫を2か所で確認した。陶棺は壊され奥壁側に寄せられていたが、3行8列の脚部の痕跡から3陶棺が置かれていた位置が明らかになった。

さらに、玄室の奥壁北東側で土師器長胴甕を用いた蔵骨器1基が東側に倒れた状態で出土した。

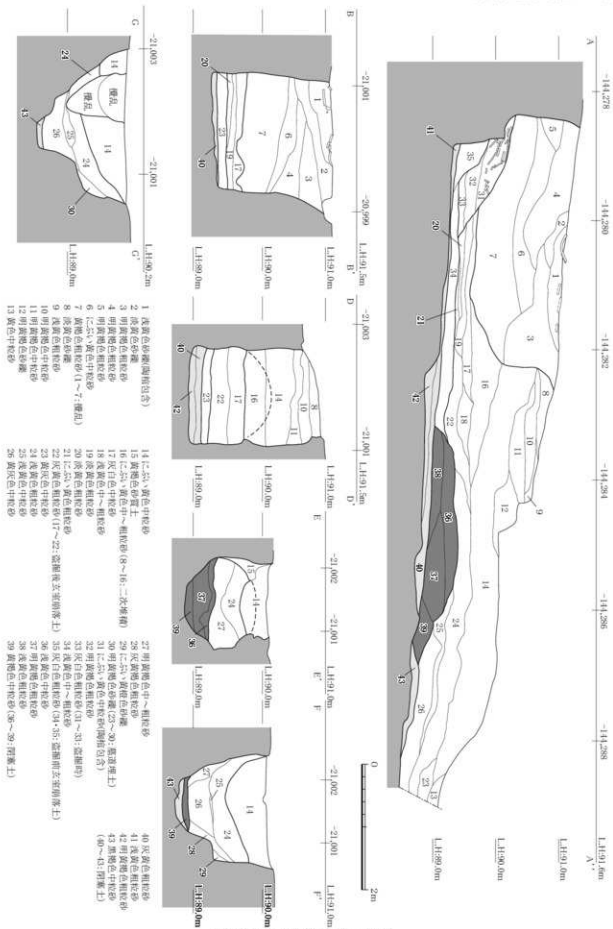
木棺・蔵骨器の存在から追葬が少なくとも1回以上行われていると推察される。また、奥壁に寄せられていた



AD第6次調査 21号墓 玄室 陶棺出土状態 (南西から)

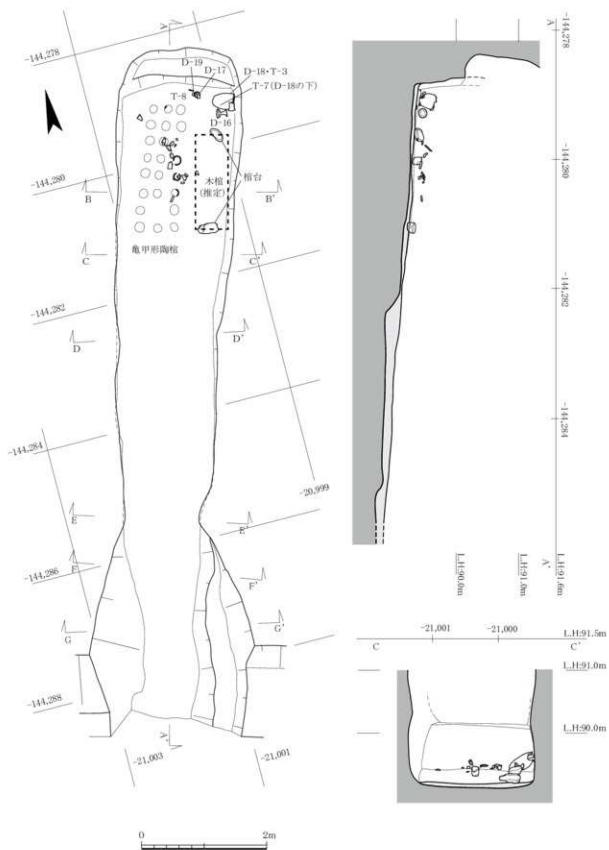


AD第6次調査 21号墓 陶棺出土状態 平面・断面・立面図 (1/60)



AD第6次調査 21号墓 断面図 (1/60)

- 1 灰黄色砂礫(埋石含む)
- 2 灰黄色砂礫
- 3 明黄褐色粗粒砂
- 4 明黄褐色粗粒砂
- 5 明黄褐色粗粒砂
- 6 1:2.5:1 黄色中粒砂
- 7 黄褐色粗粒砂(1~; 埋石)
- 8 灰黄色粗粒砂
- 9 灰黄色粗粒砂
- 10 明黄褐色中粒砂
- 11 明黄褐色中粒砂
- 12 明黄褐色中粒砂
- 13 黄色中粒砂
- 14 1:2.5:1 黄色中粒砂
- 15 黄褐色粘土
- 16 1:2.5:1 黄褐色中~粗粒砂(8~; 二次堆積)
- 17 灰白色中粒砂
- 18 黄褐色中~粗粒砂
- 19 灰黄色粗粒砂
- 20 灰黄色粗粒砂
- 21 灰黄色粗粒砂
- 22 灰黄色粗粒砂(11~; 22: 笠棚土)
- 23 灰黄色粗粒砂
- 24 灰黄色粗粒砂
- 25 灰黄色粗粒砂
- 26 灰黄色粗粒砂
- 27 明黄褐色中~粗粒砂
- 28 灰黄色粗粒砂
- 29 1:2.5:1 黄褐色粗粒砂
- 30 明黄褐色粗粒砂(25~; 笠棚土)
- 31 1:2.5:1 黄色中粒砂(埋石含む)
- 32 明黄褐色粗粒砂
- 33 灰白色粗粒砂(31~; 笠棚土)
- 34 灰黄色粗粒砂(34~; 35: 笠棚土)
- 35 灰黄色粗粒砂
- 36 灰黄色粗粒砂
- 37 明黄褐色粗粒砂
- 38 灰黄色粗粒砂
- 39 黄褐色中粒砂(38~; 笠棚土)



AD第6次調査 21号墓 平面・立面図 (1/60)



AD第6次調査 21号墓 全景（南西から）



AD第6次調査 21号墓 玄室 棺配置状態（南西から）



AD第6次調査 21号墓 玄室奥壁 長剣袋・副葬品出土状態（西から）

亀甲形陶棺については、羨道部が崩落して盗掘坑を確認できなかったが、奥壁の崩落土上に寄せられていることから、盗掘を受け破壊された可能性が高い。奥壁側に寄せられている陶棺は、攪乱土最上層（1層）から出土した陶棺と接合すること明らかになった。

奥壁側に寄せられた亀甲形陶棺の下から須恵器高坏1



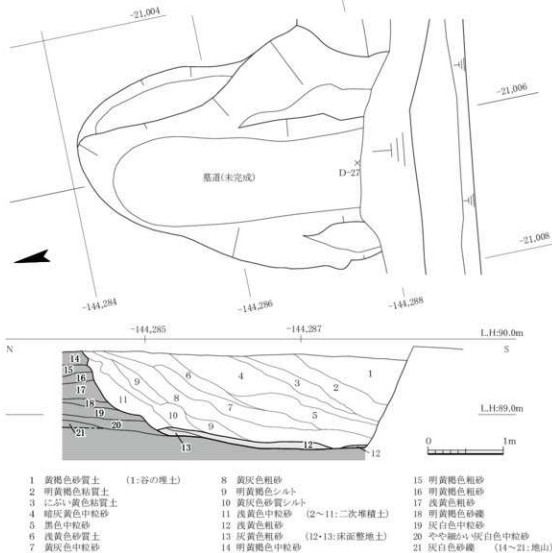
AD第6次調査 22号墓 墓道床面 遺物出土状態 (西から)

点、鉄鍬2点、土師器小型丸底壺1点、土製紡錘車1点が出土した。また、蔵骨器と推定する土師器長胴甕の中に鹿角柄刀子1点が納入されていた。

**22号墓** 全長3.7m以上で墓道南端は発掘区外に続く。玄室が築造されていないため、墓道のみを掘削して床面を整地した後、造墓途中で放棄したと考えられる。墓道



AD第6次調査 22号墓 墓道 土層断面 (南西から)



AD第6次調査 22号墓 平面・立面図 (1/60)

床面からは8世紀の土師器壺Bが1点、墓道埋土中層(5層)から須恵器甕口縁部片が1点出土した出土した。埋葬はされていないものの8世紀以降に墓前祭祀が行われていた可能性がある。

**23号墓** 全長8.0m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。比較的大型の玄室を有する横穴墓で、羨道が短く玄室の全長は奥壁幅の2倍以上である。床面は1面で、羨道部では閉塞土を確認できる。



AD第6次調査 23号墓 玄室西側 遺物出土状態 (南西から)

棺の明確な痕跡を確認できなかったが、閉塞土の存在から埋葬が行われたと推察される。木棺が腐朽して痕跡を留めていない可能性が高く、埋葬位置は確定できない。

玄室奥壁西側付近で須恵器台付長頸壺1点、玄室東側で須恵器提瓶1点・直口壺1点、玄室中央で須恵器杯蓋1点、玄門付近で須恵器杯蓋1点が出土した。

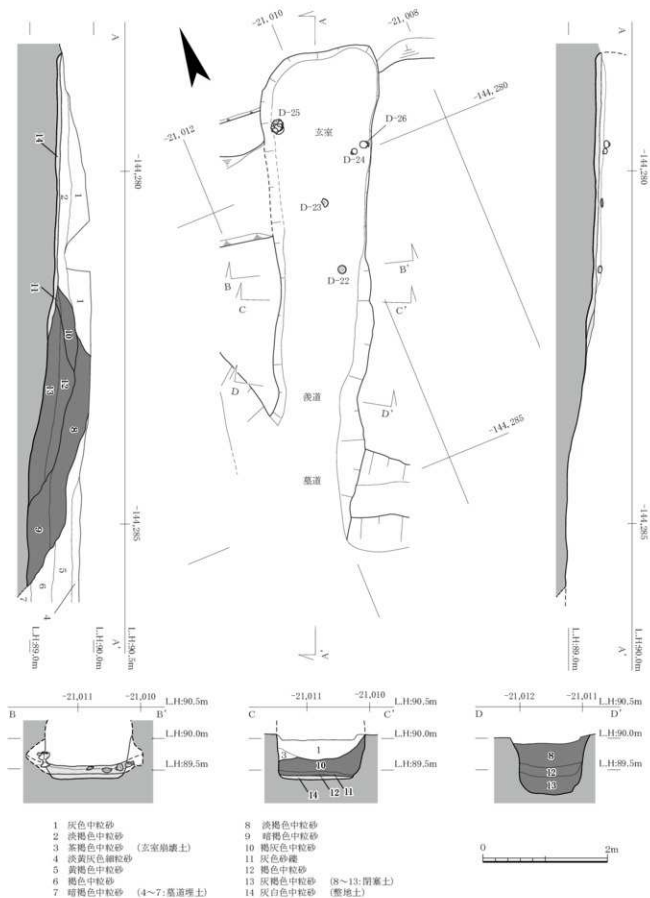
**24号墓** 発掘区北西端で確認した他と主軸方向の異なる横穴墓である。全長2.4m以上で、玄室の一部と羨道・



AD第6次調査 23号墓 玄室東側 遺物出土状態 (西から)



AD第6次調査 23号墓 全景 (南西から)



AD第6次調査 23号墓 平面・断面・立面図 (1/60)

墓道は発掘区外に続く。玄室の一部のみの確認にとどまるが、床面は2面である。

#### 初葬時の棺と副葬品

棺は確認できなかったが、玄室南側で棺台の可能性のある石を確認しており、木棺が置かれていたと推察される。なお、奥壁及び玄門側で陶棺突帯片が少量出土しており、陶棺が持ち出されている可能性もある。

玄室奥壁付近で土師器甕1点・椀1点、須恵器杯身4点・杯蓋2点・台付長頸壺1点・壺蓋1点・壺3点、鉄鍔8点がまとめて出土した。また、玄室北側では須恵器台付長頸壺1点(D-40)、玄室南側で須恵器杯身1点(D-44)が出土した。

#### 追葬時の棺と副葬品

棺の明確な痕跡は確認できなかったが、初葬面より0.2 m上層で須恵器短頸壺1点(D-35)が出土しており、追葬が行われた可能性がある。

#### IV 出土遺物

古墳時代後期の朝顔形埴輪1点・人物埴輪1点、古墳時代後期から飛鳥時代の土師質亀甲形陶棺2基・土師質



AD第6次調査 24号墓 遺物出土状態(南から)

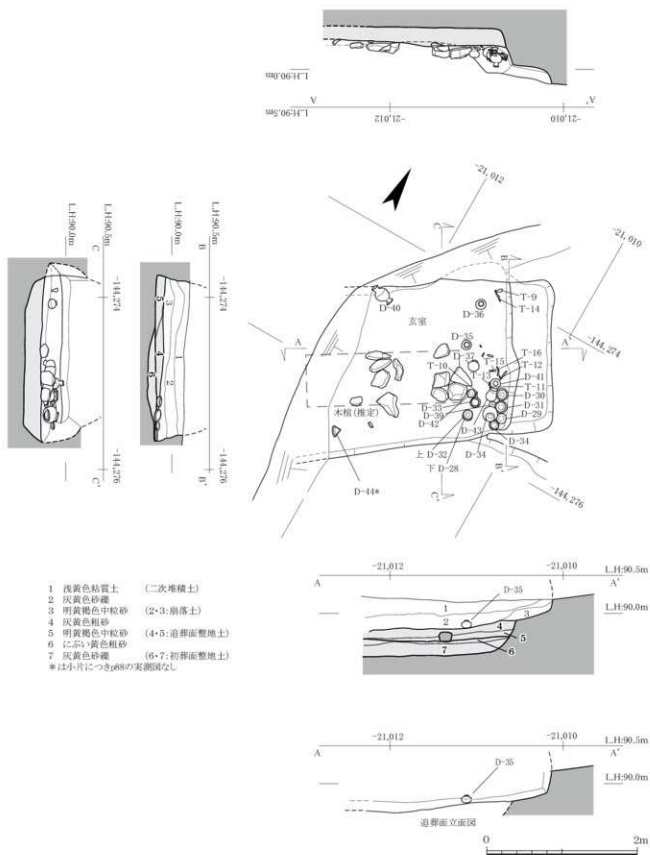


AD第6次調査 24号墓 玄室奥壁 遺物出土状態(北東から)



AD第6次調査 24号墓 玄室 初葬時 遺物出土状態(南から)





AD第6次調査 24号墓 遺構平面・断面・立面図 (1/50)

円筒形陶棺1基・木棺底板1枚・須恵器・土師器・鉄鏃・鉄刀子・鹿角柄刀子などが、遺物整理箱79箱分出土した。

以下主要な遺物について記す。(吉田朋史)

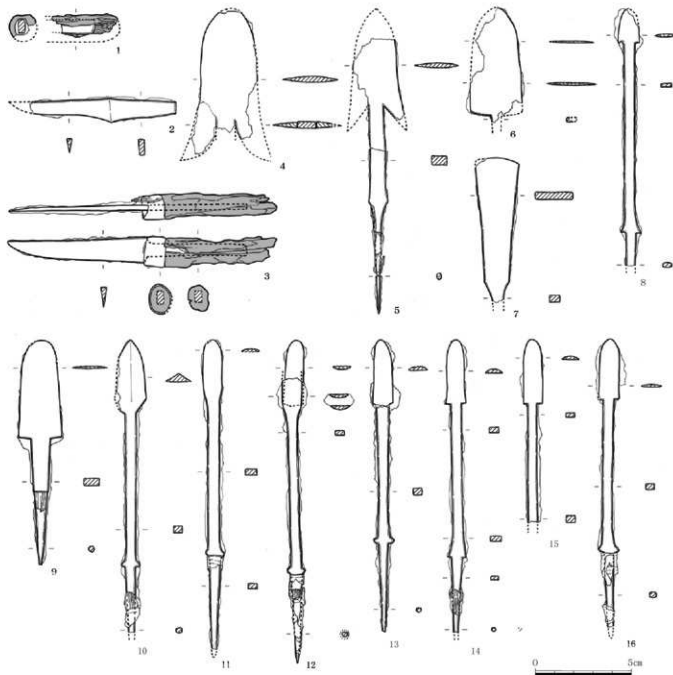
### (1) 鉄製品

鉄刀子3点と鉄鏃13点が出土している。

鉄刀子(1~3) 1は18号墓円筒形陶棺内から出土した鹿角柄刀子で、刀子の茎部と鹿角柄の一部が残のみである。残存長は3.5cm。2は17号墓陶棺内から出土した木柄刀子で、刃先を欠失する。刃部最大幅1.25cm・茎部長3.45cm。両側につくるものの屈曲が弱く、茎部

の一部に木質が付着する。残存長は7.7cm。3は21号墓土師器長胴甕内から出土したほぼ完形の鹿角柄刀子である。鉄刀子本体は全長12.65cm・刃部長7.4cm・刃部最大幅1.35cmで、両側につくる。鹿角柄は全長6.85cm・最大幅1.55cmで、いくつかの亀裂が開いている。茎口に鉄製鏃が遺存する。

鉄鏃(4~16) 4は18号墓円筒形陶棺内から出土した腸状長三角形鏃で、直接接合しない2片を復元実測して図示した。他例と比べて大きく、頸部以下を欠失する。復元残存長7.5cm・鏃身部最大幅3.0cm。5・6は18



AD第6次調査 出土鉄製品(1/2)

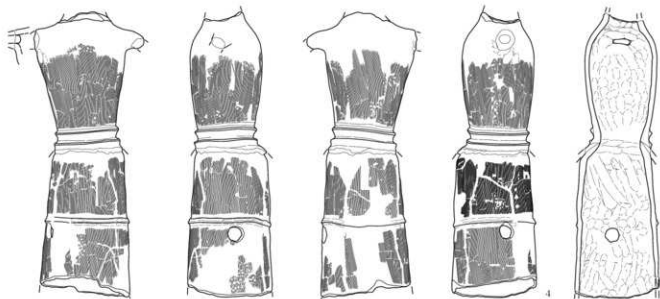
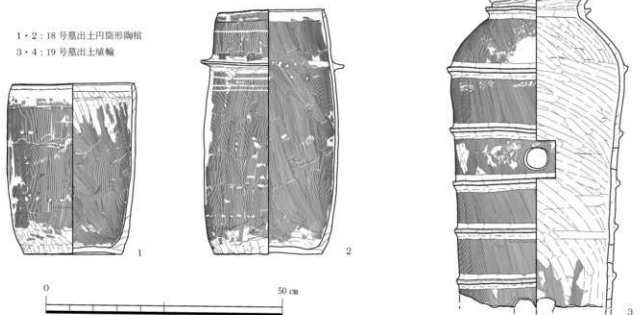
号墓玄室から出土した。5は腸扶長三角形鐵で、頸部で割れた直接接合しない2片を復元実測して図示した。復元残存長14.5cm・復元頸部長5.15cm。6は角間長三角形鐵で、頸部以下を欠失する。鐵身部が薄くて頸部が細いのが特徴的で、残存長6.1cm。

7・8は21号墓玄室から出土した。7は方頭形鐵で茎部を欠失する。残存長7.6cm。8は長頸鐵で、鐵身部と茎部の一部を欠失する。残存長13.5cm・頸部長10.0cmで、茎部との境を台形間につくる。

9～16は24号墓玄室内から出土した。9は角間長

三角形鐵で、全長11.85cm・鐵身部長5.2cm・鐵身部最大幅2.3cm・頸部長2.8cmで、茎部との境を角間につくる。10～16は長頸鐵である。10は鐵身部が柳葉形片鑄造で、残存長15.4cm・鐵身部長3.4cm・頸部長8.0cm。茎部との境を轉間につくる。11～16は鐵身部が柳葉形で共通するが、断面は11～15が片丸造で16のみ平造、間の形状は11・12がなで間で13～16が角間と差異がある。12の鐵身部上半は欠失し、そこに13の鐵身部が鑄着するため、13は鐵身部と頸部以下が直接接合せず復元図化である。頸部の間形状は、11～13・

1・2：18号墓出土内筒形陶棺  
3・4：19号墓出土埴輪



AD第6次調査 出土円筒形陶棺・埴輪 (1/8)

16が棘関、14が台形関となる。すべて一部を欠失しており全長が判明する例はないが、長頸鏃の全長は概ね15.5～16.5cmに取まると考えられる。

## (2) 埴輪

19号墓の墓室入口の左右に立てられていた朝顔形埴輪(3)と人物埴輪(4)である。3は残存高67cm・最大径39cmで、底部と口縁部を欠失する。6条突帯以上の朝顔形埴輪とみられ、外面タテハケ調整で、2孔1対の円形透孔が認められる。4は残存高60cmで、底部と頭部・腕部を欠失する。円筒形の基部を製作して倒立し、上衣の裾を表現するための粘土をその外周に貼り付けてから、その上に胴部をつくる。腰の位置に突帯を2条貼り付けて帯を表現している。肩に開けた孔に棒状粘土を挿入して腕部を製作した痕跡が観察できる。外面全体がタテハケ調整で、基部に2孔1対の円形透孔が認められる。両者ともに底部と口縁部あるいは頭部を欠失するという特徴が一致するため、近在の古墳に樹立されていた埴輪を抜き取って2次利用されたものと推定される。

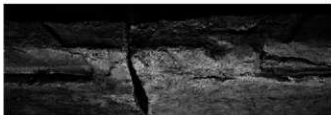
## (3) 円筒形陶棺

18号墓の墓室東側に蓋と身の口を合わせて横たえ、合口式の陶棺として使用されていた。蓋の内径が身の口径より少し小さく、蓋が少し楕円形に歪んでいることもあって、蓋口縁端部は蓋受けまで達しない。蓋身ともに製作方法は同じであり、器高の高低と蓋受けの有無が異なるに過ぎない。

蓋(1)は口径24.5～27.5cm・高さ36.3cmで、逆位で使用するために製作時の平底が平天井となる。製作工程が身と同様であるため、図は製作時の天地で示した。

身(2)は底径22.3～23.0cm・口径21.5～22.0cm・高さ51.0～52.0cmで、口縁端部から下へ約11cmの位置に蓋受けを貼り付ける。蓋受けの幅は2～3cmで、穿孔は認められない。厚さ0.8cmの粘土円板をつくって平底の底部とし、その外周に粘土紐を積み上げて内外面をタテハケ調整するが、底部外面には粘土積み上げ時のタテナデが残る。

## (4) 土師質亀甲形陶棺



17号墓出土陶棺 蓋口縁部長側面中央の台形状板と細木圧痕

17号墓出土陶棺(5)と21号墓出土陶棺(6)がある。前者はほぼ方形に復元できたが、後者は盗掘時に砕かれ細片化して出土したため、欠損部分が多い。

## 17号墓出土陶棺

蓋 全長208.4cm・最大幅70.6cm・高さ49.4cmで、横断面の形状は概ね屋根形を呈する。糸切りで2分割されている。片側の長側面中央上寄りに穿孔しここから糸を通して切断するが、口縁部付近はへら切りする。天井部は鍵形を意図して切断するが、へら切りに比べて屈曲が弱く緩やかな形状となる。外面全体に朱塗りが認められる。

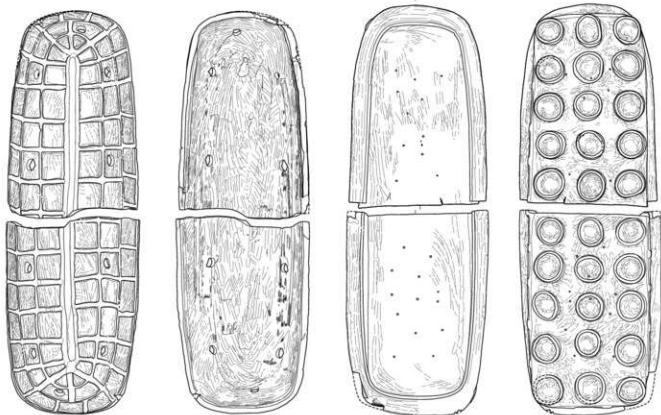
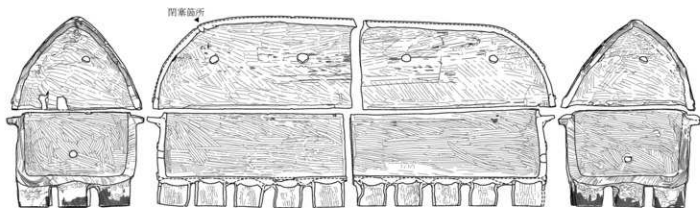
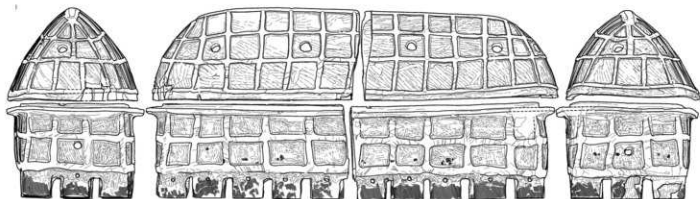
突帯の全体的な構成をみると、稜線突帯・横位突帯2条・口縁部突帯を貼付けて外面全体を上中下3段に区画し、長側面の両側に13条ずつの縦位突帯を貼付けている。しかし、突帯の貼付順序は①天井部の稜線突帯・口縁部突帯・下方1条の横位突帯、②上中段一連の縦位突帯・下段の縦位突帯、③上方1条の横位突帯である。そのため、上中段の縦位突帯と下段の縦位突帯の位置が揃わない箇所がみられる。天井部の稜線突帯だけ8～9cmで幅広く、上面には3～4cm前後の平坦面をつくる。それから続く短側面の稜線突帯は中段で途切れ、下段のみ短側面縦位突帯2条を貼付ける。突帯のほとんどは板押さえで調整を終えており、扁平な形状を呈する。透孔は円形で中段にあり、長側面に4孔ずつ、短側面に1孔ずつあける。

内面には、長側面に沿って板の圧痕が残っており、乾燥時の形持たせの痕跡とみられる。片側の短側面上端には製作最終時の閉塞痕跡が認められる。

蓋の製作方法を考えるうえで興味深い痕跡が口縁部で観察できた。両側の長側面中央の口縁部端面に台形状の板痕跡があり、柁目が残る0.2～0.3cmの段差となって凹む。そして、この両端から口縁部内面に沿って幅1.3cm前後の凹みがめぐり、その形状から潮裂き材の細木が付いていた痕跡と推測できる。これらの痕跡は最初の粘土帯積み上げ前に置かれていた工具の痕跡とみら



17号墓出土陶棺 身底部と蓋の接合状態



0 1m

れ、湾曲させた細木を左右に一つずつ配置し、それを台形状の板2枚の両端に反発力を利用して結合させて留めるような構造であったと思われる。蓋の口径を身の口径と合致させるための設定工具が存在したことを示す重要な痕跡と考えられる。この工具の外周に沿って高さ5cm前後・幅2.5～3cmの粘土帯を数枚接合し口縁部をつくる。その上に粘土帯をさらに積み上げていくとともに、内面側には工具上に被るように補充粘土を貼付けて口縁部の厚みを増している。口縁部端面は平坦で木目がつくもの木葉の圧痕は認められない。

身 全長212.4cm・最大幅75.1cm・高さ50.6cmで、糸切りによって2分割されている。脚部を除く外面全体と内側面の一部に朱塗りが認められる。

突帯の全体的な構成をみると、周底突帯と横位突帯1条を貼付けて外面全体を上下2段に区画し、長側面の両側に11条ずつ、短側面の両側に2条ずつの縦位突帯を貼付けている。突帯の貼付順序は横先縦後で、板押さえだけで調整を終えており、扁平な形状を呈する。短側面下段中央の区画内に1孔ずつ円形透孔があく。また、外面下段の区画内や突帯の所々に布目痕跡を確認できる。

蓋受けは身側面から一連で製作されており、その内周に沿って2次的に短い口縁部を付加している。長側面の口縁部内面下方には長軸方向に延びる板状圧痕が認められ、内側に板を当てた形持たせの痕跡とみられる。

脚部には10行3列の脚が取り付く。脚径14～16cm・脚高11cm前後である。脚は外面タテハケ調整、内面タテナデ調整で、接合痕やタテハケの方向、脚端部のヨコナデ調整からみて成形後に倒立されている。倒立した脚の上にレンズ状の粘土円板を載せて閉塞し、これを等間隔に接合して棺底を成形する。棺底面には不規則な小穿孔が複数あり、内側から外側へ貫通している。外周に配置された脚にだけ外面側から円形透孔を1孔ずつ穿孔するが、穿孔位置は長側面を優先させているので、短側面では中央列の脚一つだけに穿孔が認められる。

蓋身を合わせた時の総高は、97.2cm前後である。

#### 21号墓出土陶棺

蓋 復元全長204.2cm・復元最大幅73.0cm・高さ52.3cmで、横断面の形状は半円筒形を呈する。ヘラ切りによって2分割されており、天井部は鋸形に切断する。内外面全体に朱塗りが認められる。

突帯の全体的な構成をみると、稜線突帯・横位突帯・口縁部突帯を1条ずつ貼付けて外面全体を上下2段に区画し、長側面の両側に8条ずつの縦位突帯を貼付けている。突帯の貼付順序は横先縦後で、突帯上面の一部に板

押さえの痕跡がみられるものの突出する形状を維持している。透孔は方形で、長側面下段に4孔ずつあける。

内面には、葉状圧痕や板圧痕が不明瞭ながら認められ、天井部付近に布目圧痕が残るなど乾燥時の形持たせの痕跡がみられる。なお、残存部分では製作最終時の閉塞痕跡を確認できない。

高さ6cm前後の粘土帯を数枚横に接合して口縁部をつ



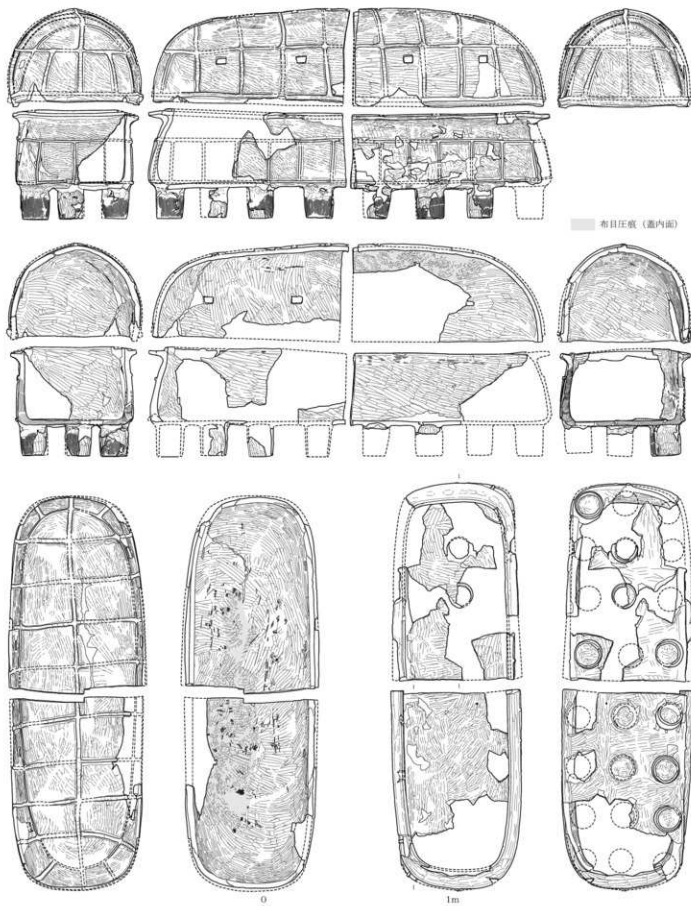
21号墓出土陶棺 蓋内面の布目圧痕



21号墓出土陶棺 蓋内面の布目と板の圧痕



21号墓出土陶棺 身口縁部～蓋受けの断面



AD第6次調査 21号墓出土陶棺 (1/20)

くるが、その上面には指頭圧痕が残る。口縁部端面は平坦で木目がつくもの木葉の圧痕は認められない。

身 復元全長 208.4cm・復元最大幅 34.5cm・高さ 58.0cmで、糸切りによって2分割されている。脚部を除く外面全体と内側の側面及び床面の一部に朱塗りが認められる。

突帯の構成が特徴的で、周底突帯と横位突帯1条を貼付けた後、縦位突帯はその間に貼付けられて横位突帯より上へ伸びない。縦位突帯は、長側面の両側に12条ずつ、短側面の両側に3条ずつ貼付けると推定される。突帯は、ヨコナデ調整により突出する形状を呈する。

蓋受けは身側面から一連で製作されており、その内周に沿って二次的に短い口縁部を付加している。長側面の口縁部内面下方には長軸方向に延びる板状圧痕が認められ、内側に板を当てた形持たせの痕跡とみられる。

脚部には8行3列の脚が取り付く。脚径13～14cm・脚高16cm前後である。17号墓陶棺と比べて、脚は細身で高く、透孔がない。脚は外面タテハケ調整、内面タテナデ調整で、接合痕やタテハケの方向、脚端部のヨコナデ調整からみて成形後に倒立されている。棺底面中央に小穿孔が1つだけ確認でき、内側から外側へ貫通している。

蓋身を合わせた時の総高は、106.0cmである。

(鏡方正樹)

##### (5) 土器・土製品

17号墓出土土器(1～8) 1～7が須恵器、8が土師器である。蓋は1が口径14.8cm、器高5.1cm、2が口径15.1cm、器高5.3cmである。いずれもやや扁平なつまみが付き、外面上半をロクロケズリ、下半および内面をクロコナデ。いずれも蓋有高杯の蓋であるが、高杯は共存していない。杯身は3が口径8.8cm、器高3.1cm、4が口径8.8cm、器高3.3cmである。いずれも受部より口縁部端がわずかに高い。3は下半をロクロケズリするが、4はロクロケズリを省略しクロコナデのみである。5は広口壺で口径14.2cm、器高17.0cmであり平底を呈する。外面はカキメで下半はロクロケズリ、内面はクロコナデ。底面は未調整で、内面に円盤状粘土板の痕跡を観察できる。6は砲弾状を呈し口縁部が欠損する壺で、残高12.8cmである。灰白色で土師器のような色調である。外面はハケ調整とみられるが摩滅し不明瞭で、タタキのような工具痕跡も認められ、底部は板ナデである。7は提瓶で口径6.9cm、器高20.1cm、肩部の両側に把手がつく。体部は片面のみ丸みをおびない平坦な形状を呈し、丸みのあるほうの内面には粘土で塞いだ痕跡が認

められるため、平坦面を底として粘土紐を積み上げたことがわかる。口縁部端はやや垂下する。体部全体にカキメを施すが平坦面の部分には及ばない。8は丸底壺で口径10.6cm、器高13.3cmで外面肩部に1条の沈線がある。調整はナデだが、体部は摩滅し不明瞭で指オサエの圧痕が明瞭である。

(村瀬 陸・森田将圭)

18号墓出土土器(9) 9は須恵器短頸壺で口径7.5cm、器高9.2cmで口縁部はやや内傾する。底部外面下半をロクロケズリ、それ以外をクロコナデ。肩部には1条の沈線がめぐる。口縁部～肩部付近の焼成が甘く、蓋を被せて焼成したとみられるが蓋は共存していない。

(山口等信)

20号墓出土土器(10～14) 10・11が須恵器、12～14が土師器である。10は台付長頸壺で、口径8.1cm、器高23.3cm、口縁部高9.2cmである。体部に明確な稜はなく丸みを帯びる。口縁部中央付近に1条、肩部に2条の沈線があり、内外面ともにロクロコナデ。11は短頸壺で口径9.6cm、器高14.1cmである。口縁部は緩やかに湾曲し、肩部に張りをもつ形状を呈する。肩部付近で部分的に沈線のようにみえる窪みがあるが不明瞭。外面の下半はロクロケズリで、それ以外はロクロコナデ。12は碗で口径9.6cm、器高4.9cmである。口縁部端はやや肥厚する。内外面ともにヨコナデだが、とくに外面に粘土紐接合痕が目立ち、内面のほうが丁寧に調整されている。皿は13が口径9.6cm、器高2.7cm、14が口径14.2cm、器高2.5cmである。13・14は崩落土からの出土で埋葬時に伴うものではない。

(村瀬 陸)

21号墓出土土器(15～18)・土製品(19) 15・16が須恵器、17・18が土師器、19が土製紡錘車である。15は杯身で口径13.2cm、残高4.0cm、立ち上がりは内傾する。外面下半をロクロケズリ、その他はクロコナデ。底部外面には直線状のヘラ描きがある。16は高杯で口径12.6cm、器高13.3cmである。杯部外面下半をロクロケズリ、その他はクロコナデ。脚部内面上半は未調整でしぼり痕が認められる。杯部外面に3条、脚部外面中央に2条の沈線がめぐる。脚部に透孔は認められない。17は小型丸底壺で復元口径7.4cm、器高6.9cmである。外面上半はヨコナデ、外面下半はケズリ調整後、不定方向のナデ。頸部付近ではハケメ状の工具痕が認められる。内面はヨコナデで、下半の一部はヨコナデ後にタテナデする。18は蔵骨器として使用されたと想定する長胴甕で復元口径約20cm、器高39.6cmである。口縁部はやや内湾する。内外面ともにタテハケで、底部から頸部に向けてストロークの長いハケ調整であるが、底部付近は短

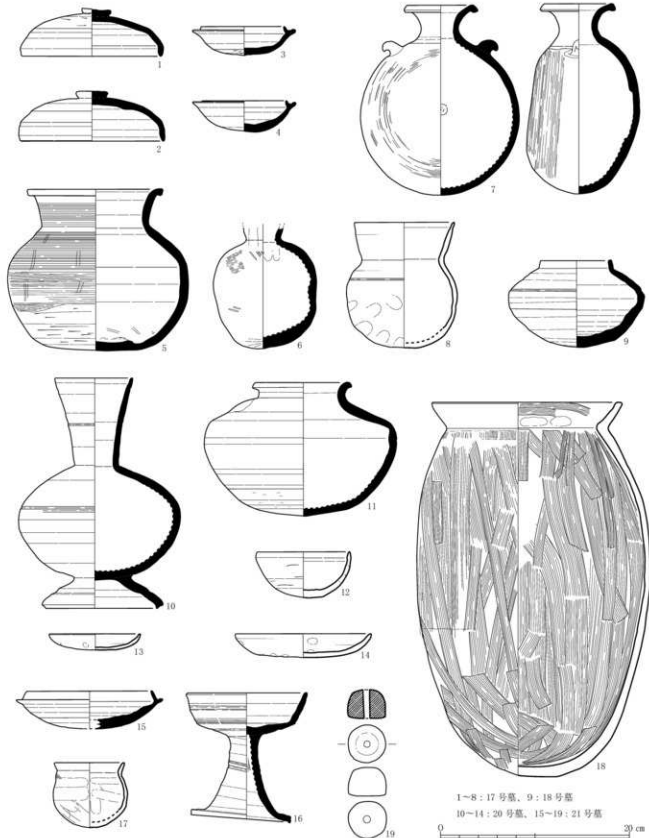


い単位で丁寧に調整されている。口縁部内面はヨコハケ調整。19は平面円形、断面蒲鉾形の紡錘車である。底部径4.0cm、高さ3.0cmである。中央に径0.7cmの円孔

が穿孔されている。表面はナデ調整であるが摩滅し不明瞭。

(望月拓海・村瀬 陸)

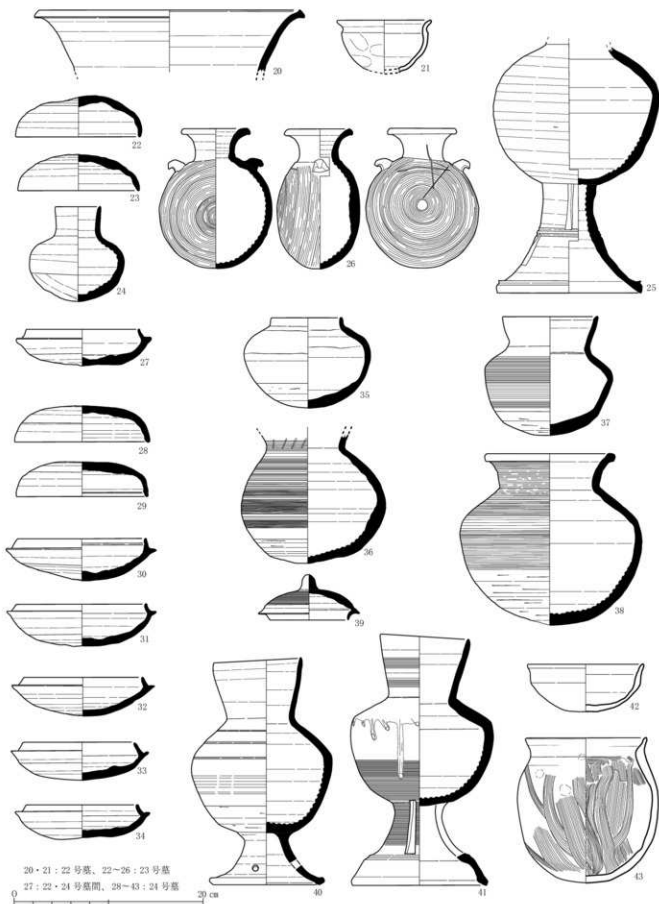
22号墓出土土器(20・21) 20は須恵器甕の口縁部片



1~8:17号墓, 9:18号墓  
10~14:20号墓, 15~19:21号墓

0 20 cm

AD第6次調査 横穴墓出土土器1 (1/4)



AD第6次調査 横穴墓出土土器2 (1/4)

で、口径27.6cm、残高6.5cmである。口縁部は緩やかに外反し、内外面口ロナデ。21は土師器壺で、口径9.6cm、残高5.5cmである。頸部のヨコナデが強く、8世紀の人面黒書土器等に多い形態の壺Bである。床面直上出土のため、8世紀代に追祭等の儀礼が行われたことを示すものである。(村瀬 陸・望月拓海)

23号墓出土土器(22~26) いずれも須恵器である。杯蓋は22が口径13.2cm、器高4.3cm、23が口径12.8cm、器高3.8cmである。いずれも外面頂部付近はクロコズリ、その他は口ロナデだが、22は頂部にクロコズリがおよばない。24は直口壺で口径4.8cm、器高10.0cmである。底部外面は不定方向にナデ、底部内面は棒状の圧痕が段状に観察できる。外面にはわずかに自然軸が付着し、内面には光沢をもつ物質が沈着する。25は頸部以上が欠損する台付長頸壺で、残存高27.0cm、底部径16.0cmである。体部は肩部にやや張りをもつ球形で、丁寧なクロコズリが施される。脚部はハの字に広がり、中央に2条の沈線を施す。その上下にそれぞれ3方向の透孔を段違いに穿つ。上段は長方形、下段は台形を呈する。26は提瓶で口径6.8cm、器高14.8cmである。体部は両側ともに丸みをもつ。外面はクロコズリのちカキメが施され、片面には3本のヘラ描きがある。内面の片側に粘土で塞いだ痕跡が確認でき、ヘラ描きのある面をとして粘土組織み上げを行ったことがわかる。また、両面で色調が異なり、ヘラ描きのある面のほうがよく焼けていることから、製作時と焼成時の天地が共通する。

(水川慶紀)

23・24号墓間出土土器(27) 27は須恵器杯身で口径11.9cm、器高3.8cmである。底部外面をクロコズリ、それ以外は口ロナデで、底部外面に直線状のヘラ描きがある。(山口等悟)

24号墓出土土器(28~43) 28~41が須恵器、42・43が土師器である。杯蓋は28が口径14.2cm、器高3.8cm、29が口径13.9cm、器高3.6cmである。28は形骸化した段がわずかに認められるが29にはない。いずれも天井部をクロコズリ、その他を口ロナデ。29は口縁部内面に沈線がめぐる。28の天井部外面には直線状のヘラ描きがある。杯身は30が口径13.6cm、器高4.4cm、31が口径13.6~14.9cm(歪み大)、器高4.3cm、32が口径12.5cm、器高4.1cm、33が口径11.5cm、器高4.0cm、34が口径11.3cm、器高3.7cmである。30は立ち上がり部内面に沈線がめぐる。32・33は底部外面に直線上のヘラ描きがある。35は短頸壺で口径7.3cm、器高9.5cmで、外面下半をクロコズリ、その他は口

ロナデだが内外面ともに接合痕が目立つ。その他の壺は36が残高13.6cm、37が口径9.9cm、器高12.5cm、38が口径13.2cm、器高18.1cmであり、いずれも外面にカキメを施し下半をクロコズリする。内面はいずれも口ロナデ。36は頸部を絞り込んだような痕跡が認められる。39は壺蓋で、口径8.3cm、器高4.7cmである。外面頂部はカキメ、その他は口ロナデ。つまみは径1.8cm、高さ1.6cmで丸みがある。外面には一部ガラス質化した自然軸が付着する。台付長頸壺は、40が口径9.2cm、器高13.9cm、口縁部高6.1cmである。肩部にやや張りをもち、3条の沈線がめぐる。体部外面には布のようなもので密にナデ調整した痕跡がみられ、下半はクロコズリ。脚部はハの字に広がり、端部はやや立ち上がる。直径1cm程度の円形透孔が3方向に穿孔される。また、体部と脚部の接合部分内面は未調整である。色調は土師質のような灰赤色を呈する。41は口径9.3cm、器高26.6cm、口縁部高6.2cmである。肩部に張りをもつ。口縁部および体部下半へ脚部にかけてカキメを施す。脚部は屈曲して台座状を呈し、長方形透孔を3方向に穿つが間隔はやや不均等である。肩部付近にはガラス質化した自然軸が付着する。39と径や自然軸の状態が一致し出土状態も近いことからセット関係とみられる。42は碗で口径12.2cm、器高5.0cmである。内外ともに摩擦するが横方向のナデ調整とみられる。器壁は口縁部付近、底部が厚手、体部が薄手となる。43は壺で口径12.6cm、器高15.3cmである。器壁は頸部までやや厚く、そこから短く屈曲し肥厚した口縁部が特徴的な形態である。内外面ともに縦方向を基調とするハケ調整を施す。

(望月拓海・森田将圭)

## V 調査所見

調査の結果、横穴墓を新たに8基礎確認し赤田横穴墓群の範囲が東西約150mにわたって広がっていることが判明した。今回の調査で南西方向に墓道を向ける24号墓を確認したことから、横穴墓はさらに西に続く可能性が考えられる。今回確認した横穴墓は、配置形態から17~19号墓(東群)・20~22号墓(中群)・23~24号墓(西群)の3群に分かれて築造された可能性がある。平面形態と出土遺物から、大きく3時期の変遷が伺える。大型の陶棺が埋葬される17号墓(初葬)・21号墓(初葬)や23・24号墓(初葬)が6世紀後半(赤田1~2期)、17号墓(追葬)・20号墓が7世紀前半(赤田3期)、小型の玄室で円筒形陶棺や長胴甕の蔵骨器が埋葬される18号墓(初葬・追葬)・19号墓・21号墓(追葬)が7世紀中頃(赤田4期)と考えられる。また、22号墓では、

玄室が構築されず、墓道だけ掘削して埋葬は行われていないが、8世紀の土師器壺Bが出土している。これまでの調査でも、玄室や墓道から8～9世紀の土器・土製品が出土しており、この時期まで何らかの祭祀行為が行われていたことが指摘できる。

赤田横穴墓群は、これまでの調査で陶棺を埋葬する横穴墓群として強い地域的特色が指摘されてきた。これらの造墓主体としては、土師氏が想定されており、奈良市北西部の古代を考える上で貴重な成果である。18号墓出土の円筒形陶棺は9号墓出土の円筒形陶棺と比べ小型

化し、さらに横に寝かせて出土している点特徴で、円筒形陶棺と砲弾形陶棺の関係を考える上で新たな資料となる。また、21号墓の土師器長胴甕から鹿角柄刀子が出土しており、土師器長胴甕が蔵骨器として利用されることが新たに判明した。

これらは、古墳時代後期から飛鳥時代の奈良市北西部における埋葬形態を考える上で重要である。(吉田朋史)

AD第6次調査 横穴墓一覧表

遺構番号	玄室		羨道			墓道		棺	出土遺物	
	長さ(m)	奥壁幅(m)	長さ(m)	玄門幅(m)	羨門幅(m)	長さ(m)	幅(m)		棺内	棺外
17号墓	3.7	2.1	1.9	1.1	0.9	3.7以上	1.7以上	【初葬】土師質亀甲形陶棺1 【追葬】木棺(推定)1	鉄刀子1 -	須恵器有蓋高坏蓋2・壺1・埴輪1・直口壺1 須恵器杯蓋2・土師器丸底壺1
18号墓	3.9	2.2	1.1	0.9	0.9	3.6以上	2.3	【初葬】土師質内筒形陶棺1、木棺(推定)1 【追葬】木棺(推定)1	鹿角柄刀子1・鉄鏝3 鉄鏝1	須恵器短頸壺1
19号墓	2.9	1.5	2.3以上	1.4	-	-	-	木棺1	-	朝顔形埴輪1・人物埴輪1
20号墓	4.6	2.3	1	1.1	1	2.1以上	3.3	木棺(推定)1	-	須恵器台付長頸壺1・短頸壺1・土師器棺1
21号墓	5.9	2	1.3	1.4	1.2	2.9以上	2.7	土師質亀甲形陶棺1、木棺(推定)1、土師器長胴甕1	鹿角柄刀子1	須恵器杯身1・高坏1、土師器小型丸底壺1、土製紡錘車1、鉄鏝2
22号墓	-	-	-	-	-	3.7以上	3.2	-	-	土師器壺B1
23号墓	5.1	-	0.6	0.9	1	2.3以上	1.4	木棺(推定)1	-	須恵器杯蓋2・台付長頸壺1・埴輪1・直口壺1
24号墓	2.4以上	2.3	-	-	-	-	-	【初葬】木棺(推定)1 【追葬】木棺(推定)1	-	陶棺片、須恵器杯身5・杯蓋2・台付長頸壺2・壺蓋1・鉄鏝3、土師器棺1・壺1、鉄鏝8 短頸壺1

赤田横穴墓の変遷

須恵器形式	時期	期	墓室	陶棺	副葬土器	造墓順	横穴墓の特徴
MT 85 TK 43	6世紀	赤田1期	1期	第1期	5・17・21・23号墓	5・17・21・23号墓	羨道が長い。墓室(玄室+羨道)全長は奥壁長の2倍以上。 初葬時、羨門を板で閉塞する。 陶棺埋葬と木棺埋葬が当初から併存した可能性。
		赤田2期	2期	第2期	3・4号墓 1号墳	3・4号墓 1号墳	羨道が短い。墓室全長は奥壁長の2倍以上。 初葬時、羨門を板で閉塞する。 初葬は陶棺、追葬は木棺。陶棺の向きは横向きと縦向きが併存。
TK 209	7世紀	赤田3期	3期	第3期	20号墓 1・2号墓 6・7・8号墓	20号墓 1・2号墓 6・7・8号墓	短い羨道と玄室で構成するものと羨道を省略したものが併存。 墓室全長はII期より短く、玄室規模も縮小。 陶棺の向きは縦向き。
		赤田4期		第4期	7・9号墓	9・18・19号墓	19号墓を最後に横穴墓が造られなくなり、既存の横穴墓に追葬。円筒形陶棺が使用される。 棺を入れるだけの小さい墓室が出現(部墓化)。

### 13. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、令和3年度に史跡大安寺旧境内において3件の発掘調査を実施した。

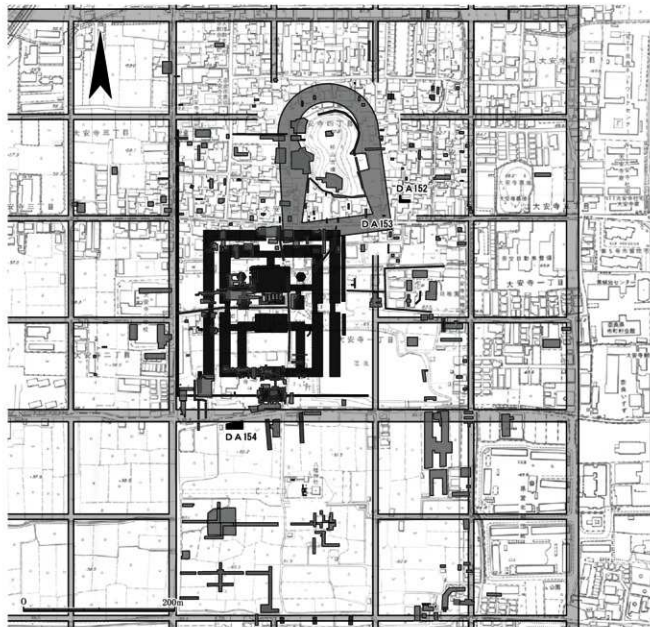
DA第152・153次調査は住宅建築に伴い、「池井岳」または「賤院」に想定される大安寺旧境内の北東部の様相の確認、及び杉山古墳の周濠の堆積状況を確認するこ

とを目的として実施した。また、DA第154次調査は六条大路の検出を目的とした範囲確認調査である。

DA第154次調査の調査成果については、令和6年度発行予定の『史跡大安寺旧境内Ⅱ』で報告する。

史跡大安寺旧境内 発掘調査一覧表（令和3年度実施）

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA第152次調査	個人住宅建築	大安寺四丁目1105番1、1105番2の各一部	2021.4.12～4.22	51㎡	秋山成人
DA第153次調査	個人住宅建築	大安寺四丁目1112番	2021.7.9	3㎡	秋山成人
DA第154次調査	範囲確認調査	東九条町1291-2、1292-1、1292-3	2021.10.4～10.27	180㎡	原田憲二郎



史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

## (1) 池井岳または賤院の調査 DA第152次

### I はじめに

調査地は史跡大安寺旧境内の北東に位置し、杉山古墳外堤東側に位置する。『資財帳』によるところの左京六条四坊十坪が「池井岳」または「賤院」と記された地区に相当すると考えられている。これまでに、調査地北側のDA第36次調査（昭和63年度）では室町時代の土坑・江戸時代の土坑、さらに北側のDA第20次調査（昭和59年度）では江戸時代の土坑、調査地北東側の市DA第22次調査（昭和60年度）では奈良時代中頃の井戸を検出している。今回の調査は『資財帳』に記された大安寺寺域内の敷地利用を知るため調査を行った。なお、検出遺構の掘削は発掘区壁面沿いで深さの確認を目的として一部掘削するにとどめた。

### II 基本層序

発掘区内の基本層序は上から造成土、黒灰色土（表土）、暗褐色土、淡褐色砂質土、整地土（奈良時代）の黄灰褐色砂質土、地山の黄灰色粘土の順で堆積する。遺構は整地土上面（GL-0.6m）で確認した。整地土上面の標高は62.7m、整地土の深さは0.1～0.5m、地山の標高は62.5mである。

### III 検出遺構

奈良時代の掘立柱列SA01、土坑SK02、室町時代の粘土探掘坑SK03～06、溝SD07・10、土坑SK08・09、江戸時代の井戸SE11・12、時期不明の土坑SK13、掘立柱列SA14を検出した。

SA01 発掘区東半で検出した南北1間以上の掘立柱列で、柱間寸法は2.7mである。抜取埋土から8～9世紀の土師器小片が出土した。

SK02 発掘区西半南辺で検出した発掘区外南へ広がる掘形平面隅丸方形と考えられる土坑又は井戸である。規模は東西2.2m、南北0.4m以上、深さ0.4m以上。埋土は灰褐色土が堆積する。8世紀の須恵器杯蓋・土師器小片・平瓦が出土した。

SK03～06 発掘区西半で検出した平面不整形、断面逆台形の土坑である。規模は東西1.1～1.3m以上、南北0.9～1.7m以上、深さ0.5m。埋土は褐色砂質土である。重複関係から整地土の黄灰褐色砂質土上面より掘削され、土坑SK06は溝SD07より古い。SK03埋土から14世紀初頭の羽釜小片が出土した。

SD07 発掘区中央西で検出した南北方向に延びる溝で断面逆台形である。規模は長さ2.55m以上、幅0.75

m、深さ0.25mである。埋土から15世紀後半の土師器羽釜が出土した。

SK08・09 発掘区北西で検出した平面不整形、断面逆台形の土坑である。規模はSK08が東西0.6m以上、南北1.2m、深さ0.7m以上。SK09が東西0.8m以上、南北2.3m、深さ0.7m以上。埋土は暗灰色土で、14～15世紀の土師器羽釜が出土した。

SD10 発掘区中央東で検出した南北方向に延びる溝で、断面皿状である。規模は南北2.8m以上、幅0.7m、深さ0.15mである。埋土から18～19世紀の信楽陶器小片が出土した。

SE11・12 発掘区中央で検出した掘方平面隅丸方形の井戸である。規模はSE11が東西2.5m、南北0.85m以上、深さ0.4m以上、SE12が東西2.2m、南北2.0m以上、深さ0.7m以上である。いずれも井戸枠取り付け痕跡から18世紀の肥前産陶磁器碗、土師器炮烙が出土した。重複関係からSE11はSE12より古いことがわかる。

SK13 発掘区の東半で検出した発掘区外へ広がる平面不整形の粘土探掘坑とみられる土坑である。底は西から南東方向に下降し、凸凹している。規模は東西3.5m以上、南北3m以上、深さは南東隅で0.5mである。埋土は褐色砂質土で、遺物が出土せず時期は不明である。重複関係から柱列SA01より新しいことがわかる。

SA14 発掘区東半で検出した東西1間以上の掘立柱列である。柱間は2.1m。柱穴掘方は径0.3m。重複関係から土坑SK13より新しいことがわかる。

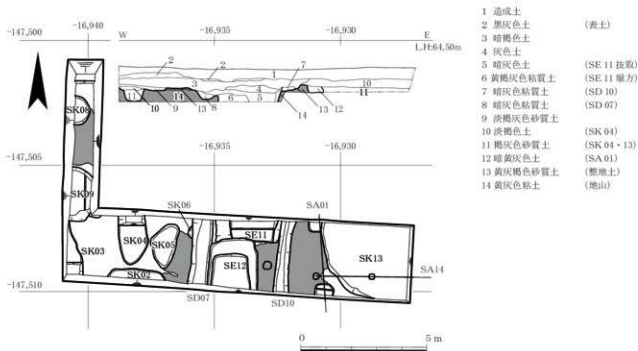
### IV 出土遺物

遺物整理箱で7箱分出土した。土器類には奈良・平安時代の土師器・須恵器、室町時代の土師器・瓦質土器、江戸時代の陶磁器、瓦類には奈良時代の軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。その他、古墳時代の埴輪、室町・江戸時代の土人形がある。

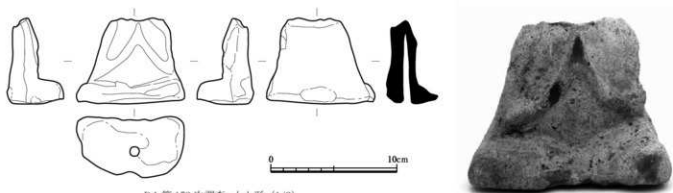
土人形 包含層から土製の合掌形坐像が出土した。頭部は欠損、腕は合掌して脚を組む。像高6.8cm、腹厚2.3cm、底部幅8.5cm。底部に径0.8cm、奥行5.7cmの孔を穿つ。室町～江戸期の作と考えられる。

### V 調査所見

今回、奈良時代の掘立柱列・土坑を検出した。また14～15世紀になると新たな土地利用が見られ、周辺環境が改変されていくようである。（秋山成人）



DA 第 152 次調査 発掘区平面図・北壁土層図 (1/150)



DA 第 152 次調査 土人形 (1/3)



DA 第 152 次調査 発掘区全景 (西から)



DA 第 152 次調査 発掘区全景 (南から)

## (2) 池井岳または賤院の調査 DA第153次

### I はじめに

調査地は史跡大空寺旧境内の北東に位置し、杉山古墳前方部周濠の復元位置に相当する。また、「資財帳」によるところの「池井岳」または「賤院」と記された地区に相当すると考えられている。これまでに、調査地南東側DA第7・8次調査(昭和57年度)では地表下約1mで地山を確認、土坑を検出している。調査地西隣接地DA第67次調査(平成6年度)では古墳前方部墳端葺石と周濠を確認している。調査地北東側DA第152次調査(令和3年度)では奈良・室町・江戸時代の各遺構を確認している。今回の調査は杉山古墳前方部周濠南東部分の確認を目的に行い、調査は東西3m、南北1mの発掘区を設けた。検出遺構の掘削は地表下約1m迄の掘削にとどめた。

### II 基本層序

基本層序は上から黒褐色土・暗褐色土(造成土)、暗灰色粘質土、暗灰色砂質土(周濠埋土)、茶褐色砂質土(周濠埋土)の順である。遺構は周濠埋土上面(GL-0.7m)で確認した。周濠埋土上面の標高は62.26mである。

### III 検出遺構

遺構には杉山古墳周濠、井戸SE01がある。

周濠 発掘区外へ広がる周濠を検出した。調査地全体が周濠内にあたる。古墳時代の埴輪片、奈良時代の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・製塩土器片が出土している。

SE01 発掘区外南北に広がる井戸を検出した。規模は南北0.7m以上、東西1.84m、深さ0.36m以上、内

側に枠内埋土がみられ、南北0.7m以上、東西1.4m以上、深さ0.3m以上堆積する。枠内東辺と西辺に直径約3cmの枠材とみられる木材を確認した。遺物は時期不明の土師器小片のみである。周濠埋没後に掘削されたものである。

### IV 出土遺物

遺物整理箱1箱分が出土した。土器類には奈良時代の土師器・須恵器、製塩土器、瓦類には奈良時代の丸瓦・平瓦があり、その他に古墳時代の円筒埴輪がある。

### V 調査所見

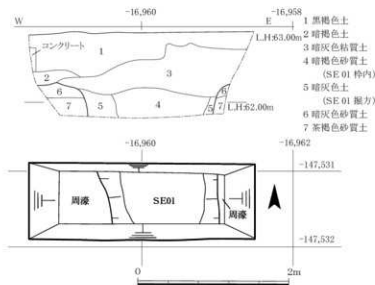
今回の調査地は全体が杉山古墳前方部周濠南東部分に相当することが確認された。これは周濠上面の高さが調査地西隣接地であるDA第67次調査の周濠上面の高さ62.26mと同じであることから分かる。また、DA第67次調査の周濠埋土から杉山瓦窯(平安時代)の窯体片が出土しており、同様に平安時代以降に埋まったと考えられる。(秋山成人)



DA第153次調査 発掘区全景(西から)



DA第153次調査 発掘区全景(南から)



DA第153次調査 発掘区平面図・北壁土層図(1/50)



## 14. 令和3年度実施 遺跡有無確認踏査一覧

令和3年度の遺跡有無確認踏査は2件実施した。

No.	受理番号	調査地	踏査日	事業面積 (㎡)	事業者	事業内容	調査所見
1	R2.4004	月ヶ瀬長引1246番 13カ7筆	R3.11.18	28,409	個人	土砂の採取	踏査の結果、近現代とみられる供養1基を確認したが、近世以前の遺物・遺構は確認できなかった。
2	R3.4003	桂木町、南京絛町二丁目・三丁目・四丁目地内	R4.2.22	12,500	奈良市長	街路改良工事	野神古墳については、墳丘および周濠が分かる可能性が高く、施工前に発掘調査が必要。 旧陸運局敷地南西部分の高まりについては、形状が大きく改変されているものの、古墳などの遺跡であるかを確認する試掘調査が必要。 →令和5年度に試掘調査を実施

## 15. 令和3年度実施 工事立会一覧

令和3年度に土木工事に関わって延べ140件の立会を実施した。

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
1	R2.3390	左京二条三坊一坪	奈良市法華寺町362番の一部	モラル(有)	宅地造成	宅地	R.3.4.6	GI-1.2m アスファルト0.05m、盛土0.4m、黒灰色土(耕伴土)0.3m、灰色土0.45m以上
2	R2.3293	右京二条四坊十六坪	奈良市若葉台四丁目291-6、315-20、315-78	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.4.7	GI-1.7m 盛土1.7m以上
3	R2.3397	古城古墳(安康院)宝来城跡隣接地	奈良市宝来西四丁目511番1	秋田工務店(株)	分譲住宅新築	宅地	R.3.4.8	GI-0.2m 黒褐色土(表土)0.15m、黄褐色土(地山)0.05m以上
4	R2.3404	右京二条四坊十四坪	奈良市足田町一丁目28番の一部	(株)弘福	個人住宅新築	宅地	R.3.4.9	GI-0.9m 造成土0.5m、黄灰色砂質土(地山)0.4m以上
5	R2.3386	五条大路(東六坊)奈良町遺跡	奈良市京終地方西側11番3、12番3、京終地方東側町18番2	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.4.9	GI-0.1m 造成土0.1m以上
6	R2.3142	西四坊大路(五条)	奈良市六条西一丁目981-1、4、5、6	かさね(株)	老人福祉施設新築	宅地	R.3.4.13	GI-1.0m 造成土0.7m以上
7	R2.3348	東二坊大路(一条)	法華寺町1152-2地先	関西電力送配電(株)	電柱撤去・新設	宅地	R.3.4.13	GI-1.5m 黒褐色シルト質砂(表土)0.3m、橙路粘土・灰色シルト(地山)1.2m以上
8	R2.3289	興福寺跡奈良町遺跡	高畑町1116-6	大阪ガス(株)	ガス管理施設	道路	R.3.4.18	GI-0.75m 道路舗装・造成土0.75m以上
9	R2.3384	右京八条四坊九坪	七条西町一丁目609番28の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.4.19	GI-0.3m 造成土0.3m以上
10	R2.3392	左京一条四坊十一坪	法蓮町597-1	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R.3.4.19	GI-0.2~0.6m 0.2~0.6mで明黄褐色粘土(地山)
11	R2.3319	遺物散布地(06C-9007)	須山町475	関西電力送配電(株)	本柱・支線建替	道路	R.3.4.20	GI-2.5m 暗黄褐色シルト質砂(表土)0.3m、灰オリーブ色シルト質砂2.2m以上
12	R2.3393	奈良山第44号票	中山町1534-1、1534-2、1535、1537-1、1537-2、1537-3、1536	積水ハウス不動産関西(株)	宅地造成	宅地	R.3.4.26	GI-1.2m 黒褐色土(表土)0.4m、褐色土0.3m、黄灰色粘質土(地山)0.5m以上
13	R2.3394	票(04B-0006)	三松ヶ丘500番110	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.4.27	GI-0.2m 造成土0.2m以上
14	R3.3002	右京北辺四坊二坪	西大寺野神町一丁目657番1、659番1、659番11、659番15	個人	共同住宅新築	宅地	R.3.5.7	GI-1.5m 造成土0.1m、黄灰色粘土(地山)0.5m以上

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
15	R 3.3162	四条大路 西二坊大路	五条一丁目1-32～3-2	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R 3.5.10	GL-1.1 m アスファルト0.05 m、砕石0.05 m、造成土1.0 m以上
							R 3.5.13	GL-1.46 m アスファルト0.05 m、造成土0.5 m、配管埋戻土が0.85～0.91 m以上
							R 3.5.24	GL-1.4 m アスファルト0.05 m、砕石0.05、造成土0.4 m、淡灰色粘砂(地山)0.9 m以上
							R 3.5.28	GL-1.1 m アスファルト0.05 m、造成土0.6 m、淡灰色粘砂(地山)0.45 m以上
							R 3.5.31	GL-1.0 m アスファルト0.05 m、砕石0.1 m、造成土0.5 m、淡灰色粘砂(地山)0.35 m以上
16	R 2.3385	左京三条六坊七坪 奈良町遺跡	高天市町 65 番1	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.5.11	GL-0.4～0.5 m 黒褐色土(表土)0.4～0.5 m以上
17	R 3.3009	左京五条二坊二坪	大安寺町 506 番1外	(株) いちかわ	店舗新築	宅地	R 3.5.12	GL-1.35 m アスファルト0.05、造成土1.3 m以上
							R 3.12.13	GL-4.14 m GL-2 m 珪土留版、以下灰色粘質土(耕作土)、淡灰色シルト・黄灰色シルト0.8 m、灰色・黄褐色シルト遺物包含(遺構面)0.2 m、黄灰色シルト0.12 m、灰色粘土0.18 m、灰色粗砂・青灰色粘土0.2 m、以下灰色粗砂・暗灰色粘土
18	R 2.3416	右京三条三坊九坪	平松二丁目 250 番 19	(株) ユニハウス	分譲住宅新築	宅地	R 3.5.24	GL-0.1～0.4 m 造成土0.1～0.4 m以上
19	R 3.3066	左京一条六坊四坪	法蓮町 1265 番1、1265 番2	(株) アループ	分譲住宅新築	宅地	R 3.5.28	GL-0.25 m 黒灰色土(耕作土)0.2 m、淡褐色砂質土0.05 m
20	R 2.3353	左京二条四坊一坪	法蓮町 395-1	(協) 奈良社会福祉院	障害者支援施設、事務所新築	宅地	R 3.6.7	GL-1.3 m 造成土1.0 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m、灰色粘土0.1 m以上
21	R 3.3053	左京一条五坊五・八坪	法蓮町 793-3	大阪ガス(株)	ガス管理設・撤去	宅地	R 3.6.8	GL-0.6 m 造成土0.5 m、灰色粗砂0.1 m以上
22	R 2.3389	左京六条四坊十五・十六坪	大安寺五丁目2-10～五丁目9-18	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R 3.6.10	A地点:GL-0.8 m アスファルト0.1 m、造成土0.7 m B地点:GL-1.15 m アスファルト0.05 m、砕石0.25 m、造成土0.85 m以上 C地点:GL-1.05 m アスファルト0.05 m、砕石0.1 m、造成土0.9 m以上 D地点:GL-1.5 m アスファルト0.05 m、砕石0.1 m、黒灰色土(耕作土)0.1 m、灰色土0.4 m、黄灰色粘土(地山)0.5 m、黄褐色砂礫0.35 m以上
23	R 1.3417	左京二条七坊三・四坪	平田横町 14	(大) 奈良女子大生	長屋新築	宅地	R 3.6.14	GL-0.3 m 造成土0.3 m、以下地盤改良土
24	R 2.3391	右京七条一坊八坪	六条町 24 番1	楽天モバイル(株)	携帯基地局建設	駐車場	R 3.6.15	GL-3.0 m 造成土0.7 m、黒灰色土(耕作土)0.3 m、灰色粗砂(河川堆積物)、灰色粘土1.2 m以上
25	R 2.3028	右京八条三坊八坪	七条一丁目 544 番5、545 番5	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.6.17	GL-3.5 m 造成土0.1 m、赤灰色粘質土0.2 m以上
26	R 2.3401	右京四条四坊二坪	平松二丁目 797 番8	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	R 3.6.21	GL-0.1 m 造成土0.1 m以上

## 令和3年度実施 立会工事

No.	受理番号	道筋	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
27	R 3.3096	右京七条四坊十四坪	七条西町一丁目 25-18	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 6. 23	GL-0.9m 造成土 0.9m以上
28	R 2.3383	右京二条三坊二坪	西大寺南飯焼地 17-5-17-6	関西電力送配電(株)	電柱・支線新設	宅地	R 3. 6. 29	GL-2.6m 土層確認でまず
29	R 3.3018	左京二条三坊一坪	法華寺町 362	関西電力送配電(株)	電柱新設建替・支線新設	宅地	R3.6.30	GL-0.8～0.9m 造成土 0.8～0.9m以上
30	R 1.3448	左京五条六坊十一坪	西木辻町 88 番地 他 14 番	小山(株)	工場新築(水槽)	工場用地	R 3. 7. 2	GL-1.2m 造成土 0.2m, 黒灰色土 0.2m, 灰褐色土 0.1m, 褐色土 0.1m, 灰色砂質土 0.2m, 褐色土 0.15m, 黄褐色土 0.25m, 黄褐色粘土(地山) 裏掘りの溝・小柱穴確認
31	R 3.1004	特別史跡平城宮跡	伏見町 271 番1、472 番地先	西日本電信電話(株)	電柱の経年劣化による建替	道路	R 3. 7. 2	GL-1.15m アスファルト 0.05m, 造成土 0.65m 以下シルト層
32	R 3.3119	右京三条四坊五坪	宝東三丁目 732-3、732-4の1部、735-1の1部、735-2	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 7. 5	GL-0.2m 黒灰色土(耕作土) 0.2m以上
33	R 2.1152	大安寺旧境内附石橋瓦葺跡	大安寺西丁目 1105-1、1105-2	関西電力送配電(株)	電柱・支線新設	宅地	R 3. 7. 5	GL-1.2～1.3m No.22(N1W1): 暗褐色土 0.8m 暗灰粗砂 0.6m以上 No.22(N1W2): 暗褐色土 0.8m, 黄褐色土(地山)
34	R 2.3213	北村城跡	北村町 876、877-1、878、892	農事組合法人奈良の郷	林内作業道の開設	山林	R 3. 7. 6	造成土確認
35	R 2.3183	右京五条四坊六坪	平松四丁目 354 番3、354 番1の一部(3号地)	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	R 3. 7. 7	GL-0.15m 盛土 0.15m以上
36	R 3.3184	五条桑間路・西四坊坊間東小路	平松四丁目 354 番1の一部(4号地)	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	R 3. 7. 7	GL-0.15m 盛土 0.15m以上
37	R 3.3430	左京八条四坊十坪	東九条町 815 番1	個人	共同住宅新築	木田	R 3. 7. 8	A地点:GL-0.8m アスファルト 0.1m, 造成土 0.7m B地点:GL-1.15m アスファルト 0.05m, 砕石 0.25m, 造成土 0.85m以上 C地点:GL-1.05m アスファルト 0.05m, 砕石 0.1m, 造成土 0.9m以上 D地点:GL-1.5m アスファルト 0.05m, 砕石 0.1m, 黒灰色土(耕作土) 0.1m, 灰色土 0.4m, 以下黄灰色粘土(地山) 0.5m, 黄褐色砂礫 0.35m
38	R 2.3261	西大寺跡	西大寺南町2-3	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R 3. 7. 12	GL-0.9m 東端地点:コンクリート平板 0.1m, 造成土 0.6m, 黄灰色粘質土 0.1m, 褐色粘質土 0.1m以上 西端地点:コンクリート平板 0.1m, 造成土 0.5m, 黒灰色土(耕作土) 0.1m, 黄灰色粘質土 0.3m以上
39	R 3.3075	左京五条六坊三坪	西木辻町 105 番 25、112 番5	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 7. 15	GL-0.2～0.4m 造成土 0.2～0.4m以上
40	R 3.3074	左京二条七坊十二坪	南平田東町 16-1、16-2	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 7. 19	GL-0.2m 黒褐色土(表土) 0.2m以上
41	R 3.3030	三条大路(東六坊)	上三条町 29-1	大阪ガス(株)	ガス管理設・撤去	道路	R 3. 7. 20	GL-0.5～1.1m 造成土 0.8m, 以下灰白色砂礫(地山)
42	R 3.3050	東三坊大路(五条)	大安寺町七丁目 174-6、大森町 686-5	関西電力送配電(株)	電柱建替	宅地	R 3. 7. 26	GL-0.9m 造成土 0.9m以上
43	R 3.3137	左京二条四坊十二坪	芝辻町三丁目 107 番8	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 7. 26	GL-0.3～0.5m 造成土 0.3～0.5m以上

No.	受理番号	道跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
44	R.3.3117	広大寺道遺跡	今市町 279-1, 279-2, 279-3, 279-4, 281-2, 281-3	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.7.30	GL-0.7m 黒褐色土(表土) 0.2m, 淡褐色土 0.3m, 黄褐色砂質土(地山) 0.2m以上
45	R.2.3368	右京六条四坊十一・十二坪	六条二丁目 1121番, 1131番 6, 1294番	(株) HSG	老人デイサービス施設新築(施工時立会)	宅地	R.3.7.30	GL-0.5～0.7m 造成土 0.4～0.5m, 黄褐色砂質土(地山) 0.3m以上
46	R.2.3278	左京五条四坊十坪五条東間路	大森町 97番1, 102番1, 大森西町 170番2	(株) ベストライフ西日本、(合) フルート	有料老人ホーム新築	水田	R.3.7.30	GL-2.3～2.8m 造成土 1.55m, 黒褐色土(表土) 0.2m, 灰褐色砂質土 0.2m, 灰色砂礫(地山) 0.35～0.85m以上
47	R.2.3123	左京二条七坊十一坪奈良町遺跡	川久保町 10番6	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.8.2	GL-0.2m 造成土 0.2m以上
48	R.3.3115	左京一条四坊三坪一条東間南小路	法蓮町 453-1, 454, 456-1, 456-4, 457-1, 457-3, 463-3	(株) ネクスタージ	店舗新築	駐車場	R.3.8.3	GL-0.5～0.6m 造成土 0.5～0.6m以上
							R.3.9.10	GL-2.2m 造成土 1.0m, 黒色粘質土(耕作土) 0.3m, 灰黄色粘質土(地山) 0.9m以上
49	R.3.3224	左京五条四坊七坪	大安寺七丁目 674-1, -3, -4, -7, -8の各一部	(株) フロンティアホーム	分譲住宅新築	宅地	R.5.8.4	GL-0.2～0.3m 造成土 0.2～0.3m以上
50	R.3.3225	左京五条四坊七坪	大安寺七丁目 674-1, -4～-6, -8, ～-10の各一部	(株) フロンティアホーム	分譲住宅新築	宅地	R.3.8.4	GL-0.2～0.3m 造成土 0.2～0.3m以上
51	R.3.3104	左京四条五坊七坪	三条本町	関西電力送配電(株)	電線共同溝の増築	道路	R.3.8.4	GL-1.2m コンクリート 0.1m, 造成土 0.4m, 黒灰色土 0.6m, 灰色土 0.1m以上
52	R.3.3077	右京二条四坊四坪	菅原町 376-10, 377-7	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.8.4	GL-0.5m 造成土 0.3m, 黒灰色土(耕作土) 0.2m以上
53	R.3.3054	左京二条六坊十五坪六坊坊間東小路	法蓮町 1186番, 1187番1	恒和(株)	個人住宅新築	宅地	R.3.8.10	GL-0.2～0.4m 造成土 0.2～0.4m以上
54	R.3.3111	西二坊坊間路(四条)	尼辻中町 403番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.8.10	GL-0.5m 造成土 0.1m, 黒褐色土(表土) 0.2～0.4m, 黄褐色砂質土(地山) 0.2m以上
55	R.2.3223	左京二条六坊十五坪、七坊二・七・十一坪、二条東間路、奈良町遺跡	北袋町 32-3地先～川久保町 10-1地先	奈良市企業局	浸水対策工事	宅地・道路	R.3.8.10	GL-6m 掘削空洞部 2m, 淡黄褐色砂(田河川堆積) 1.6m, 青灰色粘質土 1m以上
56	R.2.3146	左京二条七坊八坪、十六坪、奈良町遺跡	東御鉢町 30番, 31番, 32番	個人	共同住宅新築	宅地	R.3.8.11	GL-0.5m 砂石 0.05m, 暗褐色土 0.45m以上
57	R.3.3151	西四坊大路(七条)	六条西四丁目 1492-63, 1492-65	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.8.16	GL-0.1～0.3m 造成土 0.1～0.3m以上
58	R.3.3201	東四坊大路(一条)	法蓮町 710番3	(株) ヒサツワ住宅	宅地造成	宅地	R.3.8.17	GL-0.8m 造成土 0.8m以上
59	R.3.3091	右京五条三坊四坪	五条二丁目 571-1・572	関西電力送配電(株)	電柱・交線新設、撤去	宅地	R.3.8.18	GL-1.5m 黒褐色土(表土) 0.8m, 黄褐色砂質土(地山) 1.2m以上
60	R.3.3094	左京二条六坊三坪奈良町遺跡	西新在家町 14・15・6・15-8	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.8.20	GL-0.3～0.4m 黒褐色土(表土) 0.3～0.4m以上
61	R.3.3177	右京北辺三坊	西大寺本町 264番1の一部、西大寺新町一丁目 185番7及び 185番8	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.8.24	GL-0.5m 造成土 0.3m, 黒灰色土(耕作土) 0.1m, 灰色砂質土 0.1m, 以下黄灰色粗砂
62	R.3.3162	奈良町遺跡	高畑町 1380番地3	個人	個人住宅新築	宅地	R.3.8.26	GL-0.3～0.5m 黒褐色土(表土) 0.3m, 黄褐色土(地山) 0.3m以上

## 令和3年度実施 立会工事

No.	受理番号	道筋	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
63	R 3.3068	右京二条三坊一・八坪 三坊坊間東小路	菅原東一丁目56街区 1画地地	奈良市長	地区集会所新築	宅地	R 3. 8.26	GL-1.2 m 造成土0.35 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m、灰色砂質土0.1 m、以下灰褐色砂質土(地山)
64	R 3.3203	東一坊坊間路(九条)	西九条町五丁目2-9番地、2-3番地	アサノ不動産(株)	門新築	宅地	R 3. 8.31	GL-0.7 m 造成土0.7 m以上
65	R 3.3080	右京三条三坊十五坪 菅原寺跡(喜光寺跡) 菅原東道跡	菅原町506番2の一部	個人	共同住宅新築	駐車場 青空	R 3. 9. 3	GL-0.3 m 造成土0.3 m以上
66	R 3.3150	右京二条二坊十六坪	西大寺園見町一丁目 2137-64	エスリード(株)	共同住宅新築	宅地	R 3. 9. 6	GL-1.5 m 覆反土1.5 m
67	R 3.3256	左京二条七坊三坪	北魚谷東町	(大) 奈良女子 大学	電気・排水管・ ガス管設備工事	宅地	R 3. 9. 1	GL-1.4 m 暗褐色土(表土)0.1 m、黒褐色土0.6 m、以下黄灰色粘土(地山)
68	R 3.3103	矢田原道跡 (09A-0068)	矢田原町1643	関西電力送配 電(株)	電柱建替	宅地	R 3. 9. 7	GL-2.3 m コンクリート0.1 m、以下黄褐色砂礫(地山)
69	R 3.3402	左京七条四坊十一・ 十二坪 東四坊坊間東小路	東九条町1095-1・2、 1106-4	(株) エスエムシ イ	駐車場造成	水田	R 3. 9.10	GL-0.7 ~ 0.8 m 黒褐色土(耕土)0.2 ~ 0.45 m、灰黄色粘質シルト0.1 m、褐灰色粘質土0.11 ~ 0.25、灰褐色粘質シルト0.15 ~ 0.18 m
70	R 3.3011	新薬師寺	高畑町	(大) 奈良教育 大学	プレハブ建物新築	学校用 地	R 3. 9.15	GL-05 ~ 0.75 m 黒褐色土(表土)0.3 m、赤色煉瓦積基礎0.45 m、以下黄灰色粗砂(地山)
71	R 3.3302	右京七条三坊四坪	七条一丁目390番15(1 号地)	ファースト住建 (株)	個人住宅新築	宅地	R 3. 9.24	GL-0.1 ~ 0.15 m 黒褐色土(耕土)0.1 ~ 0.15 m以上
72	R 3.3303		七条一丁目390番17(2 号地)					GL-0.1 ~ 0.15 m 黒褐色土(耕土)0.1 ~ 0.15 m以上
73	R 3.3304		七条一丁目390番14(3 号地)					GL-0.1 ~ 0.15 m 黒褐色土(耕土)0.1 ~ 0.15 m以上
74	R 3.3305		七条一丁目390番13(4 号地)					GL-0.1 ~ 0.15 m 黒褐色土(耕土)0.1 ~ 0.15 m以上
75	R 3.3024	右京一条二坊十五坪 西陸寺跡	西大寺本町217・215- 3・218-4、西大寺東 町61-4地先	関西電力送配 電(株)	電柱新設・撤去・ 建替・支線新設	道路	R 3. 9.28	16W4W1: GL-2.7 m アスファルト0.1 m、造成土0.6 m、以下地山の黄灰色粘質土1.6 m、灰色粘土0.4 m以上 16WSW1: GL-2.8 m アスファルト0.2 m、砕石0.2 m、黄色灰色砂質土(耕土)0.2 m、黒褐色砂質土0.3 m、褐色砂質シルト0.5 m、以下地山の黄灰色粘質土0.5 m、灰色粘土0.9 m以上
76	R 3.3187	新薬師寺	高畑町	(大) 奈良教育 大学	排水管・電線管 敷設	学校用 地	R 3. 9.28	GL-0.5 m 黄色土(表土)0.4 m、黄灰色土(造成土)0.1 m以上
							R 3. 9.30	GL-0.5 ~ 0.7 m 造成土0.5 ~ 0.7 m
							R 3.10.13	GL-0.4 ~ 1.3 m 造成土0.4 m、以下板石(花崗岩)
							R 4. 1.14	GL-1.0 m GL-0.6 mで奈良達隣東西棟建物(兵舎) GL-0.8 m 造成土0.4 ~ 0.6 m、以下奈良達隣南北棟建物(便所)確認
77	R 3.3292	左京五条六坊三坪 五条条間南小路	西木辻町110-6の一部	(株) F&S	店舗新築	駐車場	R 3. 9.29	GL-1.0 m 造成土1.0 m以上

No.	受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
78	R 2.3352	左京四条六坊十二坪 奈良町道路	南城戸町65番、66番2、 66番3	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.9.30	GL-0.5 ~ 0.7 m 黒褐色土(表土) 0.5 ~ 0.7 m以上
79	R 3.3278	東三坊大路(八条)	東九条町504番1・504 番2・505番・507番の 一部(1・2号棟)	(株)アーネスト ワン	分譲住宅新築	宅地	R 3.9.30	1号棟:GL-0.5 m 黒褐色土(表土) 0.35 m、褐灰色土0.15 m以上 2号棟:GL-0.1 m 黒褐色土(表土) 0.1 m以上
80	R 2.3294	左京七条三坊十三坪	東九条町1003-7、 1003-6	個人	個人住宅増築	宅地	R3.10.1	GL-0.23 m コンクリート0.06 m、造 成土0.17 m、以下暗灰色土(表土)
81	R 3.3247	古市道路	古市町1191番7	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.10.4	GL-0.45 m 造成土0.45 m以上
82	R 3.3306	右京一条三坊十一坪	西大寺芝町一丁目 2537-1	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.10.4	GL-0.35 m 砂石0.1 m、黒褐色土(表 土)0.25 m以上
83	R 3.3355	右京三条四坊十六坪	宝東四丁目688番2、 689番各一部	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.10.21	GL-0.5 m 造成土0.4 m、灰白色粘 着シルト(地山)0.1 m以上
86	R 3.3174	右京五条三坊十坪	平松二丁目264番60	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.10.26	GL-0.6 m 造成土0.5 m、黄灰色粘 土(地山)0.1 m以上
87	R 3.3213	西四坊坊間路(七条)	七条西町一丁目627- 41	一建設(株)	個人住宅新築	宅地	R 3.10.28	GL-0.5 ~ 1.4 m 黄褐色粘質土(造 成土)0.8 m、黄灰色粘土(地山) 0.2 m、浅黄色粘土0.2 m、明黄褐 色シルト0.1 m、黄色粘土0.1 m以 上
88	R 3.3240	右京七条四坊十六坪	六条西四丁目1492-12	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11.1	GL-0.7 m 明黄褐色砂質土(造成土) 0.4 ~ 0.5 m、明黄褐色粘質土(地山) 0.3 m以上
89	R 3.3277	左京二条七坊北塚多 間成隣接地	川土町563-14 ~ 562	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R 3.11.1 R 3.11.2	GL-0.8 ~ 1.0 m A地点:アスファ ルト0.03 m、造成土0.6 m、灰色土 0.17 m以上 B地点:アスファルト0.03 m、造成 土0.97 m以上 C地点:GL-0.9 m アスファルト0.03 m、造成土0.6 m、灰色土0.15 m、 黄褐色土0.2 m、明黄褐色粘質土 0.1 m以上
90	R 3.3323	右京二条四坊十五坪	宝東四丁目216番1の 一部、216-2	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11.2	GL-0.2 ~ 0.3 m 造成土0.2 ~ 0.3 m以上
91	R 3.3287	二条条間路(西四坊)	足田町一丁目28-1	関西電力送配 電(株)	電柱・支線新設	宅地	R 3.11.5	GL-2.6 m 造成土0.5 m、灰色粘質 土(耕土)0.1 m、黄灰色粘質シル ト(田耕土)0.2 m、灰黄褐色中粒 砂(地山)0.2 m、灰色シルト0.4 m、 灰色粘土1.35 m以上
92	R 3.3270	右京一条四坊六坪	西大寺野神町二丁目 1748番6	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11.5	GL-0.5 ~ 0.7 m 造成土0.2 m、褐 灰色砂質土(耕土)0.1 m、灰白色 砂質土0.1 m、黄褐色砂質土0.1 m、 浅黄色砂質土0.1 m、明黄褐色砂質土 (地山)0.1 m以上
93	R 3.3190	森本窪之庄道路	窪之庄地内	奈良市企業局	下水道工事	灌路	R 3.11.9	GL-1.5 m アスファルト0.2 m、土壌 改良0.2 m、造成土0.4、耕土0.8 m以上

## 令和3年度実施 立会工事

No.	受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
94	R 3.3293	東七坊坊間 東小路(二条)・奈良町遺跡	南半田東町9番、10番2	(株)車屋代表取締役 正木麻文	共同住宅新築	宅地	R 3.11.3	GL-1.8 (X1・Y1) ~ 2.0 m (X3・Y3) 黒褐色土 (造成土) 0.5 ~ 0.8 m
							R 3.11.10	GL-1.7 m (X3・Y1) 黒褐色土 (造成土) 0.5 m, 灰黄色砂質土 (地土) 0.2 m, 灰褐色砂質土 (地土) 0.2 m, 黄灰色粘質土 0.2 m, 明黄褐色砂礫 (地山) 0.6 m以上
							R 3.11.11	GL-1.4 (X5・Y3) ~ 1.5 m (X6・Y3) 造成土 0.2 m, 灰黄色砂質土 0.2 ~ 0.3 m, 灰褐色砂質土 0.4 m, 黄灰色粘質土 0.1 ~ 0.3 m, 暗黄灰色粘質土 0.2 ~ 0.5 m
95	R 3.3310	右京六条四坊十一坪	六条二丁目 1055番4、1135番、1136番の一部	個人	共同住宅新築	宅地	R 3.11.12	GL-0.6 ~ 0.8 m 淡黄灰色砂質土 (地山) 0.6 ~ 0.8 m以上
96	R 3.3248	左京五条七坊四坪	中辻町 72-4、74-3	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11.15	GL-0.25 m 造成土 0.1 m, 黒褐色土 (表土) 0.15 m以上
97	R 3.3246	七条桑間路 (東三坊)	東九条町~八条一丁目	奈良市企業局	水道既設管の入替工事	道路	R 3.11.17	GL-1.55 m アスファルト 0.05 m, 造成土 0.8 m, 黒灰色土 (耕土) 0.3 m, 暗灰色土 0.4 m以上
							R 3.11.29	GL-1.3 m アスファルト 0.05 m, 造成土 0.3 m, 黒褐色土 (表土) 0.25 m, 灰色土 0.3, 灰色砂 (河川堆積) 0.4 m以上
98	R 3.3268	右京二条四坊二坪	若葉台四丁目 286番9・286番10	一建設 (株)	分譲住宅新築	宅地	R 3.11.19	GL-0.5 m 造成土 0.2 m以上
99	R 3.3155	鹿野園石器散布地石置寺跡	鹿野園町 地先	奈良市企業局	下水道築造工事	道路	R 3.11.24	GL-1.1 m アスファルト 0.2 m, 砂石 0.1 m, 造成土 0.8 m以上
							R 3.12.1	GL-2.1 m アスファルト 0.2 m, 砂石 0.1 m, 造成土 1.5 m, 黄褐色粘質土 0.1 m, 黒灰色粘質土 0.1 m
							R 3.12.3	GL-1.75 m アスファルト 0.1 m, 砂石 0.1 ~ 0.25 m, 造成土 0.7 ~ 0.95 m, 以下青灰色シルト (地山)
100	R 3.3375	左京五条七坊八坪 奈良町遺跡	川之上突抜南方町 9番、10番、11番1	(株)車屋	共同住宅新築	宅地	R 3.11.25	GL-1.35 m 黒褐色土 (表土) 0.7 m, 黄灰色粘土 (地山) 0.65 m以上
101	R 3.3386	遺物散布地隣接地	古市町 272番2	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11.25	GL-0.15 m 造成土 0.15 m以上
102	R 3.3279	左京六条二坊一坪	八条町 369番1、369番2、372番1、375番1、376番1、379番4	(株)モンペルホールディングス	店舗新築	宅地	R 3.11.26	GL-1.3 m 造成土 0.9 m, 灰色粘土 0.4 m
							R 3.11.30	GL-1.6 m 造成土 0.9 m, 灰色粘土 0.4 m, 灰褐色砂質土 (包含層) 0.2 m, 黄灰色粘土 (地山) 0.1 m以上
							R 4.1.26	GL-1.45 m 造成土 1.45 m
103	R 3.3207	西一坊坊間 東小路(六条)	六条町 209-1	関西電力送配電 (株)	電柱・地支線新設	宅地	R 3.11.30	GL-2.7 m 黒灰色土 (耕土) 0.05 m, 造成土 0.7 m, 以下黄灰色土 (地山)
104	R 3.3363	右京一条四坊十四坪	西大寺新池町 1837番20	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.12.1	GL-0.25 m 造成土 0.25 m以上
105	R 3.3230	左京二条六坊一坪	法蓮町 1000	(学)奈良育英学園	保育室増築・大規模改修工事	宅地	R 3.12.2	GL-1.1 m 造成土 0.2 m, 黒褐色土 0.26 m, 灰色粘質土 0.26 m, 灰色粘質土 0.14 m, 灰色粘質土礫含 0.5 m, 以下灰色砂礫 (地山)

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
106	R 3.3373	左京一条三坊七坪	法華寺町 1305 番 1	個人	宅地・青空駐車場造成	青空駐車場	R 3.12.3	GL-0.9 ~ 1.0 m 黒褐色土(耕土) 0.5 m、黄褐色土 0.2 m、以下黄褐色土(地山) 0.2 m
107	R 3.3235	左京二条七坊北坪	手貝町 20 番地 5	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.12.6	GL-0.7 ~ 0.9 m 造成土 0.5 ~ 0.9 m、耕土 0.2 m以上
108	R 3.3255	左京二条六坊十一坪	北魚屋西町	(大) 奈良女子大学	作業場増築	宅地	R 3.12.6	GL-0.7 m 造成土 0.7 m以上
109	R 3.3141	右京三条四坊二坪	菅原町 地先	奈良市企業局	下水道築造工事	道路	R 3.12.6	GL-2.1 m 砕石 0.55 m、造成土 1.15 m、灰色砂礫(地山) 0.25 m以上
							R 3.12.9	GL-1.9 m 造成土 1.4 m、旧耕土 0.25 m、灰色土 0.15 m、淡青灰色粘質シルト(地山) 0.1 m以上
110	R 2.3399	菅原遺跡隣接地	足田町三丁目 3-11 ~ 5丁目 465	大阪ガス(株)	ガス管施設工事	道路	R 3.12.14	GL-0.8 m アスファルト 0.05 m、砕石 0.1 m、灰色礫土(造成土) 0.25 ~ 0.35 m、黄褐色粘質土・粗砂・礫混じり(造成土) 0.3 ~ 0.4 m
111	R 2.3290	右京四条一坊十五坪	四条大路五丁目 134 番の一部	個人	宅地造成・共同住宅新築	水田	R 3.12.13	GL-0.5 m 耕作土 0.3 m、灰色砂質土 0.5 m
112	R 2.3423	一条北辺条間小路	西大寺赤田町一丁目 659-12	関西電力送配電(株)	電柱・支線継替	宅地	R 3.12.14	GL-2.85 m 造成土 0.65 m、耕作土 0.1 m、灰色砂質土 0.3 m、以下黄褐色粘質土(地山) 1.8 m
113	R 3.1106	史跡大安寺旧境内石橋瓦葺跡	大安寺二丁目 18-1	(宗) 南都大安寺	既存塀の建替え	寺院	R 3.12.14	竹垣撤去、塀削は行われず
							R 3.12.20	0.6 m 淡黒灰色土(表土) 0.2 m、灰色土 0.3 m、灰褐色土 0.3 m、淡灰褐色土(盛土) 0.25 m
114	R 3.1086	史跡大安寺旧境内石橋瓦葺跡	東九条町 1353 番 1、1353 番 2	国土交通省	地質調査・地下水位観測	史跡整備地	R 4.1.11	GL-0.5 m 盛土 0.25 m、黒灰色土(耕作土) 0.25 m
115	R 3.3212	新薬師寺	高畑町	(大) 奈良教育大学長	電気線用配管工事	学校用地	R 4.1.12	GL-0.6 m A・B 地点: 黒褐色土 0.6 m以上 c 地点: コンクリート平板 0.08 ~ 0.1 m、黄褐色砂 0.15 m、砕石 0.15 m、黄褐色土(造成土) 0.2 m以上
							R 4.2.7	GL-0.3 m コンクリート平板 0.08 ~ 0.1 m、黒褐色粗砂(盛土) 0.07 m、コンクリート 0.05 m、灰色粗砂(盛土) 0.1 m以上
							R 4.2.8	GL-0.8 m №②と№③の門支柱掘形: GL-0.45 m で小学校敷地東面にて奈良連絡時の南北道路西縁石と考えられる花崗岩製縁石(8 個)及び坂石(3 個)確認、石材は教育大収蔵庫西側へ移動
116	R 3.3212	新薬師寺	高畑町	(大) 奈良教育大学長	電気線用配管工事	学校用地	R 4.2.15	GL-0.4 ~ 0.8 m 黒褐色土 0.7 m、黒灰色土(耕作土) 0.1 m以上 奈良連絡時の南北道路西縁石と考えられる花崗岩製縁石(8 個)及び坂石(3 個)確認、石材は教育大収蔵庫西側へ移動
117	R 3.3297	左京二条五坊一坪	法蓮町 316 番 15、316 番 16	個人	個人住宅新築	宅地	R 4.1.15	GL-0.3 m 造成土 0.1 m、黒褐色土(表土) 0.2 m、以下淡茶褐色土
118	R 3.3346	左京三条四坊十坪	大宮町五丁目 2-18	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	R 4.1.17	GL-1.2 m 造成土 0.5 m、灰色土 0.4 m、灰色粗砂 0.3 m以上
119	R 3.3378	朝田城	都祁友田町 1450 番	個人	個人住宅新築	宅地	R 4.1.27	GL-0.3 造成土 0.3 m



## 令和3年度実施 立会工事

No.	受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
120	R 3.3299	野神古墳	桂木町 295 番 2	関西電力送配電(株)	電柱・支線建替	宅地	R 4.1.131	GI-2.8 m 黒褐色土(表土) 0.2 m, 黒灰色砂礫土(地盤改良土) 0.5 m, 淡黄灰色土(造成土) 0.7 m, 以下灰色粘土
121	R 3.3359	平城京南方遺跡	北之庄町 688 番 1 の一部	(特非) みつわ会	生活介護施設新築	水田	R 4.2.2	GI-0.85 m 黒灰色土(耕作土) 0.25 m, 灰色土 0.1 ~ 0.26 m, 褐色土 0.16 ~ 0.2 m, 茶褐色土 0.13 m, 以下地山の褐色粘土 0.2 m, 黄灰色土 0.2 m, 灰色粘砂 0.07 m, 黄褐色土
122	R 3.3236	遺物散布地(水越神社)	邑地町 3168	(宗) 水越神社	文化財防犯工事	境内地	R 4.2.4	GI-4.15 m 黒褐色土 0.2 m, 淡褐色砂質土 3.95 m 以上
123	R 3.3532	左京四条七坊一坪 奈良町遺跡	元林院町 5	(株) 中川政七商店	店舗新築	宅地	R 4.2.9	工事先行: 顔末書掘出 GI-0.4 m 黒色土 0.1 m, 漆喰 0.05 m, 黒褐色土(粘土混)
124	R 3.3461	新薬師寺 奈良連絡路	高畑町	(大) 奈良教育大学	高畑団地校内(管渠)改修	学校用地	R 4.2.15	GI-0.4 m 造成土 0.4 m 以上
125	R 3.3511	左京二条六坊北部	法蓮町 1702-16	(株) サンドワッグ	看板設置	宅地	R 4.2.17	GI-1.5 m アスファルト 0.1 m, 造成土 0.1 m, 以下地山の黄褐色砂質土 0.4 m 以上
126	R 3.3457	左京二条七坊北部	川上町 593-14	(株) 日本中央住販	分譲住宅設置	宅地	R 4.2.17	GI-0.3 m 盛土 0.15 m, 黒褐色土(表土) 0.15 m 以上
127	R 3.3500	右京二条四坊一坪	西大寺 2061 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	R 4.2.21	GI-0.25 ~ 0.35 m 造成土 0.25 ~ 0.35 m
128	R 3.3422	右京五条四坊九坪	平松三丁目 529 番 24	個人	個人住宅新築	宅地	R 4.2.22	GI-0.8 m 造成土 0.25 m 黄白色粘質土 0.55 m 以上
129	R 3.3431	ゼニヤクが遺跡	麩生町 1864-2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R 4.2.26	基礎掘削なし
130	R 3.3283	古市城跡	古市町 1846-47	個人	事務所付個人住宅新築	宅地	R 4.3.8	GI-0.9 m 造成土 0.9 m 以上
132	R 3.3536	一条北辺京極路	西大寺北町四丁目 415-2	個人	個人住宅新築	宅地	R 4.3.10	GI-0.3 m 造成土 0.1 m, 明黄褐色土粘質土 0.3 ~ 0.5 m
133	R 3.1146	史跡大安寺田境内石橋瓦葺跡	東九条町 1302-2 他	奈良市教育委員会	案内版, 解説板の設置	市有地	R 4.3.11	GI-0.6 m 盛土 0.5 ~ 0.6 m
134	R 3.3518	右京七条三坊三坪	七条一丁目 390 番 16	個人	個人住宅新築	宅地	R 4.3.16	GI-0.3 ~ 1.0 m 黒褐色砂質粘土(表土) 0.1 ~ 0.2 m 以下黄色灰色砂質粘土, 青灰色粘土
135	R 3.3408	南紀寺遺跡 石灘寺	白毫寺町	(大) 奈良教育大学長	電線管・給水管の敷設	学校用地	R 4.3.17	GI-0.3 ~ 0.5 m 暗灰色砂質粘土(耕土) 0.15 ~ 0.2 m, 灰色粘土 0.15 ~ 0.3 m
136	R 3.1118	史跡大安寺田境内・石橋瓦葺跡	大安寺四丁目 3 番 19 号	個人	住宅(ガレージ)の除去及び新築	宅地	R 4.3.17	GI-0.1 m 暗黄褐色砂質粘土 0.1 m, 以下黄褐色砂質粘土(地山)
137	R 3.1186	史跡大安寺田境内石橋瓦葺跡	東九条町 1342 (西塔跡)	奈良市教育委員会	解説板の設置	市有地	R 4.3.18	GI-0.5 m 盛土 0.5 m
138	R 3.3576	左京四条六坊一坪	北向町 29-1, 29-2	個人	店舗付住宅新築	宅地	R 4.3.18	GI-0.3 m 暗灰色砂質粘質シルト 0.3 m
139	R 3.3492	右京七条四坊四坪	七条西町一丁目 627 番 133	個人	個人住宅新築	宅地	R 4.3.28	GI-0.5 m 暗黄褐色粘砂質粘質土 0.2 ~ 0.3 m, 以下青灰色粘土(地山)
140	R 3.3041	左京二条七坊十三坪	南半田東町3番地	個人	個人住宅新築	宅地	R 4.3.31	GI-0.15 m 黒褐色土 0.15 m 以上

なお、表中の道路名のうち、平城京跡については名称を略し、○京○条○坊、もしくは○条大路、○坊大路等で示した。

---

## 第2章 令和3(2021)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

---



# 令和3（2021）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

## 1. 展示

### A 常設展示

対象：一般

会期：令和3年4月1日（木）～4月30日（金）  
6月1日（火）～8月24日（火）  
令和3年11月15日（月）～12月25日（金）  
令和4年1月4日（月）～3月31日（水）  
（148日間、5月1日（土）～5月31日（月）は、  
新型コロナウイルス感染拡大防止の為、閉室）

場所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣旨：埋蔵文化財の展示を通じ奈良市の歴史を紹介。  
旧石器～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡  
ごとに展示。

### B 奈良市教育委員会秋季特別展

#### 「帯解の古墳時代とワニ氏」

対象：一般

会期：令和3年9月6日（月）～11月5日（金）  
（60日間）

場所：埋蔵文化財調査センター展示室および同室前  
ロビー

趣旨：奈良市街地南東部に位置する帯解地域には、多  
くの古墳や遺跡がある。これらは古代氏族ワニ  
氏にかかわるものとして、古くから関心を集め  
てきたが、この地域の調査研究をまとめたもの  
は少なく、その実態は不明な点が多い。そこで、  
今回の展示では「帯解」地域に注目し、ワニ氏  
が成立するための基盤がどのようなものであ  
ったかを展示を通して説明した。



秋季特別展「帯解の古墳時代とワニ氏」

なお、今回の展示では市指定文化財である  
ベンショ塚古墳出土品を初めて一挙公開した。

観覧者数：1,345名

その他：案内を「しみんだより」9月号と奈良市役所  
のホームページに掲載。

・宣伝用のチラシの作成・配布。

・展示パンフレット・リーフレットの作成。

### C 春季発掘調査速報展

「秋篠阿弥陀谷横穴墓群と平城京跡（左京七条一坊七  
坪）と藤澤瓦屋の調査」

対象：一般

会期：令和4年3月1日（火）～3月31日（木）  
（26日間）

場所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー

趣旨：発掘調査の最新成果について展示紹介。本年度  
は令和元年度に秋篠町で新たに発見された飛鳥  
時代の秋篠阿弥陀谷横穴墓群の調査、令和2年  
度に柏木町で実施した平城京左京七条一坊七坪  
の調査、平成30年度に平松一丁目目で試掘調査  
を、翌令和元年度に発掘調査を実施し、近世か  
ら近代にかけての遺跡を確認した藤澤瓦屋の  
調査の、3箇所の発掘調査成果についてパネル  
や遺物の展示をして紹介した。なお、藤澤瓦屋  
については、ご子孫からの寄贈資料も展示・紹  
介した。

観覧者数：375名

その他：案内を「しみんだより」2月号と奈良市役所  
のホームページに掲載。



春季発掘調査速報展

表1 月別観覧者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
81	0	109	105	87	476	615	333	110	71	174	375

D 年間観覧者数 2,536名 (208日間)。

月平均 211名。

## 2. 施設見学の受け入れ

### 埋蔵文化財調査センター施設見学

- |                                    |  |
|------------------------------------|--|
| (1) 対 象:奈良市立辰市小学校生徒 43名            | 期 日:令和3年6月18日(金)                               |
| (2) 対 象:奈良市立帯解小学校生徒 60名            | 期 日:令和3年10月14日(木)・25日(月)                       |
| (3) 対 象:天理市山の辺の道ボランティアガイドの会<br>19名 | 期 日:令和3年10月27日(水)                              |
| (4) 対 象:奈良大学学生 60名                 | 期 日:令和3年11月22日・29日、12月6日・13日<br>(すべて月曜日、各回15名) |

## 3. 講演会 教室の開催

### A 埋蔵文化財講演会

対 象:一般

期 日:令和3年11月3日(水・祝) 13:30～16:30

内 容:特別展のテーマである古墳時代の帯解について理解を深めてもらうために、ベンシヨ塚古墳の発掘担当者と古墳時代研究者を講師に迎え、専門的な講演会を開催した。

参加者:23名

会 場:奈良市埋蔵文化財調査センター講座室  
・木村 理(奈良文化財研究所アソシエイトフェロー)  
「ベンシヨ塚古墳とその時代」

・森下 浩行(埋蔵文化財調査センター 再任用職員)  
「ベンシヨ塚古墳の発掘秘話」

その他:募集案内を市役所ホームページに掲載。

### B 親子考古学教室

対 象:奈良市内の小学4～6年生の児童とその保護者

期 日:令和3年1月29日(土)

内 容:富雄丸山古墳で現地学習ののち、埋葬施設の発掘体験をおこなった。

参加者:11名

会 場:富雄丸山古墳発掘調査現場

その他:募集案内を「しみんだより」1月号と奈良市役所のホームページに掲載。



埋蔵文化財講演会



親子考古学教室

## 4. 市民考古学講座

対象：一般

開催期間：令和3年8月4日(水)～令和4年3月2日(水)  
全11回(表2)

内容：市民考古学サポーター協力のもと、埋蔵文化財調査センター職員が講師を務める講座。生涯学習の一環として体系的に考古学を学び、文化財ボランティア活動を実践する際に必要な基本的知識と技能を身につけ、地域における歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍できる人材の育成が目的。

受講者数：16名

その他：案内を「しみんだより」7月号と奈良市役所のホームページに掲載。

	日時	講座名
第1回	8月4日	開講式・オリエンテーション 考古学って何？・旧石器・縄文時代の基礎知識
第2回	8月18日	弥生時代の基礎知識
第3回	9月1日	古墳時代の基礎知識
第4回	10月6日	遺物整理(洗浄と拓本実習)
第5回	10月20日	古代の土器
第6回	11月10日	奈良の都 平城京
第7回	11月24日	古代の瓦
第8回	12月8日	発掘調査体験(屋外実習)
第9回	1月12日	奈良町と中近世の土器・陶磁器
第10回	2月22日	発掘調査と遺物整理
第11回	3月2日	土器類の分類整理(実習)・閉講式

## 5. 市民考古サポーターの活動支援

### 市民考古サポーター事業

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

登録総人数：103名

活動開始：令和3年7月～

(新型コロナウイルス感染拡大防止のため、一部活動中止)

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、

展示解説、体験学習の補助などに参画。

月平均活動人数：97名

## 6. 体験学習・実習の受け入れ

### 富雄丸山古墳現地学習

対象：地元・一般

期日：地元 令和3年12月25日(土)  
一般 令和4年1月8日(土)～10日(月)、13日(木)  
～17日(月)、20日(木)～24日(月)の  
14日間

場所：富雄丸山古墳発掘調査現場

内容：発掘調査の方法や安全のための講習を受講後に、発掘体験を実施。調査を始める前には必ず現況説明と、仕事の内容を説明し、終了時には出土遺物の解説・遺構の説明をおこなった。

その他：・地元参加者の募集は自治連合会長が協力。

・一般参加者の募集・宣伝・中止連絡等は奈良市観光協会に委託。

・奈良市役所のホームページに掲載。

参加者数：260名



富雄丸山古墳現地学習

## 7. 文化財学習キットの貸出し

市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦等の実物資料の貸出しキットで解説書付き。小・中学校の社会科学習・郷土学習の補助教材に利用でき、埋蔵文化財調査センターを見学する小・中学生にも「触れることのできる文化財」として使用する。

対象：奈良市内の小・中学校

内容：①～⑥の6キット

- ①縄文土器と弥生土器
- ②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁
- ③古墳時代の埴輪と須恵器
- ④奈良時代の土器（A・Bの2セットあり）
- ⑤奈良時代の瓦-軒丸瓦・軒平瓦

⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

貸出・利用

- (1) 大安寺西小学校 社会科の歴史学習  
期日：令和3年6月8日～16日  
キット：①・②
- (2) 育英中学校 学校の歴史学習  
期日：令和3年10月19日～10月26日  
キット：①・②
- (3) 平城小学校 社会科授業  
期日：令和3年12月7日～23日  
キット：⑤

## 8. 職員の派遣（講師など）

奈良市生涯学習財団主催 奈良ひとまち大学授業

期日：令和4年1月28日（金）

場所：奈良市西部生涯学習スポーツセンター

派遣人数：1名

演題：「富雄丸山古墳の調査」

## 9. 出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している木製品遺物の化学的保存処理を計画的におこない恒久的な保存をおこなった。

（保存処理資料）平城京跡出土木製品 26 点（斎車 6 点、

笹塔婆 2 点、檜扇 2 点、人形 6 点、刷毛 1 点、紡織具 1 点、漆器皿 1 点、漆器椀 1 点、しゃもじ 1 点、独楽 1 点、杓子形木製品 1 点、木偶 1 点、板状木製品 1 点、棒状木製品 1 点）。

## 10. 保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可をおこなった。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A 遺物などの貸出9件（表3）

B 写真などの貸出・提供・掲載許可32件（表4）

C 学術研究等に関わる資料閲覧8件（表5）

表3 遺物などの貸出

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	R3.4.1～ R4.3.31	平城京跡出土木簡（模造品）0点（磁土上木簡1点、月借銭土上木簡1点、豹皮分銭付札1点、西皮御田侍収函指木簡1点、北宮封緘木簡1点、衛府津鹿付札1点、祿布付札1点、梅花津土上木簡1点、造酒司符1点、瓦書土上木簡1点）、分銅（模造品）1点（平城京跡167次調査出土）
2	国土交通省近畿地方整備局 国営飛鳥歴史公園事務所	平城宮いざない館に展示	R3.4.1～ R4.3.31	元興寺田圃内第7次出土軒丸瓦1点、軒平瓦1点
3	大和ハウス工業株式会社 本店長	大和ハウスグループふらい共創センターで展示	R3.4.1～ R4.3.31	平城京727次調査出土井戸SE294井戸棒25点

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
4	富宮歴史博物館	富宮歴史博物館の三重とこわか国体・三重とこわか大会記念特別展「富宮平安玉種鏡技一弓・馬・駒・鷹・相撲一」に展示	R 3. 7.13 ~ R 3.12.10	平城京左京三条二坊十二坪出土墨書土器須恵器杯A「左相撲」(平城京跡第28次)1点、須恵器杯A「相撲所」(平城京跡第28次)1点、須恵器杯A「相撲」(平城京跡第73次)1点、須恵器杯or皿「相撲所」(平城京跡第73次)1点、須恵器杯B「相撲所」(平城京跡第28次)1点、須恵器杯B「左相口/助」(平城京跡第28次)1点
5	大和ハウス工業株式会社	仮称大和ハウスグループ研修棟(令和3年9月開館予定)において展示公開	R 3. 7. 8 ~ R 4. 3.31	平城京跡第727次(左京九条三坊六坪)出土土師器壺1点・輪A1点・蓋B1点・蓋E1点・皿C1点、須恵器杯B1点・蓋M1点・蓋L2点・平瓶1点、黒色土器杯A1点、緑釉陶器皿1点、土馬1点
6	四条順市教育委員会教育長	特別展「天下の支配者」三好殿一考古学からみた天下人三好長慶の軌跡と飯盛城一へ展示	R 3. 9. 7 ~ R 3.12.24	多聞城出土美濃焼小皿1点・白磁皿1点・青磁皿1点・銭貫3点・土師器皿2点・掻鉢2点・瓦貫土器1点・軒丸瓦2点・軒平瓦3点、新薬師寺出土台付皿1点、HJ 第531次調査出土台付皿1点、HJ 第559次調査出土台付皿1点
7	大阪歴史博物館	大阪歴史博物館の特別展「難波をうたう一萬葉集と考古学一」に展示	R 3. 9.21 ~ R 3.12.10	平城京跡第93次出土唐三彩繪花杯1点、平城京跡第127次出土唐三彩杯2点、平城京跡第578次出土唐三彩三足1点、西大寺跡第25次出土イヌラム陶器1点、墨書須恵器杯「皇前東朝」1点、史跡大安寺旧境内第133次出土唐三彩陶枕25点
8	山口市教育委員会教育長	鉾銭司・陶地区文化財総合調査事業特別企画展「周防鉾銭司と古代の鉾銭」において展示	R 3.10.21 ~ R 4. 2. 4	市指定文化財平城京左京六条一坊十六坪出土神功園寶鉾銭軸物20点、平城京左京三条四坊十二坪出土と同園寶鉾銭1枚1点、平城京右京二条三坊四坪出土無文銀銭1点
9	奈良国立博物館長、日本経済新聞社文化事業局長、NHKエンタープライズ放送総支社長	奈良国立博物館 東新館・西新館で開催する特別展「大安寺のすべてー天平のみほとけと祈りー」に展示	R 4. 2.15 ~ R 4. 7.15	「奈良市指定文化財 杉山古墳出土家形埴輪附輪穴一拵」のうち1点、大安寺西塔出土風鐸(相輪用)2点、大安寺西塔出土風鐸片(隅輪用)5点、大安寺西塔出土水滸片1点、大安寺西塔出土露盤片2点、大安寺金堂・講堂付近出土榿梁15点、大安寺南大門出土塑像片2点、大安寺西塔出土塑像片2点、大安寺出土大官大寺式軒瓦(6231 A-6661 B)各1点計2点、大安寺出土凸面布目平瓦1点、大安寺出土平城宮系軒瓦(6304 D-6664 A)各1点計2点、大安寺出土大安寺式軒瓦(6138 Ca-6712 A)各1点計2点、大安寺西塔主要軒瓦(大安寺S1 Aa-6712 B)各1点計2点、大安寺出土金堂北側出土施軸垂木瓦6点、大安寺南大門出土大形平瓦(軒平瓦6716 G)1点、大安寺講堂出土隅木蓋瓦2点、大安寺杉山瓦窯出土窯体片(軒平瓦6712 A)1点、大安寺杉山瓦窯灰原出土滑着瓦1点、大安寺出土奈良三彩7点、大安寺杉山古墳周濠出土須恵器淨瓶・水瓶6点、大安寺出土墨書土器(「大安寺」・「大寺」・「大安寺左右酒」・「東院」・「大家」・「大二三井」・「大二」)各1点計7点、大安寺出土木簡(付札・願葉)各1点計2点、大安寺杉山古墳周濠出土円盤状土製品1点、大安寺南大門出土台座形土製品2点、大安寺出土半球状土製品15点、大安寺金堂・講堂付近出土ガラス製品6点、大安寺金堂・講堂付近出土金糸2点、大安寺金堂・講堂付近出土水晶製品13点、大安寺金堂・講堂付近出土銀製品53点、大安寺金堂・講堂付近出土唐三彩陶枕6点、大安寺金堂・講堂付近出土奈良三彩陶枕1点、大安寺経楼出土平安時代後期の軒丸瓦(大安寺60 A・77 A)各1点計2点、大安寺出土鎌倉時代後期の軒瓦(大安寺173 A・174 A・274 A-274 B)2組各1点計4点、大安寺出土奈良時代末の緑釉陶器(輪・羽釜)各1点計2点、大安寺出土平安時代初期の陶磁器(中国産白磁碗1点、緑釉陶器碗1点・皿1点・蓋1点・香炉1点、灰釉陶器皿2点)計7点



表4 写真などの貸出・提供・掲載許可

	申請日	申請機関 (申請者)	目的	内容	その他
1	R.3.4.1	奈良大学	奈良大学広報誌への掲載および奈良大学ホームページでの広報誌公開	航空レーザーで計測した富雄丸山古墳の赤色立体地図1枚	貸出・掲載許可
2	R.3.4.8	産経新聞奈良支局	ウツナベ古墳の調査成果を記事で紹介	ウツナベ古墳墓石の襷間の灰輪陶器出土状況写真1枚	貸出・掲載許可
3	R.3.4.20	光村推古書院株式会社社長	中日新聞と東京新聞に連載していた「かみいひ古代」を書籍にまとめ掲載	赤田9号墓円筒形陶棺A写真、赤田9号墓円筒形陶棺A(蓋なし)写真、赤田9号墓亀甲形陶棺写真各1枚	貸出・掲載許可
4	R.3.5.1	周福城出版社社員	『季刊 韓国 の考古学』52号に掲載	富雄丸山古墳の発掘調査 - 第3次調査 - 写真1枚	貸出・掲載許可
5	R.3.5.10	宮内庁書陵部陵墓課長	『書陵部紀要』第73号に掲載	奈良市のウツナベ古墳トレンチ平面図・断面図1枚	貸出・掲載許可
6	R.3.5.12	公益財団法人元興寺文化財研究所理事長	奈良町の歴史とゆかりの文化財を紹介するための印刷物(『仮)奈良町の南玄開』)へ掲載	元興寺田境内第47次調査礎石出土状況写真1枚	掲載許可
7	R.3.5.20	鈴鹿市教育長	鈴鹿市考古博物館夏季企画展「TEN-PYO collection ～天平衣袋の再現～」パネル等に掲載	史跡大安寺田境内第57次調査出土漆砂冠写真、漆砂冠復元イメージ写真、平城京内出土横櫛と壺蓋写真各1枚	貸出・掲載許可
8	R.3.5.25	大阪歴史博物館館長	大阪歴史博物館特別展『難波をうたうー万葉集と考古学ー』の広報・展示パネル及び関連図書への掲載	平城京跡出土唐三彩、西大寺跡出土イスラム陶器、西大寺跡出土土書着道志器杯「皇前東朝」、史跡大安寺田境内出土唐三彩陶枕、史跡大安寺田境内出土唐三彩陶枕細部破損写真各1枚	貸出・掲載許可
9	R.3.6.4	(株)スタジオタッククリエイティブ	児童書『マンガで楽しむ歴史図鑑「はにわ」』へ掲載	杉山古墳出土土形埴輪写真1枚、菅原東邊跡埴輪群写真1枚	貸出・掲載許可
10	R.3.6.8	奈良文化財研究所員	報告書『平城宮第一次大極楽院の復原 研究』(仮)へ掲載	史跡大安寺田境内第110次遺構平面図1枚	貸出・掲載許可
11	R.3.8.6	山口市教育委員会教育長	鏡鏡司・陶地区文化財総合調査事業特別企画展「周防鏡鏡司と古代の鏡鏡」のリーフレット・パンフレットに掲載	平城京右京二条三坊四坪出土無文銅鏡写真1枚、平城京左京三条四坊十二坪出土和同開珎跡鏡写真1枚、奈良市指定文化財 平城京左京六条一坊十六坪出土神功開宝銅鏡遺物写真1枚	貸出・掲載許可
12	R.3.8.16	四条幡市教育委員会教育長	特別展「天下の支配者」三好殿一考古学からみた天下人三好長慶の軌跡と飯盛城一」のパネル展示および図録への掲載	多聞城跡発掘調査地全景(西から)1枚・出土土器1枚・創建軒瓦1枚・創建軒平瓦1枚、平城京跡・新薬師寺出土土台付皿集合写真1枚	貸出・掲載許可
13	R.3.8.30	大和ハウス工業株式会社みらい価値共創センター理事	みらい価値共創センター建設地の調査で確認された遺構をホームページ・webサイトで公開	『平城京左京九条三坊五六坪 発掘調査概要報告』裏表紙、3頁図3・図4各1枚	貸出・掲載許可
14	R.3.9.9	株式会社 八木書店出版部 代表取締役	鈴木靖民監修『古代日本対外交流史事典』に掲載	西大寺跡出土土書道志器杯「皇前東朝」写真1枚	貸出・掲載許可
15	R.3.9.10	株式会社 ジャパン通信情報センター 代表取締役	『文化財発掘出土情報』に掲載	現地説明会資料『富雄丸山古墳の発掘調査 - 第4次調査 -』掲載の文章および写真図版7点	貸出・掲載許可

	申請日	申請機関 (申請者)	目的	内容	その他
16	R 3. 9.16	産経新聞奈良支 局記者	新聞記事・ネット記事に掲載	宝来山古墳と菅原東遺跡の航空写真1枚、菅原東遺跡出土Ⅱ期の円筒・形象埴輪写真1枚	貸出・掲載 許可
17	R 3. 9.24	株式会社ミネル ヴァ書房 東京代 表取締役社長	山本孝文・青木敬・城倉正祥・寺前直人・浜田晋介著『考古学概論―初学者のための基礎理論』に掲載	史跡大安寺旧境内出土「東院器」黒書須恵器杯の実測図1枚	掲載許可
18	R 3. 9.30	奈良考古学倶楽部 会長	奈良考古学倶楽部会報「奈良考古情報」へ掲載	平城京跡第750次調査の空中写真(北東から)と調査位置図、平城京跡第752次調査空中写真(南西から)と調査位置図各1枚	貸出・掲載 許可
19	R 3.10.13	株式会社アッショ 社員	「必殺シリーズDVDコレクション第41号」に掲載	平城京跡第513次調査出土漆絵文書の写真1	貸出・掲載 許可
20	R 3.10.29	山口市教育委員 会教育長	鑄銭司・陶地区文化財総合調査事業特別企画展「周防鑄銭司と古代の鑄銭」のパンフレット・パネルに掲載	『平城京左京九条三坊五六坪。発掘調査概要報告』図4平城京の条坊と発掘調査地1枚	貸出・掲載 許可
21	R 3.11.11	奈良県知事公室 国際課長	奈良県・中国陝西省友好提携10周年記念イベントで実施する基調講演の際に使用するPowerPointのスライドで使用し、後日その様子をアーカイブ配信	西大寺跡第25次調査出土墨書須恵器「魚南東朝」写真1点	掲載許可
22	R 3.11.22	奈良国立博物館 長	奈良国立博物館特別展「大安寺のすべて―天平のみほとけと新形一」の出陣にあわせ、チラシ・図録へ掲載、パネル等の作成、会場周辺の看板や交通広告へ使用	奈良市指定文化財 杉山古墳出土家形埴輪附輪残欠一括、大安寺西塔出土風障・風招(相輪用)、大安寺西塔出土風鐸(相輪用)、大安寺西塔出土風鐸(隅棟用)、大安寺西塔出土木埋片、大安寺西塔出土露盤(板材)片、大安寺西塔出土露盤(帯材)片、大安寺出土円盤状土製品、大安寺金堂・講堂付近出土胎ガラス玉、大安寺金堂・講堂付近出土アルカリ石灰ガラス玉、大安寺金堂・講堂付近出土色ガラス、大安寺金堂・講堂付近出土水晶製品、大安寺金堂・講堂付近出土金糸、大安寺金堂・講堂付近出土壁画片、大安寺出土大宮大寺式軒瓦(6231 A-6661 B)、大安寺出土平城宮系軒瓦(6304 D-6664 A)、大安寺出土大安寺式軒瓦(6138 C a-6712 A)、大安寺西塔主要軒瓦(大安寺51 Aa-6712 B)、大安寺経楼出土平安時代後期の軒丸瓦(大安寺60 A-77 A)、大安寺出土凸面布目平瓦、大安寺出土金堂北側出土施輪垂木先瓦(円形)、大安寺出土金堂北側出土施輪垂木先瓦(方形)、大安寺南大門出土超大型軒平瓦(6716 G)と通常サイズの軒平瓦(6716 C)、大安寺講堂出土銅木蓋瓦、大安寺第57次調査出土墨書土器、大安寺第64次調査墨書土器、大安寺第22次調査墨書土器、大安寺第2次調査墨書土器「大二」刻字拡大、大安寺第57次調査出土木簡、大安寺杉山古墳岡窪出土円盤状土製品、大安寺南大門出土台座形土製品(側面)、大安寺南大門出土台座形土製品(上面)各写真1枚合計32枚	貸出・掲載 許可
23	R 3.12. 10	社会医療法人 平 和会理事長	法人広報誌「へいわと健康」へ掲載	赤田横穴墓群第6次調査区全景写真1点、19号横穴墓写真1点、赤田横穴墓群平面図1点	貸出・掲載 許可
24	R 4. 1.18	奈良県文化・教 育・くらし創造部 文化資源活用課 長	文化庁「博物館等の国際交流の促進事業」の受託事業として、奈良県が制作する、古代の日中交流を題材とした動画コンテンツへの掲載	西大寺跡第25次調査出土墨書須恵器「魚南東朝」写真1点	貸出・掲載 許可
25	R 4. 2. 3	苅田町教育委員 会職員	『埴輪論叢』11号へ掲載	若草中学校旧所蔵埴輪の図面・写真	掲載許可

	申請日	申請機関 (申請者)	目的	内容	その他
26	R 4. 2.10	中京テレビ放送株式会社	ニュース情報番組で放送・Web配信	富雄丸山古墳発掘体験風景写真2枚	掲載許可
27	R 4. 2.10	株式会社共同通信社代表取締役社長	「発掘された日本列島2022」展の公式図録へ掲載	赤田横穴墓群第6次調査 19号墓 写真1枚	貸出・掲載許可
28	R 4. 3. 4	一般社団法人なら文化交際機構月刊大和路ならら編集部理事長	月刊大和路ならら4月号に掲載	「大安寺」・「大安寺塔（寶塔）」文字紋瓦写真1枚	掲載許可
29	R 4. 3. 8	奈良国立博物館長	奈良国立博物館特別展「大安寺のすべて」で図録、会場パネル、グッズに使用	大安寺航空写真1枚、大安寺杉山瓦甍2号雲（西南から）写真1枚、大安寺出土土輪軸垂木先瓦復元図1枚、大安寺第140次調査出土陶木蓋瓦実測図1枚、奈良市指定文化財 杉山古墳出土家形埴輪附埴輪魂穴一括写真1枚、大安寺出土大官大式軒瓦（6231 A-6661 B）写真1枚、大安寺出土金堂北側出土土輪軸垂木先瓦（内形）写真1枚、大安寺西塔出土風鐸・風招（相輪用）写真1枚	貸出・掲載許可
30	R 4. 3.14	株式会社NHKエンタープライズ近畿総支社 総支社長	奈良国立博物館で開催される特別展「大安寺のすべて～天平のみほとけと祈り～」の展示会で流される展示映像での使用	螺旋（大安寺金堂・講堂付近出土）、大官大式軒瓦（大安寺出土）、垂木先瓦（大安寺出土）、奈良三彩（大安寺出土）、筆冢土器「大安寺」大寺、「大安寺左右廂」「東院」「大冢」など（大安寺出土）、木簡（大安寺出土）、半球状土製品（大安寺金堂・講堂付近出土）、金糸、ガラス製品、水晶玉（大安寺金堂・講堂付近出土）、彩色された埴輪片（大安寺金堂・講堂付近出土）	掲載許可
31	R 4. 3.18	奈良市役所児童相談所設置推進課長	奈良市子どもセンターに展示する、出土品表示パネルを作成するため	平城京跡第746次調査全整・掘立柱建物・井戸・木簡（表・裏）埴斗瓦（表・裏）写真各1枚、貴族の邸宅模型写真1枚	貸出・掲載許可
32	R 4. 3.25	大和・多聞城研究会 会長	案内冊子「幻の城 多聞城—2022年度改訂版」の表紙に掲載	多聞城創建軒瓦 写真1枚	掲載許可

表5 学術研究等に関わる資料閲覧

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	R 3. 4. 4	京都大学大学院生	修士論文	ベンシヨ塚古墳出土鉄製品（鏃・鏃・斧・針）の観察・実測・撮影
2	R 3. 4.23	京都大学学生	卒業論文	平城京右京二条三坊十五坪（H第460次調査）出土「分銅」形土製品1点の観察・実測・撮影
3	R 3. 6. 7	京都大学大学院生	論文執筆	水間遺跡出土物、別物未製品の観察・撮影
4	R 3. 9. 3	滋賀県立大学人間文化学部教授	研究発表	『多聞度城跡発掘調査報告書』掲載土器類一式、『奈良市埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和58年度』81頁記載の多聞度城跡出土土器器蓋の観察・実測・撮影
5	R 3.10.21・27・28	奈良大学学生	卒業論文	富雄丸山古墳出土土輪付円筒埴輪の観察・実測・撮影・複写
6	R 3.11. 2	明治大学大学院生	博士論文	菅原東遺跡出土の埴輪1点、土師器4点（高坏1点、壺1点、甕2点）の観察・実測・撮影
7	R 3.11.15	元武藏野美術大学教授	個人研究	史跡大安寺田境内出土款印付円盤状土製品の観察・実測・撮影
8	R 4. 3. 9	奈良国立博物館員	展示図録執筆	「史跡大安寺田境内第133次調査出土埴輪片科学分析結果」の閲覧・複写

---

### 第3章 研究報告

---

平城京出土軒瓦の新種・参考資料について／原田 憲二郎



## 平城京出土軒瓦の新種・参考資料について

原田憲二郎

### I はじめに

2021年5月13日と2023年10月6日に、奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・大和郡山市教育委員会・奈良市教育委員会の瓦研究者によって、軒瓦型式検討会が実施され、平城京・藤原京出土軒瓦の型式・種の新設定および変更等について検討が行われた。

このうち2021年の奈良文化財研究所所蔵分の検討結果については、その概要が報告されている（今井・林2023）

本稿では、2021年と2023年の軒瓦型式検討会を経た奈良市教育委員会保管の軒瓦のうち、新種が設定された軒瓦と、参考資料となった軒瓦について以下に紹介する。

### II 平城京出土軒丸瓦の新種

**6301型式K種** 6301型式ではB・C・J種とほぼ同程度のやや小型の軒丸瓦である。内区に複弁8弁蓮華紋を飾り、弁の子葉は6301型式B・C・Jと比べ、や

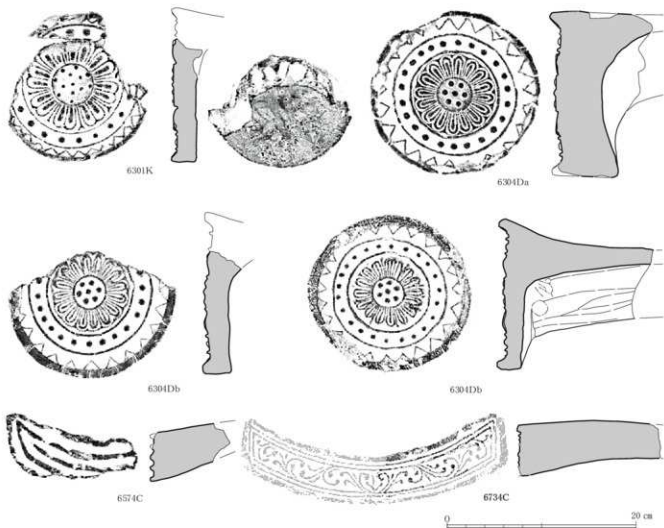


図1 平城京出土新種の軒瓦 (1/4)

や太めな点は特徴的である。中房蓮子配置は1+5+8で、この配置は、蓮子配置が不明である6301型式E・F種を除けば、6301型式で唯一である。外区内縁に珠紋、外区外縁に線割歯紋をあらわす。外縁頂部に凹線をめぐらさない点は、6301型式C種と共通する。

6301型式は瓦当裏面に布目痕跡を残す布目押圧技法による製作と確認できるものが多いが、瓦当裏面にタテナデ、瓦当裏面周縁にはこれに沿うナデをほどこしており、布目痕跡は確認できない。ただし丸瓦部剥離痕に指頭圧痕が確認できる。瓦当下半部側面はヨコナデをほどこす。

胎土は密、焼成はやや軟質、表面黒灰色、内部白灰色を呈する。

6301型式の小型品で、外縁頂部に凹線をめぐらさない点は6301型式C種と同じであることから、C種と同じ平城宮・京瓦編年<sup>11)</sup>の第II-2期(729~745)に属すると考える。

6301型式K種は左京一条三坊十二・十三坪から1点(奈良市教委2022)、左京二条四坊十坪から小片が1点<sup>2)</sup>出土している。

**6304型式Da種・Db種** 大佛寺創建軒丸瓦6304型式D種には范を彫り直したものを確認でき、彫り直し前をDa種<sup>3)</sup>、彫り直し後をDb種<sup>4)</sup>と設定した。

Db種は中房圏線を彫り加え、蓮弁の輪郭、子葉と間弁の一部を彫り直す。間弁が蓮弁のまわりを巡る部分は彫り直しておらず、范の傷みが進行した資料では、その部分が磨滅した結果、独立した間弁をもつ単弁蓮華紋にみえるものがある。

瓦当上半部はタテケズリ、瓦当側面下半部はヨコケズリ。丸瓦接合位置はDa種より低い。脱范後、外縁頂部を0.5cm程度削り、平坦面をつくる点はDa種と異なる特徴である。瓦当裏面丸瓦接合線に沿って、指頭による押圧を加える。瓦当裏面下半部はヨコケズリ。周縁に沿って、半周する指ナデを加えるものもある。丸瓦部凹面には縦方向のユビナデを施す。Db種の瓦当厚は2.0~3.0cmのもの、4.0~4.5cmのもの2種に分けることができ、瓦当厚5.0~7.0cmを測るDa種に比べて薄手である。胎土は密である。焼成・色調は、硬質で灰色を呈するものと、やや軟質で褐灰色を呈するもの、さらにやや軟質で表面黒色、内部暗灰色を呈するもの大きく3つに分類できる。

6304型式Db種は紋様・技法上の諸特徴から、年代的に大佛寺創建軒丸瓦6304型式Da種と、最初の大佛寺軒丸瓦6138型式E種の間に位置付けられる(原田

2011)。

なお、令和5年までに奈良市教育委員会による大安寺の調査で出土した6304型式Da種は100点、6304型式Db種は73点である。この他小片の為、Da種かDb種かで区別できない6304型式D種が56点ある。

### III 平城京出土軒瓦の新種

**6574型式C種** 二重郭紋の中央に単弧線を加えた6574型式であるが、既知のA・B種とは郭線・弧線の幅・高さが異なる。郭線断面形状は台形であるが、上辺を支える脚が長い。郭線間の断面形は「U」字形で、郭線間の間隔は約0.5cm。

顎部断面形態は顎用粘土を貼り付け、削り出した直線顎<sup>5)</sup>である。顎用粘土剥離面には、縦位の縄タタキ目が残る、瓦当部の成形法は複数の粘土板を貼り重ねた「粘土板貼り重ね技法」<sup>6)</sup>とみられる。凹面瓦当上縁付近はヨコケズリをほどこし、特に中央付近は深く削る。以下は糸切痕と布目痕を残す。凸面はタテケズリ。胎土は密で、焼成は軟質である。色調は表面黒灰色、内部白灰色を呈する。

左京二条四坊二坪から2点(奈良市教委1989a)と、左京二条四坊七坪から1点出土<sup>7)</sup>している。

**6734型式C種** 6734型式は内区に桐葉形を中心葉が囲む中心飾りをもつ唐草紋を飾る。外区と内区の境には、2重に界線をめぐらす。既知のA・B種とは内区唐草紋様が異なるが、信濃国分寺創建軒丸瓦は同范である<sup>8)</sup>。

顎部断面形態は直線顎である。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリ、以下は布目痕を残す。凸面はタテケズリ。胎土はやや粗く、焼成はやや硬質、灰色を呈する。

平城京右京二条二坊十六坪で鎌倉時代の瓦積井戸の枠材として1点(奈良市教委2006b)出土した。

### IV 平城京出土軒丸瓦の参考資料

検討を行った結果、既知の紋様でないことは確実だが、小片の場合は、全体の紋様が判明するまで型式・種の設定を保留する。また奈良時代と断定できないものの場合も設定を保留する。こうしたものを参考資料と呼ぶ。

また、平城京に運ばれたことが判明した軒瓦で、すでに在地の報告書等で型式設定がなされているものについても、参考資料とすることとなった。

ここでは、まず参考資料の軒丸瓦について紹介する(図2)。

図2-1は重圏紋である。圏線は高さ0.5cm、基底幅

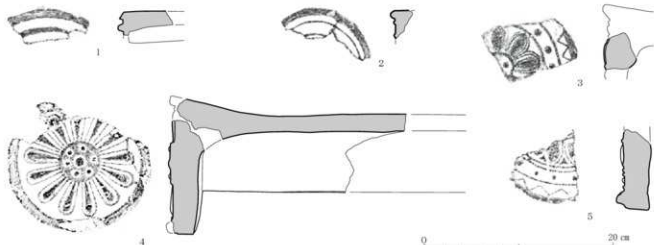


図2 平城京出土参考資料の軒丸瓦 (1/4)

0.8cmで、断面形状が台形を呈する。

外縁は脱范後、斜め方向にカットする点特徴的である。瓦当上半部はタテケズリをほどこす。胎土は密で、焼成は軟質である。色調は表面黒灰色、内部灰白色を呈する。左京二条四坊三四坪間の条間路南側溝から出土した(奈良市教委 1993 a)。小片の為、良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図2-2は小型の重圏紋である。圏線断面形状は半円形で、圏線幅は0.3cmと狭い。外縁とその内側の圏線の間は狭く、このことは6012型式A種等、比較的古手の重圏紋にみられる特徴である。

瓦当上半部はタテケズリをほどこす。胎土は精良で、焼成は軟質である。色調は淡灰黄色を呈する。左京一条三坊十三坪で、9世紀初めの井戸周囲の石敷から出土した(奈良市教委 2001)。小片の為、良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図2-3は盛り上がった連弁が特徴的な、単弁蓮華紋である。間弁は弁輪郭線に沿うようなY字状で、弁数は12弁の可能性が考えられる。外区内縁は珠紋を、外区外縁は線鋸歯紋をめぐらす。間弁の形状などから6130型式あるいは6134型式に属するとみられる。

胎土はやや粗く、焼成は軟質である。色調は表面黒色、内部灰色を呈する。

左京五条四坊十五坪から出土した(奈良市教委 2010)。小片の為、良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図2-4は内区に単弁13弁蓮華紋を飾る。中房の蓮子配置は1+6で、中心蓮子は周囲の蓮子より一回り大きい。蓮弁は輪郭線で囲まれた子葉からなる。外縁は素

紋の直立縁である。范傷は弁端と外縁の間に1箇所、さらにその弁の2つ右の弁では、弁輪郭線と子葉を繋ぐ傷が確認できる。

瓦当裏面に接合溝を設け、先端部が無加工の丸瓦を接合する。瓦当上半部と瓦当側面下半部は縦方向のケズリを施す。瓦当裏面は横方向のケズリを施した後、部分的にナデで調整する。瓦当側面下半部の一部には瓦当面から1.2cm幅でめぐる面があり、范の側面の痕跡とみられる。丸瓦側面の瓦当部付近には、乾燥時に付いたとみられる横方向の棒状圧痕が認められる。胎土は密で白灰色の砂粒を含む。焼成はやや軟質、色調は白色である。

兵庫県加古川市の古大内遺跡(賀古駅家)出土品を標式名とする古大内式軒丸瓦I型と同範である(原田 2013)。製作技法・胎土・色調は播磨出土品と大きな違いは認められず、播磨で製作され、平城京内に持ち込まれたとみてよい。左京五条四坊一坪で1点(奈良市教委 2017)、左京五条四坊八坪で11点(奈良市教委 2020他<sup>9)</sup>)、左京五条四坊九・十坪間の条間北小路南側溝から1点(奈良市教委 2012)、興福寺境内で1点(奈文研 2016)が出土している。すでに兵庫県内の遺跡で型式設定がなされているため、参考資料となった。

図2-5は内区と外区の間2重の界線が巡るのが特徴的である。中房からのびる弁の輪郭線は、界線に接続する。間弁は短く三角形形状である。外区内縁に珠紋を、外区外縁に線鋸歯紋をめぐらす。外縁の形態は内面が内傾する傾斜縁である。

瓦当裏面は粗いタテ方向のナデをほどこす。瓦当側面には瓦当面から0.9cm幅でめぐる范端痕が確認できる。胎土は粗く、焼成はやや軟質で、灰色を呈する。



左京五条四坊間東小路東側溝から出土した(奈良市教委 2012)。福寺池採集品(佐藤聖聖他 2017)は同範である。左京四条三坊九坪の東堀河出土品(榎考研 2007)も同範の可能性が高い。これらの資料から、蓮弁は複弁7弁と単弁1弁の複弁単弁混合紋とわかる。今後の良好な出土資料を待って型式設定することとし、参考資料となった。

## V 平城京出土軒平瓦の参考資料

ここでは参考資料の軒平瓦について紹介する(図3)。

図3-1は単郭紋の中央に単弧線を加えた紋様構成である。単郭紋左右上隅が長くのびる点特徴的である。

顎部断面形態は直線顎。凸面はタテズリ。凹面は布目痕を残すが、瓦当上縁付近と狹端部付近はヨコナデをほどこす。胎土は粗く、焼成は堅緻で、灰色を呈する。

左京一条三坊十二・十三坪で出土した<sup>10)</sup>。難波宮出土軒瓦の型式を参考にすれば、6571型式となる。しかし、やや小型の軒平瓦であること、郭線左右両端に不自然に残る部分があることから、範は2重郭で、脱胎後に外側の郭線を削り取った可能性が残る。このため、もう少し同範資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図3-2は2重郭紋である。郭線断面形状は台形。郭線間の断面形はV字形。郭線間の間隔はほとんど無い。

顎部断面形態は顎面の長い段顎型である。凸面は顎面ヨコズリ、顎段部はヨコ方向の指ナデで丸く仕上げられる。顎面端部には凹型調整台の圧痕が残る。平瓦部は粗いタテズリ、凹面はヨコズリをほどこす。胎土は粗く、焼成はやや軟質で、白灰色を呈する。

左京二条三坊十坪で出土した(奈良市教委 2009)。既知の6572型式と同範品はないが、瓦当紋様の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図3-3は中心飾り左端部から左第2単位の均整唐草紋が残る。上外区は珠紋を、下外区には線鋸歯紋をめぐらす。唐草紋の形状は6661型式に似る。

顎部断面形態は顎面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面はタテズリ、顎面はヨコズリをほどこす。凹面瓦当上縁付近はヨコズリである。胎土は密で、焼成は堅緻、灰色を呈する。

元興寺寺地北辺で、15世紀の井戸から出土した(奈良市教委 2006 a)。今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図3-4は左上端部の小片である。内区の子葉の先端に2つの珠点を配する点特徴的である。上外区には、先端部が上下の界線に接続しない細かい線鋸歯紋をめぐ

らす。脇区は珠紋を配する。

凹面は粗いタテナデをほどこす。胎土は緻密、焼成は硬質で、暗灰色を呈する。

左京五条五坊十三坪で出土した(奈良市教委 1998)。変形葡萄唐草紋とされる和田廃寺のⅢ型式軒平瓦(花谷 2000)と同範であり、十三坪では他にも和田廃寺と同範とみられる軒丸瓦が出土している(原田 2002)。このようなことから、これらが十三坪東隣に想定される葛木寺の瓦であり、和田廃寺を葛城尼寺とする考えを補強するものと評価できる(原田 2020)。和田廃寺で型式設定されていることから、参考資料となった。

図3-5は右端部の破片である。左京九条三坊六坪の8世紀後半の井戸枠内から出土した(奈良市教委 2021)。内区右端の唐草が上方に巻き込み、上・下外区と脇区に杏仁形珠紋をめぐらす。

顎部断面形態は直線顎。凸面はタテナデ。凹面もタテナデするが、瓦当上縁付近はヨコナデ調整する。胎土は粗く、焼成は軟質、灰色を呈する。

6692型式の一種とみられるが、今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図3-6は右半部片で、内区唐草紋は連続し、唐草先端に三葉紋風の蕾を持つ点特徴的である。外区は素紋。

顎部断面形態は、顎面をもつ曲線顎Ⅱとみられる。凸面はタテズリ。凹面は瓦当上縁付近をヨコズリし、以下は布目を残す。胎土には砂粒と黒色のシャモットが多い。焼成は硬質で灰色を呈する。

平城紀寺の寺院地内と想定される左京五条七坊十三坪から出土した(奈良市教委 1989 b)。寝屋川市高宮廃寺NHⅠ型式軒平瓦と同範であることが判明(原田 2020)し、全体の紋様構成が明らかとなった。唐草の反転数は異なるが、中心飾りの垂飾りが水滴形である点や、唐草が連続する点と各唐草先端の形状は大安寺式軒平瓦6717型式A種に似る。高宮廃寺NHⅠは曲線顎Ⅱである。高宮廃寺では平城京と同範の軒丸瓦6314型式A種と組む(寝屋川市教委 2018)。平城京では平城宮・京瓦編年Ⅳ期と考える6316型式U種と組む可能性が高いこと、唐草各单位間に三葉紋風の支葉を配する軒平瓦は6761型式A種や6763型式A種・6764型式A種等、Ⅳ期に盛行していることから、平城宮・京瓦編年Ⅳ期(757~770)の瓦と考える(原田 2020)。高宮廃寺で型式設定されていることから、参考資料となった。

図3-7は右上の小片である。内区右端の唐草は上方に巻く。外区には珠紋をめぐらす。上外区には縦断する範傷が確認できる。

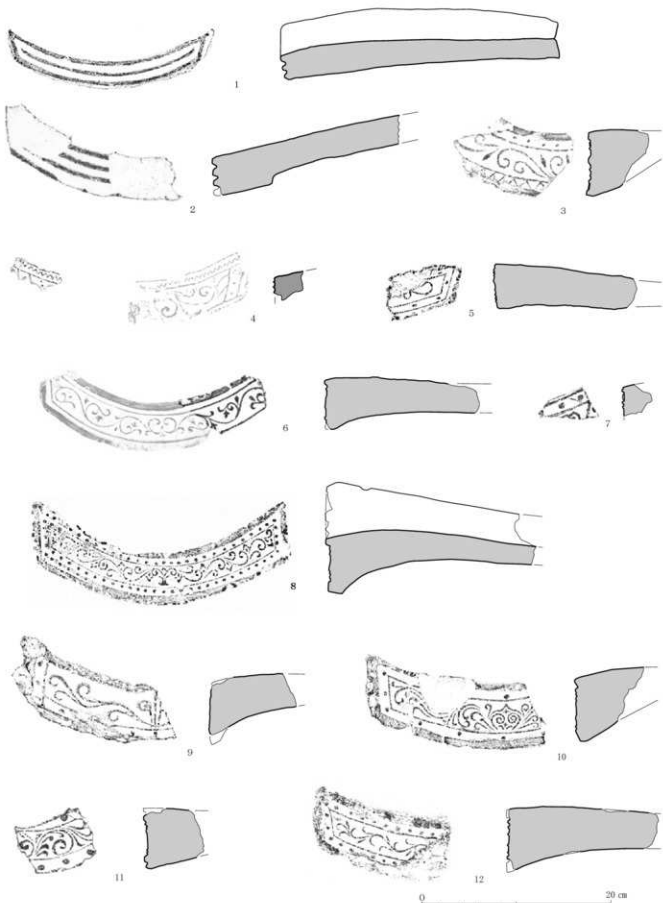


図3 平城京出土参考資料の軒平瓦 (1/4)

胎土は密、焼成はやや軟質、赤灰色を呈する。

元興寺修理所推定地から出土した(奈良市教委 1987)。元興寺採集品(梶山 2006)は上外区を縦断する范傷が確認でき、同范の可能性が高い。東大寺千手堂出土品(平松 2008)、東大寺仏餠屋出土品(石田 2016)、興福寺北僧房採集品(保井 1928・平松 2008)も同范の可能性が考えられる。今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図3-8は内区に樹状の中心飾りを置く5回反転調整唐草紋を飾る。唐草は各单位に山形の蕾を配する。外区には小粒の珠紋を密にめぐらす。中心飾り直上の珠紋とその左側の珠紋の2箇所に范傷が確認できる。

顎部断面形態は顎面をもつ曲線顎Ⅱである。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリ、以下は狭端に向けてタテケズリをほどこす。凸面はタテケズリを施し、顎面はヨコケズリをほどこす。平瓦部の側面はケズリで成形した後、凹面側の角を面取りする。胎土は密で白灰色の砂粒を含む。焼成はやや軟質、色調は概ね白色であるが、表面の一部は黒灰色である。凹面瓦当付近の両側縁には、横方向の棒状圧痕が認められる。

左京五条四坊八坪から2点(奈良市教委 2020 他<sup>11)</sup>)と、九坪南側の五条条間北小路北側溝から1点(奈良市教委 2004)出土した。古大内式軒平瓦と同范である(原田 2013)。製作技法・胎土・色調は播磨出土品と大きな違いは認められず、乾燥時についたとみられる横方向の棒状圧痕は小犬丸遺跡(布勢聖家)出土古大内式軒平瓦に類例が認められる(兵庫県教委 1987)ことから、播磨で製作され、平城京内に持ち込まれたものとみてよい。古大内式軒平瓦は范傷の進行の少ないものを甲類、多いものを乙類と分類でき、古大内遺跡では甲類が、小犬丸遺跡では乙類が多く出土していると報告される(今里 1992)。平城京出土品は范傷の少ない甲類で、比較的早い段階で生産されたものが搬入されているとみられる。すでに兵庫県内の遺跡で型式設定がされているため、参考資料となった。

図3-9は縦線とその左右の上向きの唐草紋を中心飾りとする、3回反転唐草紋を内区に飾る。唐草は途切れず、連続する。外区に珠紋を巡らすか、上外区は無い。

顎部断面形態は曲線顎Ⅱである。顎面はヨコケズリ。凸面は瓦当から顎部にかけてはタテナデ、以下ナメ縄タタキ痕を残す。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリする。胎土は密でマーブル状を呈する。焼成は軟質である。色調は表面が黒灰色、内部は橙灰色を呈する。

左京五条四坊七坪の西辺を画する溝から1点出土し

た<sup>12)</sup>。保良宮に比定される大津市石山国分遺跡出土軒平瓦KH 05と同范である<sup>13)</sup>。製作・調整技法に違いはみられず、胎土の状況も似ており、近江国から運び込まれたものと考えられる。すでに石山国分遺跡で型式設定がなされているため、参考資料となった。

図3-10は、下から派生する三葉形を、左右に分離して対向する唐草が囲み、その上に対葉花紋を配する、いわゆる東大寺式軒平瓦に似た中心飾りを持つ。対葉花紋下に十字形を配する点は特徴的である。唐草は不明な点が多いが、左第1・2単位を見る限り、かなり分解している。

顎部断面形態は曲線顎Ⅱである。瓦当面中心付近の下外縁は脱范後ヨコケズリをほどこして、面取りする。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリし、以下は布目を残す。凸面はタテケズリをほどこす。胎土は粗く黒色のシャモットを多く含む。焼成はやや軟質。色調は表面が黒灰色、内部が橙灰色を呈する。

西隆寺跡推定塔跡の基壇掘込地業から出土した<sup>14)</sup>。紋様構成から平安時代初めの軒平瓦の可能性が高く、今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図3-11は中心飾りと右第1・2単位部分の小片であるが、6732型式もしくは6733型式に属する均整唐草紋とみられる。外区は珠紋をめぐらす。

顎部断面形態は直線顎である。凹面はヨコケズリ、凸面はタテケズリをほどこす。胎土は密で、黒色のシャモットを多く含む。焼成は硬質で青灰色を呈する。

元興寺西室北階小子房の調査で、13世紀中頃の土坑から出土した(奈良市教委 1993 b)。6733型式I種の未知の紋様部分の補完資料の可能性もあるため、参考資料となった。

図3-12は内区に5回反転均整唐草紋を飾るとみられる。唐草紋は主葉1・支葉2を1単位とし、6721型式J種に似る。外区には小粒の珠紋を密に巡らす。

顎部断面形態は曲線顎であるが、瓦当面下部が欠損しており、曲線顎ⅠかⅡかは不明である。凹面は丁寧なナデを、凸面はケズリをほどこす。胎土は粗く、焼成は硬質、灰色を呈する。左京一条三坊五坪で、9世紀初めの井戸の枠内から出土した(奈良市教委 2007)。平安時代初めの軒平瓦の可能性もあり、今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

#### IV おわりに

2021・2023年の2度の軒瓦型式検討会で検討された奈良市保管分の軒瓦は、軒瓦型式検討会の開催が2000

年以來ということもあり、軒丸瓦 12 点、軒平瓦 22 点と多い。未発掘区が多い平城京内からは今後も多数の新型式・新種の軒瓦が出土することが予想される。

なお、型式・種の設定がなされていたものの、欠損部分の紋様を補充する資料もある。これについては、稿を改めて紹介したい。

## 謝辞

本稿で紹介した軒瓦の同范資料調査にあたって、ご協力やご教示を頂いた多くの皆様に厚く御礼申し上げます。

## 注

- 1) 以下に使用する時期区分は、毛利光・花谷 1991 で提示された編年による。
- 2) 奈良市教育委員会 2019 『平城京跡(左京二条四坊十坪)調査 第 708 次』奈良市埋蔵文化財調査年報平成 28 (2016) 年度。報告文中の「G301 種別不明」が K 種と判明した。
- 3) なお、奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1996 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』掲載のものは 6304 型式 D a 種である。
- 4) 6304 型式 D b 種は、もと 6304 型式 F 種と設定されていた(奈良国立文化財研究所 1978)。その 6 年後に、6304 型式 D 種と 6304 型式 F 種が同定と認定され、F 種が削除された(奈良国立文化財研究所 1984)。2010 年に 6304 型式 D 種には技法上の諸特徴が異なる 2 種があり、これが唯の偏みの差にのみ対応するとし、I・II 類に分類された(中井 2010)。明令業者は中井 I・II 類の中間が埋り直しによるものであることを明らかにした(原田 2011)。中井・原田による 6304 D 型式の I 類が D a 種、II 類が D b 種である。
- 5) 以下、第 9 節断面形態の分類は毛利光・花谷 1991 に拠る。
- 6) 「粘土板断り重ね技法」の用語については、原田 2014 を参照。なお、この文中で 6574 型式 C 種は、平城京出土重部紋分類の II b 類に分類した。
- 7) 平城京跡第 775 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 8) 信濃院 5 寺と平城京の同范瓦については、原田 2016 にまとめた。なお、6734 型式 C 種の呼称は、山崎 2006 年文中にすでに記載があるが、軒瓦型式検討会を経て設定されたものではなかったもの、2021 年の軒瓦型式検討会で追認された。
- 9) 平城京跡第 748・767・772 次調査。いずれも奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 10) 平城京跡第 774 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 11) 平城京跡第 748 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 12) 平城京跡第 752 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 13) 2023 年 11 月、大津市埋蔵文化財調査センター・青山均氏・木村啓子氏にご協力頂き、石山園分遺跡出土品と実物照合を行った結果、同范と判明した。
- 14) 西條寺跡第 9 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。

## 参考・引用文献

- 石田由紀子 2016 『仏蘭庭下層遺構出土の東大寺創建以前の瓦』栄楽 土造男・佐藤昭・古川真司編『東大寺の研究 1 東大寺の美術と考古』法藏閣今井晃樹・林正憲 2023 『平城京・藤原京出土軒瓦の新種について』奈良市埋蔵文化財調査年報 2022。『奈良国立文化財研究所』  
今井晃樹 1992 『能野市小大丸遺跡の古瓦』『牟婁野家一小大丸遺跡 1090・1991 年度発掘調査概報』能野市教育委員会  
櫻山跡 2006 『名古屋博物館資料図録日録 7 大和古瓦図録』名古屋博物館  
佐藤聖一・中原七葉子・梶田裕介・安斎寿奈子・楠木直寿・榎本愛実・三井淳 2017 『仏福寺池発見軒瓦について』元興寺文化財研究所研究報告 2016  
奈良国立文化財研究所 1975 『平城宮発掘調査報告 VII—平城京左京一条三坊十坪の調査』  
奈良国立文化財研究所 1978 『平城宮出土軒瓦型式一覧』

- 奈良国立文化財研究所 1984 『平城宮出土軒瓦型式一覧(補遺篇)』  
奈良国立文化財研究所 2016 『興福寺境内の調査 第 553 次・第 559 次』奈良市埋蔵文化財研究所紀要 2016。  
中井公 2010 『難倉瓦屋』で焼かれた瓦をめぐる。『南山城の古代寺院』同社 大正歴史資料館  
奈良市教育委員会 1987 『第 7 次調査。奈良市埋蔵文化財調査概報報告書昭和 61 年度』  
奈良市教育委員会 1989 a 『平城京左京二条四坊十坪の調査 第 157 次』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書昭和 63 年度。  
奈良市教育委員会 1989 b 『田・2。平城京・周辺その他の調査 88-10 次。』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書昭和 63 年度。  
奈良市教育委員会 1993 a 『平城京左京二条四坊十坪の調査 第 260 次』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書平成 4 年度。  
奈良市教育委員会 1993 b 『2 元興寺境内の調査(3) 第 37 次調査』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書平成 4 年度。  
奈良市教育委員会 1998 『平城京左京五条五坊十三坪の調査 第 274 次』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書平成 9 年度。  
奈良市教育委員会 2001 『平城京左京一条三坊十坪の調査 第 440 次』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書平成 11 年度。  
奈良市教育委員会 2004 『平城京跡(左京五条四坊七・九・十坪) 第 450・1・2・3・4 次。』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書平成 13 年度。  
奈良市教育委員会 2006 a 『元興寺境内 第 56 次調査。』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書平成 14 年度。  
奈良市教育委員会 2006 b 『平城京跡(右京二条二坊十六坪)の調査 第 504 次。』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書平成 15 年度。  
奈良市教育委員会 2007 『法華寺境内古墳・平城京跡(左京一条三坊四・五坪)の調査 第 520 次。』奈良市埋蔵文化財調査概報報告書平成 16 年度。  
奈良市教育委員会 2009 『平城京跡(左京二条三坊十坪)の調査 第 561 次。』奈良市埋蔵文化財調査年報平成 18 年度(2006)年度。  
奈良市教育委員会 2010 『平城京跡(左京五条四坊十五坪・東四坊大路)の調査 第 553・556・575・581 次。』奈良市埋蔵文化財調査年報平成 19 年度(2007)年度。  
奈良市教育委員会 2012 『平城京跡(左京五条四坊八・十・十五・十六坪・五条園北小池・東四坊間小路)の調査 第 608 次・622 次。』奈良市埋蔵文化財調査年報平成 21 年度(2009)年度。  
奈良市教育委員会 2017 『平城京跡(左京五条四坊一坪)の調査 第 626・656・666・667・668・680 次。』奈良市埋蔵文化財調査年報平成 25 年度(2014)年度。  
奈良市教育委員会 2020 『平城京跡(左京五条四坊八坪)の調査 第 649・701 次。』奈良市埋蔵文化財調査年報平成 29(2017)年度。  
奈良市教育委員会 2021 『平城京跡(左京九条三坊五・六坪)の調査 第 727 次。』奈良市埋蔵文化財調査年報平成 30(2018)年度。  
奈良市教育委員会 2022 『平城京跡(左京一条三坊十二・十三坪)の調査 II』第 733・743 次。『奈良市埋蔵文化財調査年報令和元(2019)年度』奈良市立福原高等学校研究 2007 『平城京左京四条三坊九坪(東福原)の調査』  
京原市教育委員会 2018 『因幡寺高宮御寺跡発掘調査報告書』  
花谷浩 2000 『京内廿四寺について』研究論集 X I 奈良国立文化財研究所  
原田 2011 『平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品について』奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』2011  
原田 2011 『“大官寺”軒瓦の成立』奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 20 年度(2008)年度』  
原田 2013 『平城京における播磨瓦瓦出土の背景について』『帝塚山大阪大学考古学研究所報告 X V』帝塚山大阪大学考古学研究所  
原田 2014 『平城京の直隴土系軒瓦』『古代瓦研究 VI—大官大寺式・高麗式軒瓦の展開—直隴土系軒瓦の中央—』奈良国立文化財研究所  
原田 2016 『因分寺造営期における中央と因分寺の同范瓦』須田勉編『日本古代考古学論集』同成社  
原田 2016 『平城記寺・葛木寺・海龍寺前身寺院・清源院の瓦』奈良市埋蔵文化財調査年報平成 29 年度(2017)年度。  
平松隆雄 2008 『東大寺千手堂跡の古瓦』『南都仏教』92 号  
兵庫東大寺教育会 1987 『能定王佛刹跡跡小丸丸跡』  
毛利光俊彦・花谷浩 1991 『RVI 寺跡 屋瓦 I』奈良市埋蔵文化財研究所  
森田 1983 『興福寺軒瓦』奈良国立文化財研究所『文化財論叢』  
保井方太郎 1928 『南都七大寺古瓦収録集』鹿鳴在  
山崎 2006 『平城宮出土土軒瓦と信濃園分寺出土土軒瓦』『古代信濃と東山遺蹟園の因分寺』上田市立信濃園分寺資料館

## 図版出典

- 図 1 の 6734 C の拓本は山崎 2006、図 3-4 の拓本は花谷 2000、図 3-6 の拓本は京原市教委 2018 掲載の拓本の一部修正を加え転載。その他は著者作成。



印刷・製本仕様データ

表紙：アートポストカード220kg/㎡・マットpp加工  
見返し：白色上質紙110kg/㎡  
巻頭図版：特アート紙135kg/㎡  
本文：白色マットコート紙104.7kg/㎡  
本文フォント：ヒラギノ明朝体  
製本：縦開き・糸かがり綴じ

©2024 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

---

## 奈良市埋蔵文化財調査年報

令和3(2021)年度

ISSN 1882-9775

印刷 令和6(2024)年3月12日

発行 令和6(2024)年3月22日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター  
630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地  
TEL 0742-33-1821  
FAX 0742-33-1822  
URL <http://www.city.nara.nara.jp/>  
E-mail [maizoubunka@city.nara.lg.jp](mailto:maizoubunka@city.nara.lg.jp)

発行 奈良市教育委員会  
630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1  
TEL 0742-34-1111(代)

印刷 株式会社 明新社  
630-8141 奈良市南京終明三丁目464番地

---

ANNUAL RESEARCH REPORT  
OF  
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA  
2021

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL  
EXCAVATION IN NARA CITY AREA IN 2021
  
- II REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT  
FOR ARCHAEOLOGICAL SITE AND MATERIALS IN 2021
  
- III THE REPORT OF ANCIENT RELICS

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION  
2024

**ANNUAL RESEARCH REPORT**  
**OF**  
**ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA**  
**2021**

---

**NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2024**